

横浜開港資料館

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

紀要 第39号

令和6年3月

八木熊次郎（彩霞）が描いた関東大震災

— 横浜開港資料館保管 「八木洋美家文書」 より —



地震発生時の八木熊次郎 八木彩霞画『大正十二年九月 関東地方大震災画録』
1923（大正12）年9月1日午前11時58分、石川仲町の理髪店で被災した八木熊次郎の様子。
昼食を食べようとしたところ、激しい揺れに襲われた。倒れる棚や左右に大きく振れる電灯、
落下する食器などが確認できる。



高島山から見た横浜の大火災 八木彩霞画『大正十二年九月 関東地方大震災画録』
『大正十二年九月 関東地方大震災画録』には、地震発生当日の八木熊次郎の行動が9枚の
スケッチによって記録されている。9月1日午後9時頃、高島山に登った熊次郎は横浜の大火
災の様子を目撃した。黒煙は石油タンクの火災である。



地震発生直後の元町・石川仲町 八木彩霞画『大正十二年九月 関東地方大震災画録』
 発災時、激しい揺れに耐えていた八木熊次郎であったが、間一髪のところで外へ逃れることができた。街は砂塵におおわれ、地面には亀裂ができていた。熊次郎は日記に「阿鼻叫喚の修羅の巷を現出した」と記している。



救助活動を行う八木熊次郎 八木彩霞画『大正十二年九月 関東地方大震災画録』
 倒潰した理髪店では、数人が建物の下敷きとなっていた。八木熊次郎は周囲に対し、救援活動の協力を求めたが、被災者たちは自らの生命を守ることので精一杯だった。そのため熊次郎は1人で救助活動を行った。



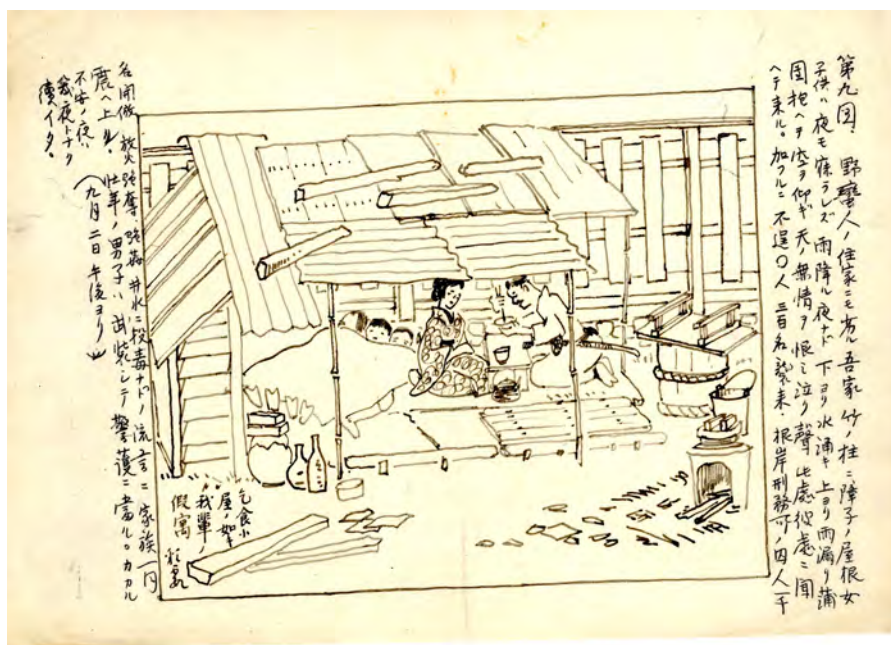
大正十二年九月 大震災画録 八木彩霞画

八木熊次郎が描いた自らの被災体験に関するスケッチ集。表紙を含め16枚のスケッチから構成されている。また、各スケッチには、それぞれの場面の説明が詳しく記されており、熊次郎の心情の変化もうかがえる。



第八圖 大正十二年九月一日午後十時半頃 八木彩霞画

横浜の大火災の様子。石油タンクや倉庫の爆発音に加え、被災者の泣く声を聞いた八木熊次郎は、「其の物凄さ地球の終焉を思わしめた」と感想を記している。野原に避難した熊次郎は自宅に迫った危機的な状況を記録している。



第九図 乞食小屋の如き我輩の仮寓 八木彩霞画

八木熊次郎と家族は9月3日まで野原で避難生活を送り、4日朝に自宅に戻って仮の避難小屋を建てた。熊次郎は「野蠻人の住家にも劣る吾家、竹の柱に障子の屋根、女子供は夜も寝られず」とその様子を記している。熊次郎一家は食糧不足に悩まされていた。

目次

特集「関東大震災100年」

論文

博物館の関東大震災一〇〇年

—首都圏の企画展示事業を中心に—

吉田 律人

西村 健

松本 和樹

1

史料紹介

八木熊次郎の関東大震災

—『大正十二年九月一日関東大震災日記』を中心に—

吉田 律人

32

博物館の関東大震災一〇〇年

—首都圏の企画展示事業を中心に—

吉田 律人

西村 健

松本 和樹

はじめに

人文科学、自然科学を問わず、「災害史」の展示は博物館にとって重要なテーマである。二〇一一（平成二三）年三月一日に発生した東日本大震災以降、その傾向はさらに強まり、関東大震災九〇年を迎えた二〇一三年には、多くの博物館や文書館、図書館において災害史関係の展示が実施された^①。神奈川県内でも横浜市、鎌倉市、藤沢市、茅ヶ崎市、寒川町、大磯町、小田原市、海老名市などの博物館及び文書館が関東大震災をテーマとした企画展を展開していた。それ以後も災害史に関する展示は全国各地の博物館等で企画され、方法論に関する議論や研究も進んでいる^②。そうしたなかで、二〇二三（令和五）年、大きな節目となる関東大震災一〇〇年を迎えることになった。

一九二三（大正一二）年九月一日午前一一時五八分、神奈川県を

震源とするマグニチュード七・九の関東地震は、東京市や横浜市などの都市部で大規模な火災を引き起こしただけでなく、沿岸部では津波、丘陵部や山間部では土砂崩れを誘発した^③。また、混乱状況のなか、流言飛語が拡大し、朝鮮人や中国人に対する迫害、殺傷事件も発生している。今日、「関東大震災」と呼称されるこの地震災害では、全体で約一〇万五〇〇〇人の犠牲者を出したほか、東京市の東半分と横浜市の大部分が焼け野原となった。その後、東京市や横浜市では帝都復興事業が進められ、街の形は大きく変化する一方、日本国内では一九二五年五月の北但馬地震、一九二七年三月の北丹後地震、一九三〇年十一月の北伊豆地震、一九三三年三月の昭和三陸地震と大規模な地震災害も相次いだ。これらはちょうど金融恐慌から昭和恐慌を経て、満州事変が終結するまでの時期と重なっている。時代を大きく見た場合、第二次世界大戦へとむかう時期に大規模な地震災害が続いたのである。

関東大震災に関する研究は周年行事的に進む傾向にあり、それは

博物館等の企画展示においても同様である。^④公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団近代歴史資料課の運営する横浜開港資料館、横浜都市発展記念館、横浜市史資料室の三施設では、一〇年前の関東大震災九〇年に際し、連携した展示企画「関東大震災と横浜」を開催、それまでの資料収集及び調査研究の蓄積を活用しつつ、『横浜関西村記念写真帖』（当時は横浜市南図書館蔵、現在は横浜市中心図書館蔵）^⑤や、『神奈川方面警備部隊法務部日誌』（横浜市中央図書館蔵）^⑥、渡辺歌郎（鶴見町会議員）の自伝『感要漫録』（横浜市史資料室蔵）などを初めて展示した。^⑦また、写真に関しては、前川謙三や岡本三郎の撮影した写真を中心に、可能な限り、撮影者や撮影時期、撮影場所が特定できるものを使用していた。^⑧その後、展示を担当した青木祐介（当時、横浜都市発展記念館主任調査研究員）、吉田律人（当時、横浜開港資料館調査研究員）、松本洋幸（当時、横浜市史料室調査研究員）の三人は、同時期に他館で実施された企画展の状況を踏まえながら関東大震災九〇年の成果とともに、一〇〇年にむけた課題を整理した。^⑨

続いて関東地方の研究者で組織される首都圏形成史研究会は二〇一四年四月五日にシンポジウム「歴史災害を伝える―『災害史』展示の現状と課題―」を青山学院大学において開催し、関東大震災九〇年を踏まえた展示のあり方について検討を行った。^⑩ここで青木が横浜の連携展示について事例紹介を行うと同時に、関東大震災の広域性やそれを意識した資料調査を提言した。また、デイスカッションでは、災害史に関する①資料論や②展示論、さらに③施設間の連携等について活発な議論が行われ、関東大震災一〇〇年にむけた準

備のほか、災害史研究の裾野を拡げていくことも提言された。その結果、『首都圏災害史研究会』が組織され、関東大震災に繋がる「関東大水害」研究へと帰結していった。^⑪

以上のような背景を前提とした上で、本稿では、関東大震災一〇〇年に関する横浜開港資料館と横浜都市発展記念館の取り組みを整理するとともに、首都圏、特に南関東（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県）で実施された企画展示事業を俯瞰しつつ、その成果と意義について考察を加えたい。なお、本稿は吉田（横浜都市発展記念館主任調査研究員）、西村健（横浜開港資料館・横浜都市発展記念館主任調査研究員）、松本和樹（横浜都市発展記念館調査研究員）の三人が分担執筆した。それぞれの担当は以下の通りである。

はじめに（吉田律人）

一、特別展「大災害を生き抜いて」について（吉田律人）

二、東京都内の企画展示（西村健）

三、神奈川県内の企画展示（松本和樹）

四、千葉県及び埼玉県内の企画展示（吉田律人）

おわりに（吉田律人・西村健・松本和樹）

《資料》関東大震災一〇〇年関連展示一覧（西村健）

最後に实地調査を基礎に三者間で議論し、その成果を吉田がまとめた。《資料》「関東大震災一〇〇年関連展示一覧」で示すように、全国で二二〇以上の展示事業が実施された。残念ながら今回の分析対象地域において、そのすべてを調査できたわけではないが、おおよその傾向を掴むことは可能であろう。なお、本稿準備中の二〇二四年一月一日、奥能登を震源とするマグニチュード七・六の

地震が発生した。被災地では現在も厳しい状況が続いているが、その点も踏まえ、「災害史」展示の意義について改めて考えたい。

一、特別展「大災害を生き抜いて」について

(1) 展示構成

横浜開港資料館と横浜都市発展記念館では、合同特別展「大災害を生き抜いて―横浜市民の被災体験―」を二〇二三（令和五）年八月二六日（土）から一二月三日（日）まで横浜開港資料館の企画展示室において開催した¹²。既述の通り、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館、横浜市史資料室の三施設では、関東大震災七〇年に開催した①横浜開港資料館企画展示「関東大震災と横浜」（一九九三年七月一七日～一〇月二四日）を皮切りに、②横浜市史資料室展示会「横浜・関東大震災の記憶」（二〇一〇年二月一日～三月二八日）、③横浜都市発展記念館特別展「関東大震災と横浜―廃墟から復興まで」（二〇一三年七月三日～一〇月一四日）、④横浜開港資料館企画展示「被災者が語る関東大震災」（同）、⑤横浜市史資料室展示会「レンズがとらえた震災復興一九三―一九二九」（同）、⑥横浜開港資料館企画展示「レンズ越しの被災地、横浜―写真師たちの関東大震災」（二〇二二年一月三〇日～四月一八日）、⑦横浜都市発展記念館企画展「激震、鉄道を襲う！―関東大震災と横浜の交通網」（二〇二三年三月一二日～七月三日）などを開催してきた¹⁵。また、横浜開港資料館では、年一回、新収蔵資料を中心に、関東大震災に関するミニ展示を実施し、成果の発信に努めている¹⁶。本特別

展はこれまでの蓄積の延長線上に位置している。ここでは展示の概要等について紹介したい。

本展示の肝となるのは、これまで三施設が収集してきた被災者の体験記（日記・回想録）である。具体的には、元街尋常高等小学校の教師であり、また、洋画家でもあった八木熊次郎（彩霞）の日記及びスケッチを中心に、横浜貿易新報社の記者であった竹内八十吉（枯山）の体験記（「其の日を顧みて」、『横浜貿易新報』連載¹⁷）、老松尋常高等小学校の児童であった葛城久子の体験記（「大震災の日より」、『新興の横浜』連載）から関東大震災時の横浜の状況を再現していった。三者の記録はこれまでの企画展示でも出陳してきたが、内容を深く紹介する形で展示したのは今回が初めてである。横浜開港資料館に保管されている八木の資料群、特に『大正十二年九月一日関東大震災日記』前編及び続編と、「大正十二年九月大震災画録」等のスケッチをストーリーの主軸に置きつつ、竹内や葛城の体験記を据えることで、状況の変化を時系列に沿って追った。

関東大震災の被災体験は年齢や性別、社会的な立場によって多種多様であり、一〇〇人いれば、一〇〇人分の被災体験が存在する。それらは一つ一つの点だが、集合させていくことで、関東大震災の災害像を面として描いていくことができる。ここで三者の記録を意図的に混在させることで、混乱する被災地の状況を再現できないかと考えた。また、可能な限り、作成年月日が早い体験記を活用するという点にも留意した。時間が経過した後記された回想録や証言も関東大震災の状況を知る重要な手がかりになるものの、どうしてもバイアスがかかってしまうため、その利用は慎重にならざるを得

ない。一方、被災直後に作成された体験記についても史料批判は必要だが、記憶に関して大きな誤りはないだろう。三者の体験記からは刻々と変化する被災地の惨状が伝わってくる。

展示は関東大震災を概観するプロローグのほか、第Ⅰ章「第一次世界大戦前後の横浜」、第Ⅱ章「横浜の壊滅」、第Ⅲ章「ジャーナリストの関東大震災」、第Ⅳ章「混乱する被災地」、第Ⅴ章「避難場所を求めて」、第Ⅵ章「体験記が語る関東大震災」、第Ⅶ章「関東大震災の記録化」から構成される。このうち第Ⅰ章と第Ⅱ章、第Ⅴ章は八木の記録、第Ⅲ章は竹内の記録、第Ⅳ章は葛城の記録を中心に構成した。三者の避難ルートを考えると、八木は市街地の南東から西側を大きく迂回して北部へ、竹内は中心部から北上して西部へ、葛城は北部から中心部を通って南部へ移動している。三者の避難ルートはいくつかの点で交差し、それぞれの視点から被災地となった横浜の様子を記録している。ここで市街中心部の地域はおおよそカバードできた¹⁸と考える。共通点として、三者ともに九月一日は高台から横浜が焼き払われる風景を見ており、さらに翌日には「朝鮮人暴動」に代表される流言を記録していた。これらは横浜の状況を考える際の基本的な事象に位置付けられるだろう。

そうした体験記を補う資料として、岡本三郎や前川謙三に加え、西野芳之助、中野春之助の撮影した写真を用いつつ、被災地の惨状を視覚的に提示していった。関東大震災に関する写真はプリントだけでなく、写真集や災害誌、グラフ誌、絵葉書等の形で広く流通していた。それゆえ、今日でも多くの写真資料が残っているが、「関東大震災」という表象（イメージ）のみで認識されるため、①いつ、

②どこで、③誰が、④何のために撮影したのか、という写真そのものの分析に踏み込んでいない。三施設では、この点を押さえながら資料収集を行っており、近年は西野や中野の撮影したガラス乾板の収集・保存に成功している¹⁸。そこから得られた高精細な画像を三者が通ったルートに沿って並べると同時に、可能な限り大きく展示することで、臨場感を演出した。特に導入部分において展示した「横浜駅のプラットホーム」は、太田峰尾駅長の細かい表情など細部まで確認できるようになった。

他方、企画展示室中央のケースを中心に展開した第Ⅵ章「体験記が語る関東大震災」では、横浜開港資料館所蔵の『佐久間権蔵日記』や『黒河内崑日誌』、『佐藤謙三日記』、横浜市史資料室所蔵の『感要漫録（歌郎の一代）』や磯野庸幸の書簡、日高帝の体験記、さらに個人所蔵の『飯田助夫日記』や多勢幾代の体験記などをを用いながら関東大震災の多様な側面を提示した。そして最後の第Ⅶ章「関東大震災の記録化」では、中野春之助の残したガラス乾板を事例に、関東大震災の記録化とその継承について整理した。

体験記の書き手が頻繁に変化したことで、見学者の混乱を招いた部分もあったかもしれないが、一次史料から一〇〇年前の横浜の状況を再現することができた。先入観に捉われず、体験者の記した文字に目をむけることで、生々しい被災状況や心情の変化等が浮かび上がってくる。過去の事象は史料の実証的な分析以外からは語れない。本展示では、体験者の記録を通じて、そうした歴史学の基礎的な部分を見学者に提示できたと考える。なお、一〇年間の活動の成果とともに、新たに西村健と松本和樹を執筆者に加える形で、関東

大震災九〇年の際に作成した『関東大震災と横浜―廃墟から復興まで』の改訂版を刊行した。⁽¹⁹⁾

(2) 他機関との連携事業

横浜開港資料館や横浜都市発展記念館では、企画展示室の展示だけでなく、ミニ展示コーナーにおいても、「関東大震災を伝える―災害情報の形成と展開―」(二〇二三年五月二六日～八月二五日)、「古き横浜の壊滅―O・Mプール旧蔵資料より―」(八月二六日～一月三〇日)、「災害は忘れた頃にやってくる―丹沢地震と横浜―」(二〇二三年二月一日～二〇二四年二月一日)を実施したほか、アウトリーチ展示として横浜市役所二階のプレゼンテーションスペースでも「横浜市庁舎の関東大震災」(二〇二三年一月一六日～一月二九日)を開催した。また、横浜シティガイド協会と協力してミニ講座と街歩きをセットにしたガイドツアー「関東大震災の被災体験を歩く」を四回開催、特別展の内容とリンクする形で、八木熊次郎や竹内八十吉、葛城久子の避難ルートの追体験を行った。こうした事業を通じて、体験記のみでは語れない部分を補った。

加えて、九月三〇日の記念講演会では、『災害の日本近代史』(中央公論新社)を上梓した聖心女子大学教授の土田宏成氏を招き、「日本史のなかの関東大震災―防災から防空へ―」と題した講演をいただいた。関東大震災の被害は、ヨーロッパが主戦場となった第一次世界大戦において、空襲を経験しなかった日本人に大きな衝撃を与えた。以後、陸軍省と内務省、さらに防護団と消防組の対立を含みながら大都市の防空体制が構築されていく。⁽²¹⁾つまり、歴史の流れを

見た場合、関東大震災はその後の第二次世界大戦にむけて、防空体制を構築していく契機になったのである。二〇二五(令和七)年の「戦後八〇年」を意識しつつ、土田氏には関東大震災から戦時体制への動きを解説してもらった。

他方、今回の関東大震災一〇〇年の特徴としては、他機関と協力しながら各種事業を展開した点が挙げられる。特に神奈川県内の博物館とは、神奈川県博物館協会の「神奈川震災一〇〇年プロジェクト」を核に、相互に協力しながら展示、講演会等を実施した。前回、一〇年前は博物館同士の相互連携が不十分だったため、情報交換もなく、一部では展示内容も重なったが、今回はプロジェクトに参加した各館の事前調整によって、それぞれ切り口の異なる展示を展開することができた。また、この点は展示物の調整に関しても活かされており、例えば、横浜開港資料館では、横浜都市発展記念館の「激震、鉄道を襲う!」で出陳した木村義麿旧蔵関係資料を神奈川県立歴史博物館、小田原郷土文化館と調整しつつ、それぞれに貸し出したほか、資料に関する調査を神奈川県立歴史博物館、大磯町郷土資料館と一緒に実施した。その様子に関しては、二〇二三(令和五)年三月七日放送のNHK「首都圏ネットワーク」などで報じられている。

さらに首都圏形成史研究会とも協力して講演会『関東大震災』研究の最前線』を横浜開港資料館の講堂において開催、関東大震災の被害の実態を解明した諸井孝文氏、関東大震災一〇〇年の展示を担当した横浜みなと博物館学芸員の三木綾氏や日本新聞博物館学芸員の菅長佑記氏に講演いただいた。これらの事業を通じて、博物館

の視点から関東大震災の最新の研究成果を提示できたと考える。

こうした他機関との連携はマスコミとも実施した。特にNHK横浜放送局とは、二〇二一年頃から担当者間で準備を進め、西野芳之助が撮影した写真原板（ガラス乾板）の8Kカラー化を試みた。AI等のデジタル技術を応用したモノクロ画像のカラー化は各方面でも進んでおり、国立科学博物館の企画展「震災からのあゆみ―未来へつなげる科学技術―」でも同館所蔵のガラス乾板写真が東京大学の渡邊英徳教授によってカラー化されたほか、九月二日、三日に放送されたNHKスペシャル「映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間」は、カラー化によって得られた知見だけでなく、災害のリアリティーを視聴者に与えた。しかし、モノクロ画像のカラー化には、実際の色を完全に再現できないという問題もあり、分析対象として扱う場合は慎重な姿勢が求められる。筆者自身もカラー化には懐疑的な部分があるが、写真の検証方法としてのカラー化は有効だと考える。今回、西野芳之助が撮影したパノラマ写真をカラー化したことで、従来、判明しなかったいくつかの事実が浮き彫りとなった。紙幅の関係上、この点に関しては改めて別稿で論じたい。

カラー化したパノラマ写真の画像は、アウトリーチ展示「横浜市庁舎の関東大震災」においてタペストリーを用いた方法で大きく展示したほか、横浜国立大学で開催された「ぼうさいこくたい二〇二三」（九月一七日、一八日）でも紹介された⁽²²⁾。また、NHK横浜放送局とはSNS上で連載された漫画「筆先のあなたへ」（作…したら領）でも連携し、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館が設定等の監修を担当した。この作品は関東大震災の発生前後の横浜を

描いたもので、漫画という親しみやすい方法を通して、災害の状況を発信している。加えて、この作品は舞台にもなり、関東大震災一〇〇年の当日となる九月一日に神奈川県立音楽堂で上演された。出演者の服装等に若干の違和感があったものの、観客に地震災害の恐ろしさは伝わったと考える。

以上のように、横浜開港資料館及び横浜都市発展記念館の企画展示事業では、これまでの博物館活動の蓄積を基礎としつつ、一次的な歴史資料を中心に展示を構成、関東大震災時の横浜の状況を再現した。また、神奈川県内の博物館やマスコミと協力することで、一〇年前の関東大震災九〇周年以上に効果的な情報発信ができたであろう。こうした蓄積や人的な繋がりは一朝一夕にはいかず、信頼関係の構築を含め、学芸員の地道な活動が不可欠である。そうした成果を基礎に、さらなる調査研究の進展を図っていきたい。

二、東京都内の企画展示

（1）東京都復興記念館

一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災において、現在の東京都二三区の中心部（千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区、台東区、墨田区、江東区の全部または一部）である東京市の一五区では、震災全体の死者・行方不明者数約一〇万五〇〇〇人の六五パーセントに相当する約六万九〇〇〇人の犠牲が生じた。また、住家の被害も甚大であり、一六万八〇〇〇棟以上に被害が生じたことが明らかになっている。東京市以外の東京府下においても

一七二七人の死者・行方不明者が生じ、三万六〇〇〇棟を超える住家被害が出ており、島嶼部を除く現東京都域のほぼ全域が震災の影響を受けたといえる。⁽²³⁾

東京都においては、震災被害の大きさに比例して震災一〇〇年関連の展示が多く開催されており、展示一覧からは八〇以上の展示が確認できる。その特徴は、地方自治体等の公的機関が運営する博物館や図書館での展示のみならず、民間の企業・団体が設置した博物館でも展示が行われたことにあり、震災の記憶が多岐にわたる団体にとって重要な意味を現在も持ち続けていることを改めて実感できる。本章では、東京都で開催された震災一〇〇年関連の展示のうち、筆者が特に注目した公的機関および民間団体主催の展示について、言及していきたい。

震災において、最も多くの人的被害を出した地は、本所区（現墨田区）の被服廠跡地であり、火災旋風によって約三万八〇〇〇人もの人命が失われた。この地は震災犠牲者慰霊の中心地となり、一九三〇（昭和五）年に震災記念堂（現東京都慰霊堂）が建立され、現在も九月に慰霊法要式典が行われている。震災記念堂の付帯施設である震災復興記念館（現東京都復興記念館）は、「関東大震災の惨禍を永く後世に伝え、また官民協力して焦土と化した東京を復興させた当時の大事業を永久に記念するため」に一九三一年に開館した施設であり、現存する震災関連展示施設として最も古い歴史を持つ。同館及び慰霊堂内には、空襲被害を免れた膨大な数の震災関連資料が保存されていたが、戦後長らく顧みられることがなく、展示も老朽化して質の高いものとは言えなかった。しかし、二〇〇六（平成

一八）年度に神奈川大学が写真資料に限定した調査を実施し、それ以外の資料については、二〇〇八年度に神奈川大学非文字資料研究センター、二〇〇九年・二〇一〇年度に関東大震災資料調査会（代表・北原系子）が主体となつて学術的な調査を実施した結果、貴重な資料の詳細が明らかになる。⁽²⁵⁾

本調査の成果も踏まえ、同館では二〇一三年より段階的にリニューアル工事が行われて二〇二三年に完了する。⁽²⁶⁾リニューアル後の常設展示室一階では、震災に関するトピックを「関東大震災の発生と被害状況」、「避難の様子・救援救護活動」、「関東大震災の復興事業」の三エリアに分けて展示しており、屋外にも大型被災資料が展示されている。本展示は、被害のすさまじさを物語る被災資料や罹災者の記した体験記録・体験画、海外からの救護関連資料、復興事業関連資料など、多くの実物資料が展示されていることが特徴であり、原資料の持つ迫力を十二分に感じることができる。加えて同館が所蔵する多数の写真資料をディスプレイの地図上から検索・表示でき、説明が読める「震災写真マップ」や、震災翌年に東京市学務課がまとめた墨田区内の小学校の震災体験記を、現在の生徒が朗読したデータを聞くことができる「作文朗読コーナー」、巖谷小波が震災直後に書いた児童向けの戯曲「震災記念おとぎ歌舞伎 閻魔裁判 鯰髭拔」のアニメ動画など、最新の技術を駆使したコンテンツも用意されていることが注目できる。常設展示以外でも、二〇二三年に開催された企画展では、同館が所蔵する小学校生徒の体験記の分析や、一九二七〜三〇年にかけて財団法人東京震災記念事業協会が調査した結果をまとめた「震災死亡者調査表」から得られる知見が提

示され、同館の研究が深化していることを感じさせられた。関東大震災史を扱う常設館として同館に課せられた役割は大きく、今後もその活動は震災史研究の核となるものと期待できる。

(2) 墨田区立すみだ郷土文化資料館

震災被害を激甚に受けた旧東京市域に存在する地域博物館では、規模は様々であるが大多数の館で震災一〇〇年関連の展示が行われた。このうち、墨田区のすみだ郷土文化資料館で開催された企画展「関東大震災一〇〇年―本所の被害と復旧、残されたもの―」では、先述した東京都復興記念館と連携し、同館が所蔵する東京帝国大学の学生たちによる罹災者調査記録「避難者カード」が展示されたほか、史料の分析結果を反映した「本所区民の住んだバラック所在地図」が展示され、区外への避難を余儀なくされた区民が多く存在したことが示された。また、同じく東京都復興記念館所蔵の緑尋常小学校の校務日誌が展示され、児童や保護者の安否情報や避難による転校・復帰情報などが詳細に記載されていることが紹介されていた。この他にも、区内の様々な博物館が所蔵する震災関連資料が複数展示されており、他館との連携を有効に活用した展示であることが特徴といえる。新規公開資料としては、近年寄贈された一二九会関係資料が興味深い資料であった。同会は一九七一年（昭和四六）年に被服廠跡地に避難した生存者により結成され、体験記などを編纂した組織であるが、震災の記憶がどのように当事者たちの手によって継承されていたのかを知る貴重な資料といえるだろう。

(3) 江東区中川船番所資料館

現江東区域の深川区は、本所区と並び震災被害が甚大であった地域である。江東区内では深川東京モダン館、古石場文化センター、江東区立深川図書館、江東区総合区民センター、大正記念館など、複数の施設で震災一〇〇年関連展示が行われたことが他の自治体に見られない特徴である。このうち、以前より災害史関連の企画展を開催してきた江東区中川船番所資料館では、企画展「震災と江東―絵葉書で見る関東大震災―」が開催された。本展示では、同館が長年蓄積してきた震災絵葉書の研究成果²⁷が遺憾なく発揮され、撮影地の比定方法やフェイクを含む絵葉書の見方について紹介がなされていた。また、警視庁保安部建築課が作成した震災被害建築物被害調査関連資料は、警視庁が行った調査記録として残存する唯一の資料であり、大変貴重なものであることが解説されていた。この他にも、江東区登録有形文化財である「震災復興橋梁図面」が展示されるなど、地域に残された貴重な震災関連資料が複数展示されていることが印象的であった。

(4) 千代田区立日比谷図書文化館

多くの館が地域の震災被害を中心とした構成で展示を行う中、復興に焦点をあてた展示会を開催したのが、千代田区立日比谷図書文化館である。特別展「関東大震災一〇〇年 首都東京の復興ものがたり―未来へ繋ぐ一〇〇年の記憶―」では、前期展示において初公開資料である千代田区指定文化財「震災復興橋梁図面」と「旧神田区復興小学校建築関係文書」が展示され、大きな話題となった。特

に後者は、校地を確保するまでの様々な折衝に当局が尽力していたことを知ることのできる貴重な資料であり、今後の復興小学校建設過程の研究に大きく資するものであった。また、後期展示でも初公開資料の千代田区指定文化財「今川小路共同建築関係文書」や、区内の看板建築である「海老原商店」関係資料など、千代田区内の復興期の建築物に関する貴重な資料が展示されていた。ここでは、資料のみならず復元模型も展示されており、平面的な図面等の資料からは捉えきれない復興期建築の特徴を、模型によって詳細に把握できる工夫がなされていた。その他、丸の内オフィス街建築関連資料の展示から、震災後の一時期、丸の内に中央諸官庁や民間の事務所が臨時移転をして帝都復興の中心地となっていたことが示されるなど、現千代田区域における震災復興の特性を鋭くとらえた展示であるという印象を受けた。

(5) 板橋区立郷土資料館

震災被害が東京市内に比べて軽度であった地域においても、優れた展示が開催されている。このうち、特筆すべき展示であったのが、板橋区立郷土資料館の企画展「いたばしの現代化―関東大震災をきっかけに板橋はどう変わったのか―」である。現板橋区域の東京府豊島郡志村地域は、震災復興の都市計画の中で工業地域の甲種特別地区に指定され、工場が次々と建設されることになる。本企画展では、志村地域における土地区画整理関係資料や進出した工場に関する資料に加え、増加した人口を支えるための住宅地開発関係資料などが豊富に展示され、農村地帯であった同地域が「工都板橋」と称され

るまでに姿を変える様子が詳細に把握できるように工夫されていた。また、戦後における地域の復興についても視野を広げ、板橋火薬製造所の跡地に設置された理化学研究所と産業教育共同実習所関係資料の展示から、工業を軸に復興する地域について紹介した点にも注目できる。震災復興事業がもたらした地域変容を鮮やかに描き出した本展示は、地域博物館における震災復興をテーマとした展示の一つの到達点といえるだろう。本展示の図録も大変充実した内容であるため、ぜひ一読されることをお勧めしたい。

(6) 中野区立歴史民俗資料館

板橋区域同様、震災被害が東京市に比べれば少ない地域の震災史をテーマとした企画展を開催したのが、中野区立歴史民俗資料館の企画展「発生から一〇〇年記録された関東大震災」である。現中野区域には、東京市中から多くの罹災者が避難してきたが、これらの避難者を保護するために行政が作成した「避難者名簿」や「震災調査票」および食料や衣類の配給関係資料などの一次史料が多く展示されていることが本展示の魅力の一つであった。また、本展示では、震災体験記を重視して展示資料に関係する要所にパネルで体験者の声を紹介していたことが特色である。この体験記パネルは単に引用文を記載しているのではなく、解説も付されており、これが当該地域に詳しくない筆者にとつて大きな理解の助けとなった。また、体験記の分布図が示されていたことも、他に例を見ない試みであると考えられる。体験記録が貴重な資料であることは間違いないが、文字のみでは成立しない展示においてこれを有効活用することは困難が

伴う。本展示の手法は体験記録が資料を理解する上で有効に機能する一つの解を示した展示であると評価できる。

(7) 赤十字情報プラザ

東京都内で開催された関東大震災一〇〇年関連展示では、民間団体所属の施設でも複数の展示会が行われた。このうち、最もメディアの注目を集め話題となったのが、日本赤十字社の本社に併設されている赤十字情報プラザの企画展「関東大震災一〇〇年温故備震―ふるきをたずぬ明日に備える―」である。日本赤十字社は設立当初は戦時救護のみを想定した組織であったが、一八八八（明治二二）年の磐梯山噴火の際に被災民救護を行って以来、災害救護において重要な役割を果たし続けている組織である。展示では、震災発災当日における宮城前広場での救護活動から、各地の赤十字社員およびボランティアによる活動、海外の赤十字による支援活動、日赤救護班による感染症予防の取り組みなどがパネルで紹介されていた。また、震災翌月に発行された日本赤十字社機関誌『博愛』震災号（第四三七号）やアメリカ赤十字社救護団のピーター医師が東京・横浜の被災地および救護現場を撮影した写真アルバムなど、貴重な原資料が展示されていた。これらの資料は、会場内に複製が用意されて内容を詳細に知ることが出来る工夫がなされていたことが注目できる。本展示の内容は、同館の公式ウェブサイトで閲覧できるため、未見の方はぜひご覧いただきたい。

なお、同館では、事前予約の上でこれらの所蔵資料を閲覧できる。筆者は資料整理担当者である川田恭子氏の厚意で、同館所蔵写真の

データベースといくつかの資料を閲覧させていただいたが、他の機関では見ることでできない資料が多く含まれており、災害救護史を研究する者にとって大変有益な施設であることを実感した。今後、同館の所蔵資料がより多くの研究者に活用されることを期待したい。

(8) 帝国データバンク史料館

民間企業が設置した施設において開催された震災一〇〇年関連展示も見えるべき点が多かった。一九〇〇（明治三三）年創業の民間信用調査会社、帝国興信社（のち帝国興信所）以来の歴史を持つ株式会社帝国データバンク所属の帝国データバンク史料館が開催したテーマ展示「関東大震災と帝国興信所」はその一つである。帝国興信社は震災によって東京市京橋区の本社ビルが甚大な被害を受け、業務を一時中断したが、現港区の泉岳寺を仮事務所として再出発を図り、早期に信用調査事業を再開して震災後の経済復興に寄与した。展示では、写真資料や文献資料と共に震災一周年を記念して編纂された同社社員二〇八名による震災体験記、「震災手記」の記述から同社の被害や復興に関する取り組みが紹介されていたことが注目できる。本手記は個人的な震災記憶のみならず、同社社員としての視点から震災の記憶が語られていることが特徴であり、当時の企業人が震災被害や復興をどのように捉えていたのかを知る貴重な資料であると感じた。展示では、このうち三〇名分の手記がパソコンで閲覧できるコーナーがあり、原資料の画像と共に翻刻文が付され、一般の来館者にも分かりやすく資料に触れることのできる工夫がなされていた。本展示の様な視点は、地域博物館の展示では見られないもので

あり、企業博物館の役割を改めて認識させるものであった。

(9) 在日韓人歴史資料館、高麗博物館

震災時、被災地およびその周辺で流言飛語が流れ、多数の朝鮮人や朝鮮人と誤認された中国人および日本人が暴行・殺傷される悲劇が生じたことは周知の事実である。この問題は、震災一〇〇年をテーマとしたメディアの報道でも頻繁に取り上げられ、千葉県東葛飾郡福田村（現野田市）で生じた事件をもとにした映画『福田村事件』も大きな注目を集めた。今年度開催された展示においても、本問題を扱った施設は複数あるが、このテーマに特化した展示を開催したのが、在日韓人歴史資料館の特別企画展「一九三三―二〇二三 歴史の証言者たち」と高麗博物館の企画展「関東大震災一〇〇年 隠蔽された朝鮮人虐殺」である。

在日韓人歴史資料館の展示では、本問題を海外の視点から捉えたコーナーが設けられ、日本で事件を目撃したドイツ美術史学者オットー・ブルヒャルトによるドイツの新聞への寄稿文や、アメリカの韓国親友会が事件の真相究明を求め、米国務長官宛てに送った書簡などが展示されていた。その他、韓国放送通信大学校提供の証言記録動画が常時上映されており、江東区民による証言や千葉県八千代市の観音寺で開催される犠牲者追悼慰霊祭など、貴重な映像記録を閲覧できるように工夫されていた。

また、高麗博物館の企画展では、同館がこれまで蓄積してきた本問題の概要や発生要因を解説するパネルが展示されたほか、新規発見史料として画家の淇谷が描いた「関東大震災絵巻」の原資料が展

示され、多くの来館者の注目を集めていた。本企画展では、近年における政府・自治体の本問題に対する対応や「虐殺否定論」に関する解説など、本事件をめぐる現代の諸問題についてのパネルが充実していたことが特徴であり、本事件が現在も未解決の社会問題であることを改めて想起させるものであった。

本章で紹介した東京都内の震災一〇〇年関連展示は、全体のごく一部に過ぎないが、いずれの展示も震災に関する新たな知見や新規資料を提示するものであり、今後の震災史研究に大きく資する成果をあげたものと評価できる。筆者は二〇一三（平成二五）年に前職である墨田区立すみだ郷土文化資料館で震災九〇年関連企画展示を担当したが、その時とは比較にならないほどの多くの館で震災関連展示が開催されたことに、深い感慨を覚えた。この流れが一過性のものではなく、今後も継続した調査研究が各館で行われることを希望する。また、東京都においては、神奈川県のような各館の横のつながりが希薄であることが課題といえる。震災被害及び復興史の研究は一地域のみで完結出来ないテーマであるため、今回の展示担当者の知見を共有できる場が構築されることを期待したい。

三、神奈川県内の企画展示

(1) 神奈川県立歴史博物館

一〇〇年という距離感のなかで、関東大震災をどのように位置づけ、展示するか。こうした問いを立てた神奈川県立歴史博物館の特別展「関東大震災―原点は一〇〇年前―」では、関東大震災を「多

くの人や物が失われた大災害」であった一方、「復興の過程で現在につながる都市の骨格が形作られた」現代社会の「原点」の一つと捉えたうえで、震災で甚大な被害を受けた神奈川県とその復興過程、そして現代の「原点」となった復興後の神奈川県を紹介する特別展示を開催した。展示は大きく、県下の被害の実態を紹介する一章「震える大地」、復興に尽力した人の活動を中心に、横浜や東京における復興の諸相を取り上げた二章「奮う人たち」、展示のキーワードである「原点」という視点から震災復興後の神奈川県に注目した三章「原点は一〇〇年前」から構成される。

一章では、都市、農村、山間部、河川、沿岸部など地域ごとの被害の諸相が明らかにされる。丹沢では山崩れが発生して造林地が崩壊し、根府川では土石流が発生。震災後に撮影された写真からはこれらの被害の大きさが伝わってくる。相模湾では隆起が起こり、海況に変化が生じていた。農村部では山津波や堤防の決壊により水田に深刻な被害が出た。二章で明らかにされたのは、被害に直面した人びとが復興に向かっていく姿である。神奈川県立歴史博物館の旧館にあたる旧横浜正金銀行本店は、震災後の火災で内装や屋上のドームを焼失した。周囲では多くの人が犠牲になる一方、建物内に避難することで救われた命もあった。二章でまず紹介されるのは、旧横浜正金銀行に避難して命を救われた人びとが見た震災の被害の様子であり、そこから復興していく旧横浜正金銀行本店の姿である。このほか、本章では復興に尽力した人物や団体に取り上げられた。印象深いのが、震災当時芝浦製作所で技術部長、常務取締役を兼務していた岸敬二郎である。震災で壊滅的な被害を蒙った芝浦製作所の

復興に尽力した岸は、一九二四（大正一三）年一月一日の丹沢地震で東京の自宅が損傷する被害にあいながら、「過去不煩悶 現在努力 将来持希望」（過去を煩悶せず現在に努力し、将来に希望を持つ）を標語に工場の再建に努め、一九二七（昭和二）年に五九歳で没する。こうした岸の姿勢は各所に宛てた書簡から読み取ることができる。「原点」をキーワードとする三章では、県下全体の復興の様子を伝える資料として吉田初三郎の「神奈川県鳥瞰図」を紹介し、具体的な「原点」の事例として、地質調査、森林の再生、足柄茶を取り上げる。足柄茶のブランド化は戦後であるが、復興後の地域をどのように振興するか、というなかで登場した足柄茶は、本展示の示すように、関東大震災を「原点」と見ることもできる。

「原点」という視点を軸に震災の全体像を描こうとした同館の展示は、復興後の社会（本展示でいえば「現代」）をどのように捉えるか、という論点を提起している。この論点を考える上で注目したいのが、二章で紹介された横浜市（役所）教育課のポスターである。二枚のポスターは一九二六年、一九二八年に作成されたもので、九月一日の復興にあわせて勤儉貯蓄を訴える。一九二八年のポスターでは、貯金箱を抱える鯨と、がま口の財布を持つ着飾った女性が描かれる。女性の腕には腕時計が巻かれ、手には傘を持っている。貯金を募る鯨から逃げようとする女性の背後には、両親を失った子供や妻を失った男性、飢餓に苦しむ人びとなど、震災時の状況が描かれ、「受難の惨害をかへり見よ」と訴える。ポスターからは、「惨害」の記憶として刻まれた九月一日を、「生活の態度を省みる」ための日と位置付け、「勤儉」を奨励して国民の意識の引き締めをはかる

うとする狙いが読み取れる。震災からの復興が一段落し、生活が日常を取り戻していくなか、震災の位置づけや語られ方も変わっていく。こうした変化もまた、復興後の社会を考える上で重要な問題といえる。

(2) 神奈川県立公文書館

神奈川県立公文書館の企画展示「公文書館資料で見る関東大震災」では、館蔵の公文書や写真資料から県下の震災の被害と復興について紹介する展示が開催された。展示は第一章「震災直後の神奈川県内」、第二章「震災直後の県庁・郡役所と県民生活」、第三章「震災からの復興」、第四章「教訓と防災対策」の四つの章から構成される。

第一章では震災直後の県内各地の状況が紹介されている。本章では震災後に実施された救助や医療活動、犠牲者の死体検案などにも触れている。大正〓昭和にかけて衆議院議員、貴族院議員を務めた相模国大住郡戸田村（現在の厚木市）の小塩八郎右衛門の長男寛に關する死体検案書からは、寛の死亡原因が家屋の欄干や柱による圧死であることがわかり、震災による家屋倒壊の大きさがうかがえる。第二章では、県庁や郡役所の動向や、彼らの纏めた書類から見える人びとの動きが紹介される。自警団の活動への警戒や、配給物資の支給事務の様子が纏められた郡役所の綴からは、震災時における郡役所の役割がわかる。足柄下郡役所の秘書文綴におさめられた臨時震災救護事務局宛の投書の写しは、震災後の官公署の活動に対する人びとの不満の様子や、人びとの動向に敏感になっていた郡役所の様子が垣間見えて興味深い。第三章では、県下で実施された復

興事業について紹介される。震災後の神奈川県では、復興局横浜出張所や神奈川県による復興事業で土地区画整理や国道の拡幅が実施された。本章で紹介された事例として興味深いのは、震災で大破した浄見寺の堂宇と大岡家廟の再建を目指した運動である。地域有力者によって進められたこの活動は、昭和初期に各地で見られた顕彰運動とつながるものであり、震災復興後の地域の動きを知る際の手がかりとして貴重な資料といえる。第四章では、神奈川県や各地域が関東大震災をどのように教訓とし、防災へとつなげていったのかが明らかにされる。本章ではまず県の取り組みとして、『神奈川県震災誌』の編纂や、震災記念日の設定などの事例を紹介するほか、現代の事例として、県が作成した地震災害に関する県民の理解を促進するための冊子（『地震のはなし』）などを取り上げる。各地域の事例では、文化財保護の事例に注目する。震災で多くの文化財が被災した鎌倉では、文化財を災害から保護し、後世に伝えるための施設の設置が目指され、一九二八（昭和三）年四月に鎌倉国宝館が開館する。本章で興味深いのは、震災によって出現した遺構の保護の事例である。関東大震災と翌年の地震により、茅ヶ崎の水田で杭が出現した。歴史学者の沼田頼助の調査から、杭は一九八（建久九）年に相模川に架けられた橋脚の遺構であることが明らかにされ（「神奈川縣茅崎町出現の古橋柱」）、今日、史跡旧相模川橋脚として保護されている。

県内各地の震災と復興、その後から今日に至るまでの動向を網羅的に紹介した同展示は、歴史資料として重要な県が作成した公文書、県内に伝存する古文書等の記録類を収集・保存してきた神奈川県立

公文書館だからこそできた展示であり、公文書の持続的な収集・保存が関東大震災を後世に伝えるうえで重要であることを示している。また、同館の展示で特筆したいのは、公文書を通じて同時代の人びとの声や動きが伝わってくることである。公文書に記録された様々な出来事をどのように読み解き、展示するか、という点において、同館の展示は示唆的である。

(3) 横浜みなと博物館

横浜みなと博物館の企画展「関東大震災一〇〇年 船と港から見た関東大震災」では、港と船に焦点をあてて関東大震災の実態を紹介する展示が開催された。展示は「プロローグ 震災前の横浜港」、「1 関東大震災発生」、「2 船による救助活動」、「3 震災による港の変化」、「4 震災の教訓を生かして」からなる。

プロローグでは震災直前の横浜港の様子を紹介する。震災直前の横浜港は、貿易量の増大への対応から大さん橋や新港ふ頭など、近代的な港湾設備の整備が進んだ。一方で、東京港や神戸港の台頭により、横浜港の貿易港としての地位は相対的に低下しつつあった。こうした状況下で発生した関東大震災の被害の様子を紹介したのが1である。当時の状況を伝える動画からは、港や市街地における倒壊、焼失の被害の甚大さや、被災した人びとの疲労や悲壮感が伝わってくる。2では、震災直後に横浜港で見られた被害を船舶の活動に注目して明らかにする。震災当時、横浜港に停泊していた多くの船舶は、船舶無線で震災発生を打電した。これや丸の電報や、無線電信の送信状況を伝える図は、混乱下の緊迫した情報伝達の様子を示してい

る。本章では海軍艦艇や商船会社の船舶による様々な救援活動が紹介されるが、興味深いのが救援物資の輸送や避難者の受け入れにあたった各港の動向である。「慰問品急募」を周知する大阪府社会課大阪府救援部作成のポスターには、大阪に来る一日五千人の罹災者のため、「血あり涙ある人士！ 衣類、下駄、慰問袋の御寄贈を乞ふ」と記されており、関東大震災の救援活動が港や船を通じて広い規模で行われていたことを示している。3では、横浜港の復興を中心に、関東大震災後の各港の変化について取り上げる。震災で甚大な被害を受けた横浜港は、復旧工事によって機能を回復する。また、震災前の一九二一（大正一〇）年から着工された第三期築港工事の再開による横浜港の拡張、埋立地の造成による臨海工業地帯の整備も進められ、現在の横浜港につながる原型が形成される。拡張の様子は、展示された一九二三年と一九三七（昭和一二）年の二枚の空中写真を見れば一目瞭然である。震災は、横浜港以外の港にも影響を及ぼした。震災時の救援活動で設備不足の問題が顕在化した東京港では、日の出ふ頭の建設、芝浦・竹芝両ふ頭の整備が進められ、東京開港の気運が高まる。神戸港は、横浜港で生糸輸出が滞るなか、生糸輸出港として成長する。本章で注目されたのが清水港である。京浜地方から最も近く大型船舶が入港できる清水港は、避難民の受け入れや救援物資輸送で大きな役割を果たした。大正期に木材港としての性格を強めていた清水港は、震災後、復興木材の供給地として発展し、木材荷役設備の拡充が進む。清水港の木材港としての活躍は、展示された鈴与商店関係資料に見ることができる。4では、近年の港における防災対策を取り上げる。平成に入ってから大規模地震

が発生している日本では、全国の港を活用し、災害時に陸上交通が寸断された地域での海上物資・人の輸送を行い、被災地の救援につながる、「命のみなとネットワーク」の形成が国土交通省により推進されている。また、横浜港でも大規模地震発生時の緊急物資の輸送方法などを定めた「横浜港における首都直下地震発生時の震後行動計画」の作成や、港湾設備の耐震強化など、大規模地震への備えが進んでいる。

さて、本稿執筆中の二〇二四（令和六）年一月一日、「令和六年能登半島地震」が発生した。石川県内の道路網は寸断され、各港も大きな被害を受けた。輸送手段が大きく制限されるなか、輪島では海上自衛隊のホバークラフト揚陸艇による物資・車両の輸送が行われ、一月一四日には、七尾港の大田岸壁に接岸した大型フェリー「はくおう」が避難者の受け入れを始めるなど、港と船を通じた救援活動が進んでいる。展示で示された取り組みが現在進行形で行われていることに強い衝撃を覚えるとともに、震災を「わがこと」として考えることの難しさを痛感している。

（4）茅ヶ崎市博物館

茅ヶ崎市博物館のパネル展「関東大震災一〇〇年―写真とことば」が伝える茅ヶ崎の関東大震災」では、関東大震災の発生から復興に至る過程を写真とことばで紹介するパネル展が開催された。写真では、茅ヶ崎駅舎や馬入川鉄橋などの鉄道の被害の様子のほか、震災で倒壊した民家、震災後にバラックに住む人々など、発生から復興に至る茅ヶ崎の様子がうかがえる資料を紹介している。なかでも、

震災で倒壊した民家の写真は、震災以前の民家と合わせて紹介されており、家屋への被害の状況が伝わってくる。

本展示で注目したいのが、ことばとその紹介の仕方である。ことばは、「実際に震災を体験した人々の「ことば」であり、茅ヶ崎市史の編纂過程で集められた証言から構成される。各地から集められたことばは、「予兆」、「発生」、「被害」、「避難生活・復興」と段階ごとに分類され、ことばごとにキャプションが作成されている。キャプションには「予兆」：オレンジ、「発生」：赤、「被害」：灰、「避難生活・復興」：緑、と色が付され、そのことばが何を語っているか一目でわかる工夫がなされている。こうして整理されたことばからは、「予兆」から「避難生活・復興」に至るまでの、各地域での震災体験が読み取れる。例えば「予兆」、「予兆・発生」について見ると、萩園では「萩園橋の下で魚が手づかみでバケツに何杯もとれた」、「その日の村の若者や子供たちは、朝から小出川に魚取りに行っていた。というのは、小出川に大きな魚がたくさん浮いていると誰いうとなしに村中に伝わり、行ってみるとその通り、コイ、ナマズ、ウナギ、フナなど大小さまざまな川魚が掻き寄せられるほどに浮き上がっていた。ところが、突然の大地震にあわてた人々は兩岸の土手から転げ落ちて、なかなか上れなかった」と、震災直前の小出川の異変が複数のことばから浮き上がってくる。このように「実際に震災を体験した人々の「ことば」で構成された展示からは、震災を語ることばをどのように受け止めるか、という問いも提起される。展示では、その地域において、各段階でどのような震災体験があったのかを中心に組み立てられているが、そのことばを発した

個人についての情報は明記されていない（証言内容から推測することは可能）。地域、時間に加え、個人に注目した時、展示で紹介されたことばはどのように読み解くことができるだろうか。同館の展示は、震災の体験をどのように展示できるかという問いを考える上で、興味深い展示といえる。

（5）大磯町郷土資料館

大磯町郷土資料館のミニ企画展「大磯の災害―関東大震災から一〇〇年―」では、大磯町危機管理課、大磯町災害救援ボランティアの会とのタイアップのもとミニ展示が開催された。展示内容は、①関東大震災での大磯の被害を紹介するパネル、②関東大震災の体験談と被害写真をまとめた動画、③ハザードマップや防災グッズの紹介、④将来の大地震への備え方の紹介（「大地震！あなたは どうする？」）、の四つからなり、過去の災害を振り返りながら防災について学べる構成となっている。このうち、過去の災害について振り返ることを目的としているのが、①、②である。

①では、一〇〇年前からタイムスリップしてきたアオバトのカットブルを語り手に、二人が経験した関東大震災の被害を紹介する形式が採られる。二人の会話を中心に、大磯の被害が統計データや写真、地図を交えて整理され、当時の状況を語る資料として行政資料や日誌を紹介している。このうち、震災当時、大磯町で助役を務めた小見忠滋の公務日誌「大磯町助役日誌」については、震災当時の日誌を現代語訳したものがホームページ上で公開され、パネルに印字されたQRコードから日誌にアクセスできる工夫がなされている。「大

磯町助役日誌」や、合わせて公開されている大磯警察署の日誌からは、被害状況の把握、避難所の設置、米の廉売、相模紡績の女性職工の帰省保護、自警団の警戒、感染症予防、交通網の復旧など、町や警察が様々な対応に追われていたことがわかる。ここで紹介される「大磯町助役日誌」は大磯町郷土資料館が二〇二三（令和五）年以前から継続的に更新しているホームページ上のコンテンツ「一〇〇年前の大磯く小見助役の一日」の一部分である。企画展示の内容についてより深く知りたいという鑑賞者の期待にこたえつつ、博物館の継続的な活動を伝える方法として企画展示と既存のコンテンツをどのように紐づけるかは、デジタルミュージアムをめぐる議論が活発化するなか、重要な論点である。②では、一九七九年～一九八〇年に大磯町消防本部が収録した関東大震災体験談のテープを編集し、被害状況を伝える写真と合わせて上映する。「浜に行けと言われて浜へ行くと魚がはねていた。次に津波が来るから駅へ行けと言われてた。津波は何かわからなかった」（当時、北下町在住八歳男性）、「揺れ方は、歩けなくて、はいずった。家が倒れてしまった。砂煙がすごかった。別荘の子が一人死んでしまった。つぶれなかった家の近くにバラックを立てて過ごした。オツイタチ（毎月一日の農休日。餅や蕎麦など特別なものをつくって食べる。）でご飯があったため、近所の人にあげた」（当時、国府新宿在住二三歳女性）といった体験者の語りからは、どこで、どのように被災したのか、そこで何を見たのか、という情報だけでなく、それをどのように記憶し、語るか、という体験者の震災体験への向き合い方が、間や息遣いも含めて伝わってくる。目で追うのとは異なる、耳から入ってくる証言の

持つ迫力の大きさを、同館の展示は示している。

(6) 箱根町立郷土資料館

箱根町立郷土資料館で開催された企画展「関東大震災と箱根」は、暮らしや観光産業に大きな被害を蒙った箱根が復興に至る過程を紹介している。

展示は「Ⅰ.震災前夜」、「Ⅱ.地震発生 大正一二年九月一日、その時」、「Ⅲ.復興への道」、「Ⅳ.記録と慰霊」、の四章からなり、震災前夜の箱根の様子を紹介したⅠでは、観光案内や鉄道の時刻表、各温泉の写真などから、観光地として発展しつつある箱根の賑わいが伝わってくる。Ⅱでは、こうした景観を変貌させた震災被害の実態を写真や地図資料で説明する。震災直後の被害状況を調査した参謀本部の「震災地応急実測原図」からは、国道一号線で大きな土砂災害が発生していることが窺え、震災関係の公文書を纏めた各町村役場の綴からは、震災直後の村の様子が伝わってくる。復興に向けた動きを紹介したⅢでは、応急から本格化という復興の道筋を、①各町村での動き、②全山村町一帯となつての復興、③県による復興、④企業による復興の四つに注目して整理する。全山で約七割の建物が全・半壊し、暮らしと観光産業双方に甚大な被害を蒙った箱根では、町村ごとの復興にくわえ、全山一致しての復興が目指され、当時の七町村で「箱根復興会」が立ち上げられた。「箱根復興会」の会議録綴や、震災復興関係の公文書を纏めた各町村役場の綴からは、応急的な復旧から本格的な復興に至るまで町村や復興会がどのような事業を実施したのか、活動の実態が浮かび上がってくる。展

示では、企業による復興の事例として富士箱根自動車株式会社の事例も紹介された。震災で保有する自動車や車庫などに被害を受けた同社では、被害の少ない宮ノ下く箱根町間の国道仮復旧作業に従業員を派遣し、車両輸送で静岡県三島市方面からの物資や避難者の輸送にあたるなど、箱根町の復興にも尽力した（『復旧事業関係資料』）。Ⅳでは、復興後に建立された供養碑や慰霊碑を取り上げ、震災がどのように記録、継承されたのか紹介している。

箱根町役場所蔵の公文書を丁寧に読み解き、被災から復興に至る過程を明らかにした同館の展示は、地域の公文書が過去の災害を振り返るうえで重要な資料であることを示している。

四、千葉県内及び埼玉県内の企画展示

(1) 館山市立博物館

大きな被害を受けた東京府や神奈川県に比べ、千葉県や埼玉県の被害は軽微であったが、震源域に位置した房総半島の被害は大きく、千葉県安房郡役所編・発行『安房震災誌』（一九二六年）によれば、犠牲者は一二〇六人に上ったという。また、鏡ヶ浦を中心とした館山平野では、九〇パーセント以上の家屋が倒潰、火災のほか、津波も襲来した。関東大震災は東京市や横浜市の被害に注目が集まる傾向にあるが、房総半島の被害も看過することはできない。館山市立博物館の企画展「関東大震災と館山」では、『安房震災誌』などで被害の概要を捉えつつ、地形の変化や被害の様相、救援活動、復興の過程を写真や絵画、文書、地図などを用いながら提示している。

興味深かったのは、北条町の成瀬写真館が作成した『安房震災写真帖』や、館山町の川名写真館が撮影したガラス乾板写真を効果的に使用している点で、同地域の被災状況を視覚的に伝えている。また、成瀬写真館の写真が絵葉書として伝播していく過程は重要である。

展示は大きく「1 大地震の発生と地形の変動」、「2 激震地安房」、「3 地震直後の救援」、「4 復興する町村」、「5 慰霊と伝承」の五つから構成され、特に目を引いたのは、最後のコーナーで出陳されていた「震災記念反省地蔵尊」や「反省地蔵尊御詠歌額」などで、立体物の資料が伝える迫力があつた。関東大震災などの大規模災害に関する慰霊施設は各地にあり、研究蓄積もあるが、今回、館山の事例を知ることができた。また、富崎尋常高等小学校の『震災記録』には、「殊二三浦半島方面ニ真紅ノ大柱立チテ物凄シ」とあり、房総半島から見た対岸の様子も記録されている。「真紅ノ大柱」とは、おそらく横須賀で発生した石油タンクの火災であろう。こうした地域に残っている記録を一つ一つ掘り起こしていくことで、関東大震災の災害像を豊かにしていくことができるだろう。

(2) 千葉県文書館

既述の横浜開港資料館・横浜都市発展記念館の特別展「大災害を生き抜いて」と同様に、千葉県文書館の企画展「日記のなかの関東大震災」も個人の記録から関東大震災の再現を試みていた。館山市立博物館の展示が千葉県における被災の中心地となった安房郡の状況を描く一方、千葉県文書館のそれは、被害の少なかった山武郡や殖生郡の状況を体験者の日記から再現している。展示の導入部分で

は、「記された房総の災害」として、関東大震災以前に発生した千葉県域の災害を俯瞰した後、本編の「日記のなかの関東大震災」では、志賀五郷の『吹塵録』、幹義郎の『三養堂日記』、並木一郎及び千葉康一、石川倉次の記事を中心に、写真や絵葉書、グラフ誌、書簡等を用いながら展示を構成していた。千葉県内の被災状況だけでなく、東京の様子や避難者の伝聞情報なども記録されており、関東大震災を多角的に捉えた展示内容であつた。

横浜の状況に関しても記録があり、横浜市の上反町に住んでいた片山行蔵は長生郡五郷村（現・茂原市）の幹義郎に宛てた書簡で自らの体験を伝えている。重要なのは、片山の自宅が既述の八木熊次郎の自宅と近所だった点で、複数の歴史資料から上反町周辺の被災状況を確認することもできた。また、千葉県山武郡源村の並木一郎の日記には、関東大震災発生から約一ヶ月後、一〇月三日の根岸町の様子が記録されている。並木は震災見舞のため、東京や横浜をまわっており、自らの感想を交えながら横浜の被災状況を捉えていった。こうした千葉県内の歴史資料からも横浜の被災状況を追うことが可能であり、地域に限定されない幅広い視点から歴史資料を涉猟していくことの重要性を改めて認識した。

(3) 幸手市郷土資料館

東京市や横浜市に比べ、埼玉県における関東大震災の被害はあまり語られていないが、幸手町や粕壁町、川口町は同県内の三大被災地に数えられているという。関東大震災一〇〇年に際し、幸手市、春日部市、川口市の三つの郷土資料館では、それぞれ関東大震災に

関する展示会が催されたほか、連携スタンブラー「埼玉の関東大震災一〇〇を巡る―歴史が語る災害・防災―」を実施し、各郷土資料館をまわる仕組みを構築していた。「三大被災地」というキーワードは他地域からの来訪者にも大きなインパクトを与え、埼玉県も関東大震災の被災地であることを強く認識させられた。

幸手市郷土博物館の企画展「あれから一〇〇年 関東大震災と幸手」では、佐藤百次の経営する佐藤写真館（佐藤清光堂）が作成した『幸手町震災実況記念帖』、アマチュア写真家である浜田得一の撮影した『関東大災害記録写真集 幸手町編』を中心に、幸手町の被災状況を提示すると同時に、『幸手町のかたりべ』（幸手町教育委員会、一九八三年）に収められた関東大震災の体験記などを紹介することで、被害の状況を立体的に浮かび上がらせた。家屋の倒潰や竹藪への避難、流言の伝播、頻発する余震などは、発災時の様子を現在に伝えている。また、郷土史家の記録として高橋浅次郎の『震災誌稿』などを紹介しており、これまでの地道な調査研究の蓄積が窺えた展示であった。

（４）春日部市郷土資料館・川口市郷土資料館

近世期に日光街道の宿場町として栄えた粕壁町も関東大震災の被害を受けた。春日部市郷土資料館のミニ展示「一九二三・九・一 関東大震災と春日部」は『大正十二年粕壁町震災写真帖』所収の写真をパネルで提示したほか、粕壁小学校の『大震災記念児童文集』から小学生の震災体験を紹介した。特徴的だったのは、壁面にめくりタイプのパネルを配置した点で、「被害の状況」や「被災後の生活」、「東

京の避難民」など、トピックごとにパネルをめくると詳しい解説が読めるようになっていた。限られたスペースを活かす工夫が光っており、狭いながらも充実した展示内容であった。

一方、荒川を挟んで東京府と接する北足立郡川口町は、一九二三（大正一二）年の関東大震災時、鋳物産業の街として栄えていたが、九月一日は鋳物工場の定休日であったため、火災をまぬがれることができた。写真「大正拾貳年九月一日震災東京市中之煙 上埼玉川口町ニテ撮ス」から始まる川口市郷土資料館のミニ企画展「関東大震災と川口」は、主に階段壁面のスペースを用いながら写真と体験記の記述から川口市域の関東大震災を再現していった。原物の資料として展示されていた『関東大地震実記』（川口市教育委員会所蔵）からは、北足立郡安行村（現・川口市）に住んでいた執筆者の視点から震災の状況が描かれており、様々な情報の伝播の過程も読み取れる。春日部市郷土資料館と同様に、埼玉県の被災状況を明示した展示であった。

おわりに

一〇年前、二〇一三（平成二五）年の関東大震災九〇年に際し、一〇〇年にむけた課題として関東大震災のもつ〈広域性〉の重要性を指摘し、①国内外を問わず被災地外から横浜を見る視点や、②横浜市街地の周辺部、郡部から災害を見る視点などを提示した。また、③博物館施設の枠を越えた広域的な研究の必要性等も主張した。さらに冒頭でも述べたように、首都圏形成史研究会のシンポジウム「歴史災害を伝える―災害史“展示の現状と課題”―」でも、④施設間

の連携とネットワークの構築が提唱された。関東大震災一〇〇年の企画展示事業を振り返った時、一〇年前の課題に十分応えられていない部分もあるが、進展も多くあった。例えば、横浜開港資料館・横浜都市発展記念館の合同特別展「大災害を生き抜いて」では、八木熊次郎の避難ルートを辿り、郷里の愛媛県松山市の調査を実施、日記の記述を裏付ける史料などを発掘することができた。また、千葉県文書館で展示されていた横浜の状況を伝える書簡なども良い例である。関東大震災は被災地に限った事象ではなく、世界規模の事象でもあり、国内外を問わず、被災地の外における史料発掘と調査研究を進めていく必要がある。

加えて、施設間及び学芸員間の連携という視点においては、規模の差はあれ、各地の博物館、諸団体との間でも見られた。横浜開港資料館や横浜都市発展記念館も参加した神奈川県博物館協会の「神奈川震災一〇〇年プロジェクト」では、参加館が相互に連携することで、それぞれの空白部分を補うとともに、東京都と比べ、これまで注目されてこなかった神奈川県の大震災を提示できたと考える。これはすמיד郷土文化資料館と東京都復興記念館の学術的な連携、幸手市郷土資料館等の連携スタンプリー「埼玉の関東大震災一〇〇を巡る」も同様である。また、個々の企画展示では、各館ともに日頃の博物館活動の蓄積が活かされており、資料収集や整理保管、調査研究など、地道な作業の成果を見ることができた。例えば、詳しく述べられなかったが、鎌倉国宝館の特別展「二つの関東大震災と鎌倉」⁽²³⁾は、二〇一五年の同館特別展「鎌倉震災史―歴史地震と大正関東地震」⁽²⁴⁾や、二〇一九年の鎌倉文化交流館特別展「鎌倉災

害と復興―土地に刻まれた痕跡」⁽²⁵⁾など、過去の展示事業の成果を十分に活かしており、継続的な調査研究の重要性を改めて感じた。これらは重厚な企画展示事業が一朝一夕にできないことを示している。

首都圏の各地で開催された関東大震災一〇〇年の企画展示事業は、様々な性格の博物館や文書館、民間団体が「関東大震災」という同一のテーマを扱ったことで、多種多様の切り口、論点を提示しつつ、その災害像を豊かにしていた。また、写真資料や絵画資料、日記を含む文字資料など、それまで地域に眠っていた歴史資料を俯瞰する機会にもなり、東京や横浜という都市部だけでなく、規模の小さな町村を含め、「関東地方」という面で関東大震災の展示をつくっていくことも可能であろう。例えば、文字資料はもちろん、非文字資料である写真資料や絵画資料、災害碑等の類型化と史料批判、分析作業を進めていくことで、資料の種類ごとに面としての「関東大震災」を描くことができると考える。これを実現していくには、学芸員同士の交流とともに、博物館と博物館の信頼関係の構築が必要不可欠となってくる。学芸員は幅広い視野を持ちつつ、調査研究等の活動を行っていかなければならない。

冒頭で述べた通り、関東大震災に関する企画展示事業は周年行事的に進む傾向にあり、おそらく次の大きな機会となるのは、横浜の震災復興一〇〇年となる二〇二九年、帝都復興一〇〇年となる二〇三〇年、東日本大震災二〇年となる二〇三二年の三年間だと考えられる。関東大震災九〇年から一〇〇年の一〇年間を考えた場合、地域レベルでの歴史資料の発掘が進む一方、調査や分析の方法だけでなく、見せ方の部分においてもデジタル技術が急速に進歩してい

る。その活用にあたっては、当然、学術的な議論が必要だが、博物館業界でも方法論の構築を迫られている。特にデジタルミュージアムは災害史の発信に関しても重要なプラットフォームとなるだろう。

一〇年後の関東大震災一〇年、二〇年後の関東大震災二〇年を視野に入れつつ、デジタル技術等にも目をむけながら、次の三年間にむけた準備を進めるべきである。過去の事象を知るには、思想や信条に関係なく、学問（史料に基づく実証的な研究方法）に基礎を置かなければならない。安易な歴史解釈を避けるためにも、多種多様な歴史資料の発掘や目録等の整備、調査研究など、博物館の学芸員には、地に足の着いた地道な作業が求められる。

〔註〕

- (1) 吉田律人「関東大震災九〇周年の成果と課題―横浜市の博物館及び文書館の視点から―」（『災害・復興と資料』第六号、二〇一五年）。
- (2) 田中隆文『災害展示論』（古今書院、二〇二二年）など。
- (3) 関東大震災の概要は災害教訓の継承に関する専門調査会編『一九三三 関東大震災報告書』第一編～第三編（内閣府中央防災会議、二〇〇六年～二〇〇九年）を参照。
- (4) 吉田律人「関東大震災」研究の現在」（『年報首都圏史研究』第一号、二〇一一年）。
- (5) 関西村の詳細は松本洋幸「横浜の『関西村』について―震災救護関西府県聯合のバラックとその後―」（『横浜市史資料室紀要』第五号、二〇一五年三月）を参照。なお、鈴木晶「横浜にあらわれたバラック『関西村』」（『神奈川の関東大震災一〇〇年後の視点』えにし書房、二〇二三年）も関西村の分析を行っている。
- (6) 史料翻刻及び内容分析は吉田律人「関東大震災と陸軍法務官の活動―『神奈川方面警備部隊法務部日誌』を中心に―」（『横浜開港資料館

紀要』第三二号、二〇一四年三月）を参照。なお、姜徳相・山本すみ子編『神奈川県関東大震災朝鮮人虐殺関係資料』三一書房、二〇二三年）も同史料の翻刻を行い、すでに筆者が指摘している軍内部の「虐殺」認識等にも触れているが、可能性はあっても、殺傷行為への軍隊の関与を断定するのは難しい。この点に関しては、普通犯罪事項への関与を踏まえた後藤周『それは丘の上から始まった―一九三三年横浜の朝鮮人・中国人虐殺（ころから、二〇二三年）の分析（一九九～二〇三頁）が説得的である。

(7) 『感要漫録』に関しては今井清一「横浜の関東大震災」（有隣堂、二〇〇七年）のほか、姜・山本前掲書や後藤前掲書でも紹介されている。渡辺歌郎の詳細は吉田律人「鶴見の医師・渡辺歌郎」（『市史通信』第一〇号、二〇一一年三月）を参照。

(8) 展示内容の詳細は横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編『関東大震災九〇周年記念 関東大震災と横浜―廃墟から復興まで―』（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇一三年）を参照。なお、『横浜市史資料室紀要』第四号（二〇一四年三月）は特集「関東大震災九〇周年 関東大震災の災害教訓―東京・横浜の比較検討から―」を組んだほか、前掲『横浜開港資料館紀要』第三二号も関東大震災の特集として史料紹介を行っている。

(9) 青木祐介・吉田律人・松本洋幸「関東大震災九〇周年連携展示の試み」（『横浜都市発展記念館紀要』第一〇号、二〇一四年三月）。

(10) シンポジウムの詳細は『年報首都圏史研究』第四号（二〇一五年五月）の特集「歴史災害を伝える―災害史―展示の現状と課題」を参照。

(11) 土田宏成・吉田律人・西村健編『関東大水害―忘れられた一九二〇年の大災害』（日本経済評論社、二〇二三年）。

(12) 横浜市史資料室では室内展示「前川謙三が撮影した関東大震災―野毛山周辺―」（二〇二三年七月二日～一月四日）を開催。前川謙三撮影の写真資料を紹介した。なお、写真群の詳細は北原糸子編『写真集 関東大震災』（吉川弘文館、二〇一〇年）、横浜市史資料室編『報告書 横浜・関東大震災の記憶』（横浜市史資料室、二〇一〇年）を参照。

- (13) 詳細は公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団近現代歴史資料課市史資料室担当編『報告書 震災復興と大横浜の時代』(横浜市史資料室、二〇一五年)を参照。
- (14) 詳細は横浜開港資料館編『レンズ越しの被災地、横浜―西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板写真―』(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇二一年)を参照。
- (15) 詳細は横浜都市発展記念館編『激震、鉄道を襲う!―関東大震災と横浜の交通網―』(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇二二年)を参照。
- (16) 関東大震災九〇周年以降、横浜開港資料館のミニ展示として「関東大震災と東海道線」(二〇一四年八月三〇日〜九月三〇日)、「明治・大正ハマの消防車」(二〇一五年九月一日〜三〇日)、「洋画家が描いた関東大震災」(二〇一六年九月一日〜三〇日)、「横浜地方裁判所と大震災」(二〇一七年九月一日〜三〇日)、「災害情報の伝播と通信社」(二〇一八年九月一日〜一〇月二八日)、「奮闘! 消防自動車メリウエザー号」(二〇一九年九月一日〜一〇月三十一日)、「少年・佐藤謙三の震災体験」(二〇二〇年九月一日〜二月三日)、「横浜市電の被災と復旧」(二〇二一年九月一日〜二月二日)、「鉄道技師の関東大震災」(二〇二二年八月二六日〜十一月二四日)などを開催してきた。
- (17) 詳細は吉田律人「関東大震災と『横浜貿易新報』―震災臨時号の分析を中心に―」(『横浜市史資料室紀要』第一号、二〇一一年三月)。
- (18) それぞれの写真群の来歴は吉田律人「発見! 関東大震災の写真原板」『開港のひろば』第一五〇号、二〇二一年一月、同「関東大震災と横浜市電気局の写真記録 中野春之助旧蔵ガラス乾板写真を中心に」(『ハママニュースレター』第三九号、二〇二三年八月)を参照。
- (19) 横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編『関東大震災一〇〇年 関東大震災と横浜―廃墟から復興まで―』(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇二三年)。
- (20) 土田宏成『災害の日本近代史』(中央公論新社、二〇一三年)。
- (21) 土田宏成『近代日本の「国民防空」体制』(神戸外語大学、二〇一〇年)、同『帝都防衛―戦争・災害・テロ』(吉川弘文館、二〇一七年)。
- (22) NHK横浜放送局の防災ブース「命をまもる未来へつなぐ」で映像展示が行われたほか、NHK民放六局防災プロジェクト「#いのちとにを守る」では、テレビ制作者セミナー「8Kカラーでよみがえる関東大震災」において吉田律人が詳細な解説を行った。
- (23) 震災被害に関する記述は、武村雅之・北原糸子監修『関東大震災一九二三年、東京は被災地だった』(東京防災救急協会、二〇一三年)二四〜二六頁を参照。
- (24) 東京都慰霊堂公式ウェブサイト「記念館の歴史」ページ(<https://www.tokyoreikyo.or.jp/museum/history.html>)二〇二四年一月三十一日最終閲覧)。
- (25) 本調査の詳細については、高野宏康「東京都慰霊堂保管資料の整理と分類方法―関東大震災および『東京大空襲』関係資料について―」(『年報非文字資料研究』第七号、二〇一一年三月)を参照。
- (26) 同館の展示の変遷については、森田祐介「一九三一年から二〇一九年にいたる復興記念館の展示の変遷」(『歴史地震』第三六号、二〇二一年)を参照。
- (27) 同館の震災絵葉書研究の成果は、江東区地域振興部文化観光課文化財係編『絵葉書で見る江東百景 震災復興―関東大震災―』(江東区地域振興部文化観光課文化財係、二〇一九年)を参照。
- (28) 板橋区立郷土資料館編・発行『令和五年度企画展 震災後一〇〇年いたばしの現代化―関東大震災をきっかけに板橋はどう変わったのか―』(板橋区立郷土資料館、二〇二三年)。
- (29) 鎌倉国宝館編『大正地震一〇〇年・元禄地震三三〇年二つの関東地震と鎌倉』(鎌倉国宝館、二〇二三年)。
- (30) 鎌倉国宝館編『鎌倉震災史―歴史地震と大正関東地震―』(鎌倉国宝館、二〇一五年)。
- (31) 鎌倉歴史文化交流館編『写真集 鎌倉災害と復興―土地に刻まれた痕跡―』(鎌倉歴史文化交流館、二〇一九年)。

【表】関東大震災100年関連展示一覧

No.	展示名	会期	会場	都道府県
1	企画展「帝都壊滅！…しかしそこには 後藤新平がいた～復興を牽引〈迅速・先見・継承〉～」	7月14日～10月29日	奥州市立後藤新平記念館	岩手
2	企画展「幾歳経るとも要心あれ～地震・津波災害の記憶～」	8月5日～10月9日	岩手県立図書館	岩手
3	奥州市立図書館統一企画展『『防災』～関東大震災から100年～』	8月22日～9月9日	胆沢図書館	岩手
4	特別展「1923」	8月30日～12月5日	盛岡てがみ館	岩手
5	企画展示「三大震災の事実と教訓～今から始める防災・減災～」	9月25日～10月24日	東日本大震災津波伝承館	岩手
6	特別企画展「関東大震災新聞展」	8月23日～10月2日	南三陸311メモリアル	宮城
7	防災の日特別企画展示「関東大震災100年パネル・資料展」	8月30日～9月24日	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館	宮城
8	関東大震災100年企画展示「関東大震災とこれからの備え」	9月1日～10月1日	みやぎ東日本大震災津波伝承館	宮城
9	第一回布施辰治特集展示「布施辰治と関東大震災―百年前の被災地で何が起きていたのか―」	9月1日 ～2024年3月3日	石巻市博物館	宮城
10	企画展「仙台に残されていた関東大震災の記録」	9月15日～12月22日	東北大学災害科学国際研究所	宮城
11	〔在郷軍人会志田郡連合分会の救援活動に関する資料の展示〕	不明～9月3日	平和資料館〔私設資料館〕	宮城
12	関東大震災100周年・上山城企画展「上山ゆかりの建築家・耐震構造学の祖 佐野利器」	9月30日～11月26日	上山城1階特別展示室	山形
13	企画展「伝える 災害の記憶―あいおいニッセイ同和損保所蔵災害資料―」	10月7日～12月17日	福島県立博物館	福島
14	ギャラリー展示「災害を振り返る」	7月8日～9月24日	坂東市立資料館（坂東郷土館ミュージズ）	茨城
15	企画展「関東大震災100年―地図に残る地殻変動と被災状況―」	7月19日～10月1日	地図と測量の科学館	茨城
16	「文書館機能紹介『アーカイブズの部屋』 関東大震災から100年―関東大震災と茨城の災害―」	8月19日～10月29日	茨城県立歴史館	茨城
17	ロビー展示「関東大震災から100年～大地震と大正の栃木県～」	7月28日～9月27日	栃木県立図書館	栃木
18	「関東大震災から 100 年」	8月1日～10月29日	佐野市立図書館3館巡回展	栃木
19	企画展示「関東大震災から100年」	9月1日～27日	群馬県立図書館	群馬
20	常設展示室内展示「関東大震災―八潮地域に残る記録―」	7月17日～10月1日	八潮市立資料館	埼玉
21	一般展示「関東大震災から100年」	8月～9月	上里町立図書館	埼玉
22	夏季企画展「関東大震災百年～その時所沢は～」	8月15日～9月24日	所沢市生涯学習推進センター	埼玉
23	ミニ展示「関東大震災百年」	8月16日～11月5日	さいたま市立博物館	埼玉
24	「関東大震災100年パネル展」	8月21日～9月1日	深谷市役所本庁舎	埼玉
25	ミニ展示「関東大震災！ そのときふじみ野は？」	8月22日～9月10日	上福岡歴史民俗資料館	埼玉

No.	展示名	会期	会場	都道府県
26	「関東大震災パネル展示」	9月1日～10月1日	本庄市立図書館	埼玉
27	ミニ展示「関東大震災と富士見」	9月1日～10月1日	難波田城資料館	埼玉
28	ミニ企画展「関東大震災と川口」	9月1日～10月8日	郷土資料館〔川口市立文化センター分館〕	埼玉
29	ミニ展示「1923.9.1関東大震災と春日部」	9月1日～10月8日	春日部市郷土資料館	埼玉
30	企画展「あれから100年 関東大震災と幸手」	9月1日～10月9日	幸手市郷土資料館	埼玉
31	特別企画展示「関東大震災から100年」	9月1日～12月28日	埼玉県防災学習センター	埼玉
32	〔震災後埼玉県内などで起きた朝鮮人虐殺の事実や背景を伝えるパネル展〕	9月20日～24日	さいたま市複合公共施設“コムナーレ”	埼玉
33	「SAITAMA～記録史料から震災を考える」	11月1日～12月24日	埼玉県立文書館	埼玉
34	ギャラリー展示「朝霞と地震―関東大震災から100年を迎えて―」	2024年2月3日～4月7日	朝霞市博物館	埼玉
35	企画展「関東大震災から100年～千葉で起きた災害を忘れない～」	6月8日～9月1日	千葉経済大学総合図書館	千葉
36	企画展 関東大震災100年展示「1923―関東大震災を生きた人々―」	7月11日～10月1日	我孫子市杉村楚人冠記念館	千葉
37	資料展示「関東大震災」	7月1日～9月3日	千葉県立東部図書館	千葉
38	ミニ展示「災害と流行病の歴史と民俗in鎌ヶ谷～教訓を忘れないために～」	7月15日～10月1日	鎌ヶ谷市郷土資料館	千葉
39	関東大震災100年 企画展「関東大震災と館山」	7月29日～10月9日	館山市立博物館	千葉
40	ラウンジ展示「～関東大震災から100年～災害に備える」	7月29日～9月28日	袖ヶ浦市中央図書館	千葉
41	トピックス展「関東大震災から100年―災害の記憶を未来に伝える―」	8月1日～9月23日	千葉県立中央博物館	千葉
42	ギャラリーガラスケース展示「関東大震災100年」〔「福田村事件」関連資料展示〕	8月15日～9月14日	流山市立森の図書館	千葉
43	「関東大震災と市政施行に関する資料」	9月1日～10月29日	市川市中央図書館	千葉
44	企画展「日記のなかの関東大震災」	9月1日～2024年1月30日	千葉県文書館	千葉
45	特別展示2「＜関東大震災から100年＞～災害から復興を考える～」	不明	鴨川市立図書館	千葉
46	企画展「碑（いしづみ）―後世に伝えたい震災の記憶―」	不明	おおわだシード	千葉
47	秋季特別展「関東大震災と地震鯨」	2022年8月30日～3月5日	東京都復興記念館	東京
48	特別展「―関東大震災から100年―同潤会アパートと渋谷」	1月21日～3月26日	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	東京
49	特集展示「震災と歴史公文書 ～関東大震災100年～」	2月19日～4月13日	武蔵野ふるさと歴史館	東京
50	「震災を書く」展	2月21日～3月25日	日本近代文学館	東京
51	サロン展「写真のノスタルジア / 特別陳列 関東大震災のイメージ」	3月22日～28日	渋谷区立松濤美術館	東京
52	企画展「関東大震災100年 温故備震（おんこびしん）」	4月4日～2024年3月28日	日本赤十字社本社	東京
53	テーマ展示「関東大震災と帝国興信所」	4月18日～12月28日	帝国データバンク史料館	東京
54	企画展「青梅の自然災害と疫病～災禍に向き合った人々～」	4月22日～7月30日	青梅市郷土博物館	東京

No.	展示名	会期	会場	都道府県
55	春季特別展「同潤会がめざした理想的な住まいと住環境」	5月2日～8月27日	東京都復興記念館	東京
56	所蔵作品展 MOMAT コレクション 小特集「関東大震災から100年」	5月23日～9月10日	東京国立近代美術館	東京
57	〔関東大震災ならびに防災に関する資料の展示〕	6月1日～30日	西東京市 柳沢公民館	東京
58	特集「関東大震災と朝倉文夫」	6月3日～9月3日	台東区立朝倉彫塑館	東京
59	ミニ展示「関東大震災100年」	6月5日～29日まで	公益財団法人三康文化研究所附属三康図書館	東京
60	「東京復興のあゆみ 未来を見据えたまちづくり」	6月12日～16日 7月10日～21日	東京都庁第二本庁舎	東京
61	東京国際消防防災展2023〔関東大震災特設ブース〕	6月15日～18日	東京ビッグサイト	東京
62	トピック展示 関東大震災100年「吉村昭と関東大震災―明日へつなぐ記録と記憶―」	6月16日～10月18日	吉村昭記念文学館	東京
63	企画展「関東大震災と復興―台東区の大正・昭和―」	6月16日～9月18日	台東区立中央図書館郷土・資料調査室	東京
64	所蔵資料展「震災からモダン都市・新宿へ」	7月1日～9月3日	新宿歴史博物館	東京
65	企画展「関東大震災100年―隠蔽された朝鮮人虐殺―」	7月5日～12月24日	高麗博物館	東京
66	気象科学館ポスター展「～関東大震災から100年～知って備えよう 過去の大災害から学ぶ」	7月7日～11月30日	気象科学館	東京
67	「関東大震災と東京国立博物館」	7月11日～9月3日	東京国立博物館	東京
68	夏の特別企画展「関東大震災 あれから100年 語り継ぐべき記憶」	7月14日～9月10日	消防博物館	東京
69	震災復興100年「同潤会アパートが創った昭和モダンライフ」	7月15日～9月18日	ガスミュージアム	東京
70	理学図書館ミニ展示「大震災と地震学」	7月18日～10月30日	理学図書館〔東京大学〕	東京
71	特集展示「堅山南風《大震災実写図巻》と近代の画家 大観・玉堂・青邨・蓬春」	7月19日～11月5日	半蔵門ミュージアム	東京
72	特別展「大正時代―公文書でたどる100年前の日本―」	7月22日～9月18日	国立公文書館 東京本館	東京
73	特集展示「災害・防災と考古学」	7月25日～9月3日	立川市歴史民俗資料館	東京
74	企画展「震災と江東～絵葉書で見る関東大震災～」	7月26日～11月5日	江東区中川船番所資料館	東京
75	企画展「新規登録区民文化財展2023～震災の記憶と佃島の記録～」	7月29日～9月3日	中央区立郷土資料館	東京
76	特別展示会「関東大震災・朝鮮人虐殺から100年～いま、何をするべきか～」〔在日本朝鮮留学生同盟東京地方本部主催〕	7月30日	文京シビックセンター	東京
77	「関東大震災から100年～非常食の歴史と進化～」	7月31日～8月10日	農林水産省内「消費者の部屋」	東京
78	収蔵資料展「関東大震災100年、新着資料展」	8月1日～10月8日	豊島区立郷土資料館	東京
79	クローズアップ都市・東京情報展示「関東大震災と東京―震災復興から100年―」	8月4日～11月1日	東京都立中央図書館	東京
80	ミニ展示「関東大震災から100年～過去に学び、これからに備える～」	8月4日～9月6日	都立多摩図書館	東京

No.	展示名	会期	会場	都道府県
81	特別企画展「災害と通信 ～つなぐのは命・暮らし・心～」	8月5日～9月29日	KDDI MUSEUM	東京
82	展示「関東大震災100年—そのとき議会は?—」	8月10日～9月7日	憲政記念館	東京
83	関東大震災から100年企画展「関東大震災からの復興」	8月16日～26日	江東区総合区民センター	東京
84	企画展「夢二の震災ルポと都新聞～関東大震災100年の記憶～」	8月16日～9月30日	東京新聞本社1階ロビー	東京
85	ギャラリー展示「資料が語る関東大震災」	8月17日～9月19日	国立国会図書館	東京
86	報道写真展「関東大震災100年—定点観測者としての通信社—」	8月18日～9月4日	汐留シオサイト	東京
87	地域資料展「関東大震災百年」	8月18日～9月11日	東大和市立中央図書館	東京
88	特別展示「～関東大震災から100年～すみだゆかりの作家たちと震災」	8月18日～9月20日	墨田区立ひきふね図書館	東京
89	企画展「関東大震災100年—本所の被害と復旧、残されたもの—」	8月19日～10月22日	墨田区立すみだ郷土文化資料館	東京
90	「関東大震災100年祈念展示～資料で振り返る震災～」	8月19日～9月14日	江東区立深川図書館	東京
91	一般展示「震災と防災」	8月19日～9月14日	江東区立亀戸図書館	東京
92	企画展示「関東大震災から100年—災害の記憶と復興へのあゆみ—」	8月21日～11月12日	お茶の水大学付属図書館	東京
93	企画展「関東大震災から100年～備えよう！首都直下地震」	8月21日～2024年2月20日	防災専門図書館	東京
94	パネル展示「関東大震災の被害と復興への歩み、人々の命を救った深川親睦園について」	8月22日～9月10日	清澄庭園 大正記念館	東京
95	たいとう 関東大震災100年事業「関東大震災100年パネル展」	8月23日～9月12日	台東区内4か所を巡回	東京
96	関東大震災100年展示会「関東大震災と東京の復興」	8月23日～9月22日	市政会館	東京
97	「関東大震災100年パネル展」	8月24日～9月1日	新宿区役所本庁舎	東京
98	関東大震災×100周年コーナー展示「絵葉書から見る関東大震災」	8月25日～9月30日	葛飾区郷土と天文の博物館	東京
99	附属図書館特別展示「図書館に眠る震災の記憶」	8月25日～10月25日	東京大学総合図書館	東京
100	関東大震災特別企画展	8月26日～28日	国営東京臨海広域防災公園	東京
101	パネル展示「旧丸ビル竣工100年企画～関東大震災100年展～」	8月28日～9月2日	丸ビル1F「マルキューブ」	東京
102	「旧国立駅舎と関東大震災から100年」	8月28日～9月3日	旧国立駅舎	東京
103	「関東大震災100年事業 賀川豊彦とボランティア」関連企画特別パネル展「賀川豊彦と関東大震災～ボランティアのはじまり～」	8月29日～9月10日 (銀座教会)、 9月19日 ～2024年3月30日 (松沢資料館)	日本基督教団銀座教会・賀川豊彦記念松沢資料館	東京
104	関東大震災から100年 企画展『『次のその日』に備えて復興小公園を造る』	8月29日～9月6日	江東区総合区民センター	東京
105	秋季特別展「子どもたちの関東大震災」	8月29日～11月26日	東京都復興記念館	東京
106	企画展「1923—2023歴史の証言者たち」	9月1日～延長展示中	在日韓人歴史資料館	東京

No.	展示名	会期	会場	都道府県
107	企画展「関東大震災100年から考える『災害と平和』」	9月1日～30日	世田谷区立平和資料館〔愛称：せたがや未来の平和館〕	東京
108	関東大震災100周年展示会「関東大震災から100年―首都圏を襲った未曾有の大災害を資料で振り返る―」	9月1日～10日	中央区立月島図書館	東京
109	図書展示「災害に備える」	9月1日～10月15日	新宿区立中央図書館	東京
110	関東大震災100年企画展「震災からのあゆみ―未来へつなげる科学技術―」	9月1日～11月26日	国立科学博物館	東京
111	特別展 関東大震災100年「首都東京の復興ものがたり～未来へ繋ぐ100年の記憶～」、関連展示「新聞が記録した関東大震災直後のリアル」	9月1日～11月26日	千代田区立日比谷図書文化館	東京
112	立教学院創立150周年記念企画展「災害の経験に学ぶ」	9月1日～28日	立教学院展示館	東京
113	「伝える―災害の記憶」あいおいニッセイ同和損保所蔵災害資料―関東大震災100年―資料でたどる災害今昔展	9月1日～9月24日	UNPEL GALLERY	東京
114	テーマ展示「社会を記録する」より「関東大震災写真集展示 第1部：都市の被災状況―建物・死者・街―」〔法政大学大原社会問題研究所企画〕	9月1日～12月23日	HOSEI ミュージアム	東京
115	ミニ展示「横山大観『生々流転』と法政大学」〔関東大震災に関するエピソードを紹介したパネル展示〕	9月1日～9月30日	HOSEI ミュージアム	東京
116	企画展「震災の記録と記憶展」	9月2日～9月9日	板橋区立教育科学館	東京
117	特集展示 関東大震災100年・折口信夫没後70年「蠟燭と流言の夜―折口信夫が見た関東大震災―」	9月23日～11月19日	國學院大學博物館	東京
118	パネル展「関東大震災から100年 あの日の三鷹とこれからの備え」	9月25日～28日	三鷹市役所	東京
119	今村法律研究室・大学史資料室共同企画展示「関東大震災と専修大学」	9月25日～10月24日	専修大学神田校舎	東京
120	常設展示ミニ企画展「俳句・文学にみる震災」	9月26日～12月3日	江東区芭蕉記念館	東京
121	企画展「震災後100年 いたばしの現代化―関東大震災をきっかけに板橋はどう変わったのか―」	9月30日～12月10日	板橋区立郷土資料館	東京
122	「100年のRe-vive」×「光景」〔東京朝鮮中高級学校美術部・朝鮮大学校美術科共同開催展示〕	10月1日～29日	〔すみだ向島EXPOコンテンツ〕	東京
123	企画展「発生から100年 記録された関東大震災」	10月3日～12月3日	中野区立歴史民俗資料館	東京
124	企画展「関東大震災と駒澤大学」	10月10日～11月18日	駒澤大学禅文化歴史博物館	東京
125	関東大震災100年ミニ展示『『安政見聞録』でみる江戸地震秘話』	10月12日～22日	江東区深川江戸資料館	東京
126	水道歴史展「関東大震災と東京水道」	10月28日～11月5日	東京都水道歴史館	東京
127	企画展「深川復興～関東大震災100年」	11月1日～19日	深川東京モダン館	東京
128	関東大震災から100年展「震災の記憶～小津、映画、文学そして江東、大正という時代」	11月1日～19日	江東区古石場文化センター	東京

No.	展示名	会期	会場	都道府県
129	「関東大震災から100年」展示	11月6日～12月28日	特別区自治情報・交流センター	東京
130	企画展「関東大震災と俳句」	11月7日～30日	江東区砂町文化センター	東京
131	特別展「関東大震災の被災者実態について～『震災死亡者調査票』からみた東京の死亡者～」	11月28日 ～2024年3月3日	東京都復興記念館	東京
132	関東大震災から100年 特別企画展「荒川の防災・減災・縮災」	12月13日 ～2024年1月28日	荒川知水資料館	東京
133	資料館企画展「関東大震災に学ぶ 火災旋風の恐ろしさー関東大震災100年ー」	2024年1月9日 ～3月14日	東京工業大学博物館・百年記念館	東京
134	テーマ展示「社会を記録する」より「関東大震災写真集展示 第2部：被災後の都市ー避難・救援・復旧、復興ー」〔法政大学大原社会問題研究所企画〕	2024年1月10日 ～4月27日	HOSEI ミュージアム	東京
135	〔専修大学人文科学研究所公開講演会「関東大震災 描かれた朝鮮人虐殺絵を読み解く」(講師：新井勝紘) 関連資料特別展示〕	2024年1月20日 ～26日	専修大学神田校舎	東京
136	デジタル史料展示「関東大震災100年ー関東大震災に関する旧日本陸海軍の史料ー」	公開中	防衛省防衛研究所	東京
137	企画展「大和市の災害の歴史」	1月14日～2月19日	つる舞の里歴史資料館	神奈川
138	企画展示「関東大震災と川崎の復興」	4月1日～9月30日	川崎市公文書館	神奈川
139	パネル展示「関東大震災」	4月18日～5月14日	横浜市立栄図書館	神奈川
140	前期ゆかりラボ展示「茅ヶ崎の関東大震災」	4月29日～9月24日	茅ヶ崎ゆかりの人物館・多目的館	神奈川
141	ミニ展示「関東大震災を伝えるー災害情報の形成と展開ー」	5月26日～8月25日	横浜開港資料館	神奈川
142	企画展示「関東大震災100年 神奈川県の被害と復興」	6月9日～12月13日	神奈川県立図書館本館	神奈川
143	企画展「関東大震災」	7月～不明	横浜国立大学付属図書館	神奈川
144	〔関東大震災に関する展示〕	7月3日～12月22日	相模原市内各所	神奈川
145	企画展示「公文書館資料で見る関東大震災」	7月14日～9月24日	神奈川県立公文書館	神奈川
146	室内展示「前川謙三が撮影した関東大震災野毛山周辺」	7月22日～11月4日	横浜市史資料室	神奈川
147	特別展「大正地震100年・元禄地震320年 2つの関東大震災と鎌倉」	7月22日～9月10日	鎌倉国宝館	神奈川
148	〔関東大震災の写真と防災対策パネル等の展示 小田原市防災対策課主催〕	7月24日～9月3日	小田原市内各所で開催	神奈川
149	資料展「震災の記憶～関東大地震から100年～」	7月28日～10月1日	海老名市立郷土資料館「海老名市温故館」	神奈川
150	トピックス展示「関東大震災100年～横須賀の地震災害に備えて～」	7月29日～9月10日	横須賀市自然・人文博物館	神奈川
151	特別展「関東大震災ー原点は100年前ー」	7月29日～9月18日	神奈川県立歴史博物館	神奈川
152	ミニ展示「100年前の大地震とあつぎ」	7月29日～9月24日	あつぎ郷土博物館	神奈川
153	「被災地中区写真展」	8月1日～9月1日	横浜市中区各地区センター・区役所別館	神奈川
154	ミニ企画展「大磯の災害ー関東大震災から100年ー」	8月2日～10月31日	大磯町郷土資料館	神奈川

No.	展示名	会期	会場	都道府県
155	文化財企画展「関東大震災と綾瀬」	8月4日～26日	綾瀬市役所市民展示ホール	神奈川
156	震生湖誕生 100周年記念事業企画展「関東大震災、その時 秦野では。」	8月5日～10月15日	はだの歴史博物館	神奈川
157	パネル展「関東大震災と復興」	8月10日～19日	横浜市立港南図書館	神奈川
158	ミニ企画展示「箱根ジオパークにおける自然災害伝承碑の取り組み」	8月16日～10月9日	神奈川県立生命の星・地球博物館	神奈川
159	「関東大震災、100年ぶりの慟哭 アイゴー展」	8月16日～20日	横浜市民ギャラリーあざみ野	神奈川
160	文化財フェスタ「関東大震災100年～資料でみつめる伊勢原の災害～過去・現在・未来」	8月18日～21日	伊勢原市中央公民館	神奈川
161	パネル展「100年前の目撃者～図書館の宝もの2023～」	8月22日～9月3日	小田原市立中央図書館	神奈川
162	〔北原白秋自筆「胡麻の実」(震災体験記)特別公開〕	8月22日～9月10日	小田原文学館別館・白秋童謡館	神奈川
163	「震災復興橋梁」企画展〔横浜市道路局橋梁課主催〕	8月25日～9月5日	横浜市庁舎	神奈川
164	企画展示「関東大震災と横須賀」	8月25日～9月27日	横須賀市立中央図書館	神奈川
165	戦争の加害パネル展 特集展示「関東大震災時朝鮮人虐殺」〔記憶の継承を進める神奈川の会主催〕	8月26日～9月3日	かながわ県民センター	神奈川
166	企画展「関東大震災100年 船と港から見た関東大震災」	8月26日～11月5日	横浜みなと博物館	神奈川
167	企画展「そのとき新聞は、記者は、情報はー関東大震災100年ー」	8月26日～12月24日	ニュースパーク（日本新聞博物館）	神奈川
168	企画展「100年の記憶と記録ー小田原の関東大震災ー」	8月26日～10月29日	小田原市郷土文化館	神奈川
169	ミニ展示「関東大震災100年 古き横浜の壊滅 O.M.プール旧蔵資料より」	8月26日～11月30日	横浜開港資料館	神奈川
170	横浜開港資料館・横浜都市発展記念館合同特別展 関東大震災100年「大災害を生き抜いてー横浜市民の被災体験ー」	8月26日～12月3日	横浜開港資料館	神奈川
171	「関東大震災の記憶展」〔小田原史談会主催〕	8月26日～9月3日	おだわら市民交流センター UMECO	神奈川
172	特別展示「A Memorial ジェニー・M・カイパー 関東大震災から100年」	8月28日～2024年3月31日	フェリス女学院歴史資料館	神奈川
173	パネル展「関東大震災100年ー写真とことばで知る茅ヶ崎の関東大震災ー」	8月29日～10月31日	茅ヶ崎市博物館	神奈川
174	寄贈品コーナー展示「大正関東地震と平塚の地盤」	8月31日～10月15日	平塚市博物館	神奈川
175	企画展「100年前の大災害 関東大震災」	9月1日～10月31日	箱根ジオミュージアム	神奈川
176	「関東大震災あれから100年」	9月1日～11月30日	南足柄市立図書館	神奈川
177	气象台特別展示「あの日を忘れずその日に備える」	9月1日～未定	横浜地方気象台	神奈川
178	パネル展「横浜の関東大震災と復興」	9月1日～17日	横浜市民防災センター	神奈川
179	企画展「大正12年の原三溪ー良きも悪しきも：大師会茶会と関東大震災ー」	9月1日～12月10日	三溪記念館	神奈川
180	「関東大震災100年」展示会	9月1日～30日	鎌倉市中央図書館	神奈川
181	「郷土史展」〔鶴見歴史の会主催〕	9月12日～15日	横浜市鶴見区役所	神奈川

No.	展示名	会期	会場	都道府県
182	「神社と震災」	1期：9月16日 ～10月22日、 2期：10月25日 ～2024年秋頃	寒川神社	神奈川
183	ミニ展示「関東大震災と相模原」	9月16日～11月30日	相模原市立博物館	神奈川
184	企画展示「三浦半島の関東大震災―100年前の地震と津波―」	9月26日～12月27日	葉山しおさい博物館	神奈川
185	〔関東大震災の小田原市内の鉄道被害などを伝える資料展 小田原鉄道歴史研究会主催〕	10月14日～19日	おだわら市民交流センター UMECO	神奈川
186	企画展「関東大震災と箱根」	10月14日～12月10日	箱根町立郷土資料館	神奈川
187	企画展「関東大震災―寒川の被害と復興―」	10月17日～12月28日	寒川文書館	神奈川
188	「関東大震災から100年」 災害史パネル展示	11月8日 ～2024年2月6日	横須賀市内の各行政センター	神奈川
189	横浜都市発展記念館・横浜開港資料館アウトリーチ展示「関東大震災100年 横浜市庁舎の関東大震災」	11月16日～11月29日	横浜市庁舎	神奈川
190	関東大震災100年パネル展示「同潤会がめざした理想的な住まいと住環境 ～新しい都市と郊外の暮らし～」	11月21日～12月15日	神奈川大学みなとみらいキャンパス	神奈川
191	ミニ展示「災害は忘れた頃にやってくる―丹沢地震と横浜―」	12月1日 ～2024年2月15日	横浜開港資料館	神奈川
192	企画展「伝える―災害の記憶 あいおいニッセイ同和損保所蔵災害資料」	4月22日～6月4日	新潟県立歴史博物館	新潟
193	特別企画展「100年前！『関東大震災』を伝えた新聞―吉田冬蔵（東伍三男）コレクションから―」	8月29日～11月26日	吉田東伍記念博物館	新潟
194	「絵葉書に見る関東大震災と江戸鯉絵の世界」〔新潟大学災害・復興科学研究所主催〕	9月1日～9月22日	新潟大学駅南キャンパスと きめいと	新潟
195	企画展「『露宿』を読む―泉鏡花と関東大震災」	6月1日～9月18日	泉鏡花記念館	石川
196	特別企画展「関東大震災から100年」	9月1日～10月31日	富山県広域消防防災センター 四季防災館	富山
197	資料展示「関東大震災から100年―過去の災害に学ぶ―」	6月13日～9月3日	山梨県立図書館	山梨
198	企画展「関東大震災と上伊那地域一次の100年に備えて―」	8月26日～10月9日	伊那市立高遠町歴史博物館	長野
199	所蔵資料企画展「明治23年の丸子村議会文書や大正12年9月発生の関東大震災関係文書など―明治から昭和の公文書にみる上田市の歴史―」	8月26日～12月3日	上田市公文書館	長野
200	特別展「伊東の関東大震災」	8月3日～10月31日	伊東市文化財管理センター	静岡
201	企画展「熱海の昔の災害」	8月～9月24日まで	熱海市立図書館	静岡
202	特別企画展「関東大震災（第1部） 地震の正体を探る―関東大震災と地震学―」	5月10日～8月10日	名古屋大学減災館	愛知
203	愛知サマーセミナー展示会「関東大震災における朝鮮人虐殺について」〔名古屋大学コリア文化研究会主催〕	7月15日	名古屋市立大学	愛知
204	関東大震災から100年 特設展示「災害にそなえ展」	8月1日～9月10日	豊田市防災学習センター	愛知

No.	展示名	会期	会場	都道府県
205	特別企画展「関東大震災（第2部） 震源直下で何が起ったか―神奈川県・関東大震災―」	8月30日～11月24日	名古屋大学減災館	愛知
206	企画展「関東大震災～100年前のあの日…経験者は語る～」	9月1日～12月3日	名古屋市港防災センター	愛知
207	図書館資料展「災害を防ぐ 災害を減らす」	9月2日～10月9日	豊橋市中央図書館	愛知
208	特別企画展「関東大震災（第3部） 関東大震災が造った東京―帝都復興事業とその後―」	11月29日 ～2024年3月28日	名古屋大学減災館	愛知
209	企画展示「災害時こそ手を取りあって―地震・水害・台風―」	7月24日～10月19日	滋賀県立公文書館	滋賀
210	企画展「関東大震災から100年 災害と井伊家伝来資料」	9月1日～10月4日	彦根城博物館	滋賀
211	特集展示「関東大震災から100年 池田遙邨《大正12年9月関東大震災》の全貌」	7月13日～10月1日	京都国立近代美術館	京都
212	関東大震災100年企画展「災害をのりこえる晶子の意志」	5月20日～6月11日	さかい利晶の杜	大阪
213	企画展「大震災」	2024年1月～3月	ミューズ大学図書館〔関西大学〕	大阪
214	企画展「関東大震災100年。100年前と今。都市における大災害に備えよう！」	9月1日 ～2024年1月28日	人と防災未来センター	兵庫
215	「関東大震災100年 奈良県理事官が見た帝都」展	8月29日～9月28日	奈良県立図書情報館	奈良
216	特別展「南方熊楠と関東大震災―100 年前の地震と影響―」	10月29日 ～2024年1月28日	南方熊楠記念館	和歌山
217	祐生コレクション「あれから100年―関東大震災資料展―」	8月5日～10月9日	佑生出会いの館	鳥取
218	特別展示「夢二と関東大震災」	8月29日～12月3日	夢二郷土美術館本館	岡山
219	「関東大震災100年」	8月1日～30日	周南市立中央図書館	山口
220	イベント関連本展示「地震と防災の本～関東大震災から100年～」	8月22日～10月1日	香川県立図書館	香川
221	ミニテーマ展示「関東大震災100年―久留米市文化財収蔵資料から」	8月25日～9月25日	六ツ門図書館	福岡
222	ミニ企画展「関東大震災と柳川」	9月1日～30日	柳川古文書館	福岡
223	所蔵資料展「関東大震災と佐賀―佐賀からの被災地救援―」	8月10日～12月10日	佐賀県公文書館	佐賀
224	「大震災と新聞報道展 地方紙はどう伝えたか」	8月3日～10月31日	新聞博物館〔熊本日日新聞社社内〕	熊本
225	トピック展示「関東大震災と改造社」	8月29日～11月5日	川内まごころ文学館	鹿児島
226	図書コーナー展「関東大震災絵葉書特集」	12月12日 ～2024年3月31日	薩摩川内市川内歴史資料館	鹿児島

- ・2023年～2024年に開催された全国の自治体・博物館・図書館・美術館等の公的機関のほか、企業・郷土史団体等の民間団体が開催した関東大震災100年関連展示の情報を記載した。
- ・展示情報の出典は、各機関の公式ウェブサイトのほか、各報道機関のウェブサイトに記載された情報をもとに作成した（最終閲覧：2024年2月29日）。
- ・展示情報は都道府県ごとに都道府県コード順に並べ、都道府県内の情報は展示会期の早い順に配置した。
- ・2023年開催展示の西暦表記は省略し、2022年・2024年開催展示のみ西暦を表記している。
- ・補足情報は適宜亀甲括弧内に補った。

〔史料紹介〕

八木熊次郎の関東大震災

―『大正十二年九月一日関東大震災日記』を中心に―

吉田 律人

一、被災者の体験記

も多く、横浜市内では、戦災を逃れた小学校児童の記録集もいくつか現存する^②。それらの体験記は時間経過に伴うバイアスが少なく、被災地の惨状を生々しく伝えている。

今日、「関東大震災」と呼称される地震災害は、防災・減災だけでなく、人災の部分を含めて様々な視点から論じられているが、その基礎には史料批判に基づく実証的な研究がなければならない。関東大震災を伝える文字資料は主に行政機関の編纂した「災害誌」を中心に、同時代の新聞や雑誌等のメディア、公文書などがある一方、個人の体験記も数多く残っており、それらを集合させて検証していくことで、面としての災害像を描くこともできる。当然ながら一つの体験記に関しては、それぞれ史料批判が求められ、被災者の①執筆の時期や②執筆の背景、③保存及び公開の経緯等について検証していく必要がある。体験記の執筆経緯は様々で、例えば、フェリス女学院所蔵の『大正拾貳年九月一日大震災火災遭難実記』のよう^①に、発災から間もない時期に学校教員の指示で学生が執筆した例

他方、本稿で紹介するのは、小学校教員の記録である。元街尋常高等小学校の訓導であり、洋画家でもあった八木熊次郎（彩霞）は日記やスケッチ、アルバム等の形で自らの体験を残していた。熊次郎の経歴は息子の八木洋美氏の著した『彩霞功罪録』に詳しく^③、関東大震災八〇年となった二〇〇三（平成一五）年以降、横浜開港資料館は三二点の資料（八木洋美家文書）を保管している^④。その後、二〇一〇年九月の特別資料コーナー展示「関東大震災」で初めて出陳したのを皮切りに、二〇二三年の特別展「大災害を生き抜いて―横浜市民の被災体験―」まで、横浜の惨状を伝える基礎的な歴史資料として展示等で紹介してきた。また、資料群の中核をなす『大正十二年九月一日関東大震災日記』は朝鮮人に対する迫害、殺傷行為を解明する観点からいくつかの研究で活用されているほか^⑤、部分

的な翻刻も行われている⁽⁶⁾。しかしながら、熊次郎の記録は膨大で、人災問題の記述のみにとどまらない。近代日本の災害史研究においても示唆に富む資料群だと考えられるが、本格的な研究はなされていないのが現状である⁽⁷⁾。そこで本稿では、将来的な活用を視野に入れつつ、熊次郎の体験記を全文翻刻するとともに、若干の解説を加えていきたい。

二、八木熊次郎について

既述の通り、八木熊次郎の経歴は『彩霞功罪録』に詳しいほか、一九二三（大正一二）年刊行の『愛媛県人物名鑑』第一輯（海南新聞社）⁽⁸⁾や、一九三四（昭和九）年刊行の『伊予の事業と人物』（愛媛通信社）⁽⁹⁾、『愛媛県紳士録』（愛媛新報）などにも人物情報が掲載されている⁽¹⁰⁾。また、八木洋美文書には「彩霞の一生」と題したノートもあり、出生からの出来事を熊次郎本人が記している⁽¹¹⁾。これらから熊次郎の活動を追うことができる。

一八八六（明治一九）年二月五日、愛媛県松山市夷子町に生まれた熊次郎は、愛媛師範学校を卒業した後、県内小学校で教師、校長をする傍ら洋画家の道を志した。一九一六年九月、同郷の恩師である山内鶴吉の誘いで尋常高等元街小学校（一九二三年四月に改称）の教師に就任すると、愛媛県から家族を連れて横浜市に移住、ドイツ人画家の指導を受けながら絵画の修業を続けた。その後、一九一八年に森永ミルクキャラメルのパッケージのデザインを請け負ったほか、横浜市の史料展覧会の絵画五点（開港以前の横浜、開

港後の横浜、井伊直弼の肖像、ハリスの肖像、ペリーの肖像）を手掛けるなど、業績を重ねていった。さらに一九二〇年には、宮内省の依頼で明治天皇の肖像を描き、一九二二年には、旧松山藩主の別邸である萬翠荘の建設に際し、久松定謨伯爵の要請を受けて「三坂峠」と「神奈川台場の図」の二枚を描いた。そうした仕事を通じて、熊次郎は人脈とともに、多くの人の評価を得ていく。

関東大震災後の一九二五年、元街尋常高等小学校を退職した熊次郎はパリに留学、交友関係を広げると同時に、自らの腕を磨いていった。そして一九二七（昭和二）年に帰国した後は、東京府荏原郡碑谷町碑文谷（現・目黒区鷹番）にアトリエを構え、専業の洋画家として一九六八年まで絵を描き続ける。その間、活躍の場は朝鮮半島や満州、東南アジアにも広がり、戦後、一九六九年一月一日に八三歳でこの世を去った。熊次郎は絵だけでなく、文筆にも長けており、留学経験を記録した『彩筆を揮て欧亜を縦横に』（文化書房、一九三〇年）を著しただけでなく、自らの生涯に関する記録を書き残している。横浜開港資料館に保管されている八木洋美文書からは、関東大震災時の横浜の状況とともに、熊次郎の活動の一端を窺い知ることができる。

三、八木熊次郎の記録

八木熊次郎は自らの被災体験をいくつかの文字資料で残している。【史料一】「大正十二年九月大震災画録」の解説は熊次郎が描いた一六枚のスケッチに付された体験記である。各スケッチには、それ

それぞれの場面の説明が詳しく記されており、熊次郎の心情の変化が窺える。スケッチの作成意図について熊次郎は、「此画録は灰燼の横浜より忙はしい人々に代って罹災の状況を故郷の方々に報ぜん為め混雜の間に思い出づるままを絵にしたものであります」と表紙にあり、郷里の愛媛県松山市の人々に横浜の惨状を訴えるため、描かれたと推察できる。正確な作成時期はわからないが、図一五が松山に帰る船上であることから、一九二三年（大正一二）年九月二二日以降の早い時期だと考えられる。

続いて【史料二】八木熊次郎の報告書は横浜市史料室所蔵『震災記念元街小学校復興誌資料第貳編（罹災史）』の「職員罹災各論」に収められた熊次郎の体験記である。同校の山内鶴吉校長は、教職職員たちに「一、地震まで」「二、其の刹那」「三、我家へ」「四、吾が家」「五、安定まで」と、問いかかけの定まった書式で報告書の提出を命じており、これらから教職員の動きを追うことができる。熊次郎は一〇五の問いかかけの要素を踏まえつつ、帰宅するまでの内容をまとめている。作成の時期は発災からそれほど時間が経過していない時期であろう。なお、『元街小学校復興誌資料第貳編』には、熊次郎が描いた彩色画が挿絵として九枚収められている。

【史料三】と【史料四】は『大正十二年九月一日関東大震災日記』の前編と続編の全文翻刻である。主に前編は地震発生の前日から郷里の松山に避難するまで、続編は郷里での活動から横浜に戻り、一九二四年一月一五日の丹沢地震を経験するまでが綴られている。作成時期は丹沢地震からあまり時間が経過していない時期であろう。前編では、石川仲町一丁目の理髪店で被災し、その後、被災地で苦

しい生活をおくる様子が細かく記されている。興味深いのは、郷土愛や同郷者意識、旧松山藩主である久松家との関係などが垣間見える点で、愛媛県、特に県知事であった宮崎通之助に対し、不満を募らせていく過程がわかる。ここから都市移住者が直面した災害時の課題が浮き彫りになってくる。さらに続編は発災から帰郷までの過程を概観した上で、帰郷後に行った熊次郎自身と宮崎県知事との口論の様子を記録している。同郷者支援に対する地元新聞の報道など、愛媛県庁の対応に対する自らの感想を綴っており、災害時の被災者の心境が窺える。

【史料五】「郷党と県当局の無情を怨む」は一九二三年九月二九日付の『海南新聞』に掲載された熊次郎のインタビュー記事である。九月二四日、高浜港に到着した熊次郎一家は関係の深い景浦直孝（教員・郷土史家）の支援を受けつつ、避難生活を送ることになった。この過程で郷里の人々に感謝の念を抱く一方、愛媛県庁の役人や伊予鉄道の職員の対応に怒りを覚えていた。その後、友人でもある松山市長の岩崎一高を通じて二八日に宮崎県知事と面会、【史料四】にもあるように、激しい応酬を展開した。熊次郎はその足で海南新聞社へむかい、「私は此の窮状を訴へたいと今日宮崎知事を訪問して具さに窮状を訴へたのですが知事は全然相手にしてはくれません」と自らの不満を吐き出したと考えられる。この記事から熊次郎の日記の内容が裏付けられるとともに、郷里における熊次郎の存在感を知ることができる。

以上のように、【史料一】から【史料五】を通すと、熊次郎の被災体験の多様な側面を見ることができ、紙幅の関係上、踏み込ん

だ分析はできなかったが、熊次郎の体験記からは、大きく①被災、②救助活動、③流言の拡大・混乱、④安定化、⑤被災地の生活、⑥旧松山藩主との関係、⑦避難行動、⑧郷里での活動、⑨学校の再開、⑩丹沢地震と、局面の変化がわかる。それぞれ他の史料と組み合わせることで、横浜市における関東大震災の状況、被災地とそれ以外の地域との関係などを明らかにできよう。なお、熊次郎の体験記に基づく詳細な分析は改めて別稿で行いたい。

〔註〕

- (1) 同史料はフェリス女学院一五〇年史編集委員会編『関東大震災女学生の記録 大震災遭難実記』（学校法人フェリス女学院、二〇一〇年）として刊行されている。翻刻作業は後藤周のグループが担い、フェリス女学院一五〇年史編集委員会が照合と校閲、編集作業を行っている。また、大西比呂志が一九三二年九月一日に『大震災遭難実記』をまとめた寺田醇造や横浜の被災状況等について解説を加えている。
- (2) 例えば、横浜開港資料館は「南吉田小学校震災関係資料」として南吉田第二尋常小学校の『震災記念綴方帖』、「横浜開港資料館蔵諸文書」として石川小学校の『震災二関スル作文』を所蔵している。
- (3) 八木洋美『彩霞功罪録―絵描きになった横浜元町小学校の先生』（文芸社、二〇〇四年）。
- (4) 詳細は横浜開港資料館編『横浜開港資料館資料総覧』（横浜開港資料館、二〇〇六年）六三頁のほか、横浜開港資料館閲覧室の『八木洋美家文書目録』を参照。また、寄託記録は『開港のひろば』第八二号（二〇〇三年一〇月）八頁の「資料館だより」を参照。
- (5) 山本すみ子「横浜における関東大震災時朝鮮人虐殺」（『大原社会問題研究所雑誌』第六六八号、二〇一四年六月）、後藤周『それは丘の上から始まった―一九二三年横浜の朝鮮人・中国人虐殺』（ころから、

二〇二三年）など。なお、後藤は自らが発行する『関東大震災研究ノート』第一二五号（第一二七号（二〇一七年九月～一〇月）において山本論文の問題点を指摘しつつ、実証的な研究の重要性を訴えている。

- (6) 姜徳相・山本すみ子編『神奈川県関東大震災朝鮮人虐殺関係資料』（二二書房、二〇二三年）二七〇～二七一頁。この部分は「関東大震災時における朝鮮人虐殺を究明する横浜の会」が二〇一六年に刊行した『関東大震災時朝鮮人虐殺横浜証言集』の内容を再録している。

- (7) 日記の一部については吉田律人「地震発生と被災者の行動」（『開港のひろば』第一二二号、二〇一三年七月）、同「関東大震災を生き抜いて―横浜市民の避難行動―」（横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編『関東大震災一〇〇年 関東大震災と横浜―廃墟から復興まで―』公益財団法人横浜歴史博物館、二〇〇三年）で紹介している。

- (8) 宮内保之進編『愛媛県人物名鑑』第一輯（海南新聞社、一九三三年）一〇七頁。八木洋美家文書―一。

- (9) 清野静編『伊予の事業と人物』（愛媛通信社、一九三四年）二二四頁。

- (10) 安藤音三郎『愛媛県紳士録』（愛媛新報、一九三四年）五二頁。

- (11) 「彩霞の一生（経歴書）」（横浜開港資料館所蔵、請求番号：八木洋美家文書―二四）。

- (12) 元街尋常高等小学校の歴史は横浜市役所編『横浜市史稿教育編』（横浜市役所、一九三三年）三五四～三五九頁を参照。

史料翻刻

〔凡例〕

- 一、原則として旧字体は新字体に改めたが、固有名詞は原文のままとした。また、同様に表記の不統一もそのままとした。
- 二、読み易さを考慮し、適宜改行したほか、句読点を付した。
- 三、修正箇所は抹消部分は二重取り消し線とした。
- 四、本文中、判読できない部分は■で示した。また、誤用字等に関しては、必要に応じて右傍に「ママ」を付した。
- 五、原文には今日では不適当な表現も見られるが、史料の翻刻を目的とするためそのままとした。
- 六、翻刻作業にあたっては、大串真未氏（横浜都市発展記念館臨時職員）の協力を得た。

【史料一】「大正十二年九月大震災画録」の解説

大正十二年九月 大震災画録 八木彩霞

未曾有ノ大震大火ノ難ニ殉ゼラレタ十数万ノ亡キ靈ニ対シテ、深ク哀悼ノ意ヲ奉ゲマス。此ノ災禍ニ際シ、物資ノ供給ニ傷病ノ救済ニ、バラックノ建築ニ厚キ友情ヲ尽サルル同胞諸彦ニ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表シマス。

此画録ハ灰燼ノ横浜ヨリ忙ハシイ人々ニ代ツテ罹災ノ情况ヲ故郷ノ方々ニ報ゼン為メ、混雑ノ間ニ思ヒ出ツルママヲ絵ニシタモノデアリマス。

第一図

大正十二年九月一日元町へ所用アツテ、午前七時過自宅ヲ出タ。其帰途、理髪店へ立寄ツテ奥ノ座敷デ昼食ヲヤリカケテイタラ、ゴークト遠雷ノヤウナ響ガシタト思フト大強震ガ襲フテ来タ。理髪屋ノ細君ガ大声ヲアゲテ電車通りへ飛ンデ出タ。小生ハ驚イテ立チ上リ鴨居ト柱ヲ両手デ支ヘタガ中々止マナイ、筆筒ハ倒レル壁ハ落チル、コレデハトテモ此家ハモタナイト思ツタガ、手ヲ離セバ頭上へ棟木ガ落チテ来ルヤウナ氣ガシテ手ヲ離ス氣ニハナレナカッタ。店ノ方デハ客人ヤ職人達ガ大騒キヲヤツテイタ。(一日午前十一時五十八分頃)

〔スケッチ解説〕 大正十二年九月一日午前十一時五十八分頃 彩霞

第二図

其ノ中ニ棟木ガメリ／＼ト折レカケタノデ、思ヒ切ツテ電車道へ飛ビ出シタ。振り向ヒテ見ルト今居ツタ家ハ粉微塵ニナツテイタ。アタリ一带赤褐色ノ砂塵デタ暮ノヤウニ暗クナツタ。大地ガボン／＼裂ケル、家ハ倒レル、電線ハ切レル、破レタ家カラ負傷シタ男ヤ女ヤ子供ガ悲鳴ヲアゲテ這ヒ出シテ来ル。忽チ阿鼻叫喚ノ修羅ノ巷ヲ現出シタ。(一日午前■正午頃)

〔スケッチ解説〕 大正十二年九月一日正午頃 彩霞

第三図

潰レタ家ノ中カラ助ケヲ呼ブ声ガ聞ヘル。飛出シタ理髪師ノ細君ガ助ケテヤツテ下サイ、ト泣キ叫ブ。近所隣リノ人モ自分ノ身体、自分ノ家ガ大事ダカラ誰一人助ケテ行ク者ハナイ、大地ハマダ頻リニ動イテイル。各方面ニ火ノ手がアガツタ。躊躇スル時デナイ、助ケナクテハ、男ガタタント決心シテ破風ヲ引キ破ツテ真暗ナ中ヘ一人デ飛ビ込ンダ。ソウシテ辛ジテ四人ヲ助ケ出シ、五人目ヲ出サウトシタ時、隣家マデ火ガ迫ツテ来テ火ノ粉ガ破レタ穴カラ吹キ込ンデ来タノデ、可愛サウダガ是迄タト悲痛ナ言葉ヲ残シテ逃レ出タ。アトデ幾度トナク余ノ名ヲ呼ンデイタ。(一日午後零時十分頃)

〔スケッチ解説〕大正十二年九月一日午後零時十分頃 彩霞

第四図

猛火ハ三方カラ迫ツテ、釜中ニ座スル様ニ暑イ、逃げ場ハ前方ノ山ニ登ラウトスレバ木ノ根ハ皆抜ケ大岩ハ今ニモ崩レカカラントシテ居ル。終ニ万策尽キテ、墜壞シテ居ルトンネルノ中ヘ逃込ミ、桜道下ヘ逃レ出タ。ソレカラ山ノ手ヘ登ツテ見ルト、狂氣ノヤウニナツタ西洋婦人ガ頻リニ助ケヲ求メテイル。行ツテ見ルト、其婦人ノ子供ガ三人倒レカカツタ洋館ノ窓ヘ出テ泣キ叫ンデイル。ヨシ助ケテ遣ラウト側迄幾度トナク行ツタガ、距離ガ相当アツテ飛ビツケナイ。(一日午後零時二十五分頃)

〔スケッチ解説〕大正十二年九月一日午後零時二十五分頃 彩霞

第五図

其中ニ家ハ次第ノ二焼ケタ。子供ノ悲鳴ハ今ハ全ク消ヘテ火ノ燃ヘル音、家ノ倒レル音バカリ耳ヲ剪イデ聞ヘル。西洋婦人ハ急ニ狂氣シテ火ノ中ヘ飛ビ込マウトシタカラ、婦人ノ胴中ヘ絡着キ小股ヲ入レテ地割レノ中ヘ叩キ込ミ押ヘツケタ。彩霞大活劇ノ一幕。(一日午後零時四十分頃)

〔スケッチ解説〕大正十二年九月一日午後零時四十分頃 彩霞

第六図

其婦人ノ主人ト思シキ男ガ血眼ニナツテ帰ツテ来テ、此有様ヲ見テ非常ニ余ニ感謝シタ。ソレカラ共ニ其婦人ヲ引キヅルヤウニシテ旧教会堂ノ裏庭ヘ避難サセタ。サウスルト異人ノ老婆ノ宣教師ガ笑ヒナガラ出テ来テ、貴嬢嘆クコトアリマセン、神様ノ御許ヘ御子供ガ招カレタノデス、目出度イ門出アリマス、ト云ツタ。

彩霞ハクリスチャンデナイ悲シサニ、其ガ慰安ノ言葉トハ如何シテモ受取レナイ。「コノ老婆何ヲ云ヤガルンダ、ベランメー前モ僕ガ可愛イ子供ヲ招クニ焼イタリ潰シタリシテ招カナクトモ、モツト優シイ招キ方ガアリサウナモノダ」ト擲ツテヤリタカツタ。(一日午後零時五十分頃)

〔スケッチ解説〕大正十二年九月一日午後零時五十分頃 彩霞

第七図

火ハ猛威ヲ逞シウシ山下町、元町、上野町ノ方面ヨリ立ち昇ル、

伊豆ヲ筆頭ニ兵庫、大阪、愛知、岐阜、福島、岩手、高知、福井、広島等十日前後ニハ殆ンド全国ニ亘リ救護団トシテ青年団、在郷軍人団、宗教団ナドノ名ノモトニ入り込ミ来リ、^マ同胞救護ノ外ニ各自郷土出身者ノ保護救済ニ尽サレタ。コノ暖キ厚情ヲ尽サレタル同胞諸彦ニ対シテ何人モカ嬉シ涙ニ咽バヌモノハナカツタ。

〔スケッチ解説〕 彩霞

第十二図

十日前後ヨリ震災ノ為メニ仆レタ幾万ノ^マ黒焦ゲノ死体ヲ幾ヶ所カニ積ミ分ケ焼直シノ火葬ヲ行ツテイルトコロモアリ、又或ハ縁辺身寄りノ者共ニ探シ見出サレ、再ビ肉親手ヅカラノ火葬ヲ受ケテ白骨ヲ拾ハルルモノモアリ、異臭鼻ヲツイテ愴凄ノ氣、身ニ迫ルヲ覚ヘシメタ。シカシナガラ之等ハ死後ノ幸多キ部分デ焼死、水死者ノ多キ場所ニテハ何者トモ判明セザル幾多ノ死屍ガ畜犬ノ屍ト共二十幾日モ野天ニ捨テ置カルル始末デアツタ。

〔スケッチ解説〕 惨死者火葬の図 彩霞

第十三図

不安ナ^マ夜ハ幾曲トナク続イタ。四田。遭難地域ノ混雑ハ日ニ増シ甚ダシク、急造ノ棺ニ野花ヲ供ヘ、或ハ合葬シタトコロヘ、仮墓標ヲ建テテ震死シタ人々ノ冥福ヲ祈ル等ヒトキハ人ノ心ヲ痛マシメタ。

〔スケッチ解説〕 彩霞

第十四図

混乱ニ続イテ物資ハ刻々ト欠乏ヲ告ゲ、食料ハ^マ云フ迄モナク、身ニ一紙片布ヲモ持タザル人々ハ懷中多分ノ通貨ヲ用意セル者ニテモ余程遠隔ノ地ニ人ヲ走ラスニ非ザレハ日常ノ物生活行止リ、餓死セザル可カラズ。余ノ如キハ、震災後、玄米ト支那米合セテ二十日間ニ一斗一升ヲ配給サレタルニ過ギス、然モ此一斗一升ハ七人ノ家族ニ対シテデアル。如何ニ當時ノ切迫セルカヲ察シ得ラレルデアラウ。漸クニシテ一塊ノ玄飯ト水ヲ飲ミ得ルノ外、不浄紙一枚ヲモ求ムル術ナク、涙モ涸レ根氣モツキ、妻子相擁シテ昏々月下ニ眠リシコト二十日余、終ニ家族数名強度ノ胃腸病ニ浸サレ、半死半生ノ痛苦ヲナメバナラヌ事ニナツタノデ、意ヲ決シテ故国ニ引上グル事ニ^マシタ。

〔スケッチ解説〕 彩霞

第十五図

九月二十二日、^マ家族ヲ引連レ一先ツ郷里ヘ避難スルコトニシタ。此日午前七時頃ヨリ雨降り出デ風サヘ加ハリ、傘サハサスコトスラ^マ出来ズ雨ニ湿レツ、上屋ナキ棧橋ニ立ツタ。送ツテクレタ親友ヤ門弟ノ誰彼ハ異口同音ニ「金モ入ラナイ、何モ入ラナイ、急イデ食フモノヲ八木君頼ムヨ」ト云ツタ。午前十一時半上海丸ハ東京芝浦沖ニ廻航シ神戸ニ向ツテ直行スルコトニナツタ。風益々強ク波愈々高シ、太平洋ノ荒浪ハ時々上甲板ヲ襲ヒ或ハ舷ヲ撃ツテ強ク響ク。船酔スル家内ヤ子供ノ身ノ上幾度トナク心配セラレタガ、幸ヒ無事ナルコトヲ得テ、翌二十三日午後三時半神戸ニ入港シタ。ココデハ神戸、大阪、京都等ノ青年団ヤ在郷軍人団、宗教団ナドガ慰問品

慰問状等ヲ給与セラレ手厚キ歓待ヲ受ケタ。

此夜八時半出帆ノ高浜丸ニテ郷里ヘ帰ル向フコトニシ、妻子ヲ携ヘ辻便所ノ傍ナル石ニ腰カケ夜泣うどんニ杯宛食フタ。子供等ガ甘サウニ食ツテイル。衰ヘタ顔ニタ日ガ斜ニサシテイタ。其時ノ光景ガマダ目ノ前ニ見ヘル様ナ心地ガスル。

「スケッチ解説」大きな浪ぢやねや 彩霞

「〔大正十二年九月 大震災画録〕、横浜開港資料館保管、請求番号：八木洋美家文書―8〕

【史料二】八木熊次郎の報告書

番号 職 元街小学校訓導 氏名 八木熊次郎

其時の住所 横浜市青木町上反町四八〇

現在の住所 全市全町全番地ノ東隣

午前十時半退校、躑躑坂^マヲ下リ元町五丁目富士屋文房具店ヲ経テ石川仲町一丁目齊藤理髪店ニ到リ散髪セントシタガ、空服^マデアツタノデ昼食ヲ取りヨセ隣室ニテ茶ヲ飲マントセシ際一大強震ガ襲ツテ来タ。

直ニ立ツテ鴨居ト柱ヲ両手デ支ヘタガ到底支ヘ切レナイカラ裏口カラ電車通りヘ飛び出シタ。其刹那家ハ反対ノ方向ニ倒レタ。

近所ノ人ハ皆コノ電車通りニ集ツタ。地ハ裂ケ、電線ハ切レ、桜山ホテルハ宙返シテ落ち、躑躑坂^マハ潰落シ砂塵ハ^マ立チ昇ツテ四辺ガ夕暮ノヤウニナツタ。数十間ト隔ツテイナイ三方面ニ火災ガ起ツタ。余ガ居タ理髪店ノ内部カラ悲鳴ガ聞ヘテ来ルカラ直ニ潰レ

タ屋根ニ這上リ破風ヲ引破ツテ^マ真黒ナ内部ヘ這入り、四人ノモノヲ助け出ス。此時火ハ一軒向フ迄迫ツテ来タノデ屋根ヨリ飛び降り、再ビ電車道ニ出テ我校ノ児童数名ト負傷者ニ手当ヲナス。其中二火ハ益々迫リ来ツタノデ、余ガ先頭トナリ「從テコイ」ト叫ビツ、潰レタ山ニ登ツテ元街学校々庭ヘ行カントシタガ、山ノ木ハ倒レ大石落チカ、リ、登ル能ハズ。万策尽キテ入口ノ殆ト塞ガツテイル山手トンネルノ内ヲ突破シ本門ヨリ学校ニ入ラントシタ折、学校ノ隣リノ外人屋敷前ニ三十前後ノ外国婦人^マ半狂乱ニナツテ地面ニノタウツテイタ。慰メテヤラウト思ツテ側ヘ行クト、其婦人ガ自宅ヲ指シテ「ハツ六ツ四ツノ子供」ト云フ。見レバ三人ノ子供ガ二階ノ窓ニ出テ泣キ叫ンデイル、ヨシ助ケテヤルト其ニ向ツタガ、距離ガアツテ飛びツケナイ、其中二火ガ其家ノ端ニツイタ。ソシテ子供ハトウドウ焼死ンデシマツタ。婦人ハ狂人ニナツテ其火ノ中ヘ飛び込マントシタカラ、婦人ニ飛びツキ地裂ケノ中ヘ押チ込ンダ。其中二其婦人ノ^マ夫ラシキ人来リシ為メ、共ニ婦人ヲ引き起シテ手渡し、自分ハ学校ヘ行ツタ。ソシテ矢口訓導ノ負傷シテ居ラレルノヲ看護シタリ、関戸訓導ガ捧ゲ来ツタ 御真影ヲ風呂敷ニ包ミ使丁ニ負ハセ山手公園ヘ避難サセタリシタ、午後二時過コ、ヲ出テ吾家ニ向ツタ（通路ハ山手：根岸：弘明寺：久保山：程ヶ谷：東海道筋ヲ東上）。

帰宅午後七時半頃帰宅シタ。

吾家ハ老母六十六才、妻二十九才、長女十一、長男九才、次女七才トデ折柄昼食中デアツタガ裏庭ヘ子供ヲカカヘテ飛び出シタガ幸ニ皆無事、家ハ階下ガくノ字ナリニ曲リ、階上ハ鈴虫籠ノ如クニナツテ二階ト下トガ分離シテ居ル為、居住スル能ハズ。止ムナク^マ

■裏庭へ竹ノ柱、襖ノ屋根、鶏舎ナドヲ利用シテ犬小屋ノ如キ住居ヲ作り、雨漏リト、井水ト、食料トニ苦シメラ〔レ〕ツ、夜ハ夜警ニ、昼ハ食料ヲ求メニ、二十三日マテヤツテイタガ家族相次イテ強度ノ胃傷病ニ冒サレ、終ニ刀折レ矢尽キテ故郷愛媛県松山市ヘ避難シタ。ソシテ教科書ノ収集ヤ慰問品ノ送遣ニ尽力ヲシ、十月廿二日、家族ヲ残シ置キ單身帰浜シタ

公ノ務トシテハ当日数名ノ児童ヲ安全地帯ニ避難サセタコト、教科書其他慰問品ノ発送運搬ニ努力シタコト。

補説 腕力ヨリモ精神ノ修養ガ必要タト思ツタ。

〔横浜市史資料室所蔵『震災記念 元街小学校復興誌資料 第貳編（罹災史）』、請求番号…元街小学校資料―H―二〕

【史料三】大正十二年九月一日 関東大震災日記前編
〔表紙〕

大正十二年九月一日

関東大震災日記 前編

罹災者 八木熊次郎

大正十二年九月

関東地方大震災日記〔前編〕

罹災者 八木彩霞述

目次

一 震災ノ前日

- 二 震災当日
- 三 九月二日
- 四 雲上ノ御消息
- 五 九月三日
- 六 九月四日及ビ五日
- 七 救恤ノ至情
- 八 在浜愛媛県人ノ窮状
- 九 久松伯爵家及先輩知己訪問
- 十 刀折レ矢尽キテ故郷ヘ

大正十二年 関東大震災日記前編

罹災者 八木熊次郎述

一、震災ノ前日

故郷愛媛県松山市ヘ年々夏期休暇ヲ利用シテ墓参旁写生旅行ニ出カケルノガ例デアル。何時モ家族ヲ連レテ行クノデアルガ、本年ハ都合アツテ自分一人デ七月三十一日午前九時二十分発ノ特別三等急行デ尾之道ヲ經由シテ帰松シ八月一日カラ北夷子町七一景浦直孝先生ノ御宅ニ滞在シテ付近各地ノ写生ヲシタリ愛媛教育協会松山部会ノ依頼ニ応ジテ余ノ創作シタインセンス画法ノ講習ヲシタリ等シテ夢ノ中ニ一ヶ月ヲ過シテシマツテ八月三十日沢山ノ御土産物ナド戴キ先輩ノ方々ヤ親族知己ニ送ラレテ午前九時名残リヲ惜ミツツ高浜港ヲ発シタ。

波ノ静カナ瀬戸ノ海、烟波ノ中ニ消ヘテ行ク故郷ノ山々ヲ幾度トナク振り向イタ。ソウシテ如何シタノカ本年ハ家族ガ先方ニ待ツテ

イルノニコンナニ別レ辛イノダラウ不思議ダナー全ク後髪引カレルヤウナ心持チガスル等ト思ツタ。船ハ午後二時過ギ二尾之道港へ着イタ。船中デ心安クナツタ同郷ノ男女学生ニ荷物ノ監督ヲ頼ムデ置イテ発車時間ニ少シ間ガアルモノダカラ湯ニ浴シ髪ヲアタツテ来タ。ソウシテ午後五時過ギノ急行列車ニ乗ツタ。汽車ハ満員デアツタガ最後ノ三両ガ比較的隙イテイルト赤帽ガ注意シテクレタノデ一番後方ノ列車ニ乗ツタ。コノ汽車ノ最後ノ三室ハ壮年ノ労働者風ノ朝鮮人デ満サレテ居ツタ。

汽車ガ福山ヲ過グル頃ニハ夕陽ガ西ニ沈デ鼠色ノ雲ガ淡ク棚引イテイタガ急ニ雨模様ニナツテ大粒ノ雨ガ降り出シタ。ソウシテ雷鳴ガ鋭ク響キワタリ汽車ノ前後ニ落雷シタ。遙方前方ノ農家ニ紫色ノ火柱ガ立ツタト思フト忽チ大火災ガ起ツタ。車中ノ者ハ皆右窓ニ倚リカカツテ眺メテイタガ、其家ハ瞬時ニ二階ガ焼ケ落チタ。然ルニ誰一人消シニ出テ来ル人モナケレバ、其家ノ人モ這ヒ出テ来ナイ。多分人事不省ニナツテ居ルノデアラウ氣ノ毒ダ可愛想ダト云ヒ合ツテ同情シテイタガ、二日後ニ同情サルル身トナルコトハ神ナラヌ身ノ誰人モ予想シタモノハナカツタノデアル。

翌八月三十一日午前十一時十九分横浜駅ニ着イタ。親族ノモノヤ家族ノ者ヤ親友ヤ門弟等ガ迎ヘテクレタ。清美ヤ朝子、富美子等ガ一ヶ月モ逢ハナカツタモノダカラ喜シギ飛ビ上ツテ喜ンデイタ。迎ヘテクレタ者モ心カラ喜ンデクレタ。零時半ニ荷物ヲ受取り車デ自宅ヘ帰ツタ。沢山ノ御土産物ヲ並べ老母ヤ子供ヤ妻ニ夫々分ケ、コレハ誰々様ヨリ戴イタ、コレハ誰人ト分類シテ本箱ノ上ニ高ク積み上ゲ親族先輩知己ノ御後援、御同情ヲ喜ビ合ツタ。其夜親族並ニ友

人等ガ来テ酒クミ馳走シテ松山ノ話ニ夜ヲ更シ皆ガ歸ツタノガ十一時過ギデアツタ。門弟ノ仏蘭西人「ゼームス」及ヒ印度人「デラマル」ナト強キウイスキーニ酔パラヒ肩組合ヒ千鳥足デ歸ツタ。其ガ翌日ノ震災デ、印度人ハ圧死、仏人ハ行衛不明トナツタノデアル。其夜歸ル時ニ「先生ゴチサウサマ、ヨッパライマシタ。アアイエキブンニナリマシタ。コレデシンデモ、モウシブンナシ」ト二人トモ云ツタノハ蟲ガ知ラセタノカト思ハレタ。其夜妻ト松山ノ話ガ其カラ其ヘト続イテ寢床ニ這入ル頃ニハ早ヤ鶏鳴曉ヲ告グル頃デアツタ。

二、震災当日

明クレバ大正十二年九月一日関東地方未曾有ノ大震災ノ起ツタ日デアル。朝七時頃一陣ノ風ヲ伴ツタ強雨ガアツタノデ登校（始業式ノ為）ハ兎ニ角土産物ヲ配ルノハ明日ニセウト思ツテ居タガ、初代ガ多分通り雨デセウ少シ待ツテ御覽ナサイト云フノデ、予定通り土産物ヲ風呂敷ニ包ミ夏服ノ一番ヨイノヲ着、新調ノ長靴ヲハキ、金参百五拾六円幾錢ヲ入レタ墓口ヲボケツト二入レ立ち出デントシタ折リニ初代ガ「今日ハ早ク歸ツテ来テ下サイヨ御馳走ヲコシラヘテ置キマスカラ。ソレカラ御土産物ヲ反町ノ渡部芳一様ノトコロト山内先生ノトコロヘ持ツテ行ツテ置キマスカラ」。ヨシデハ元町ト山下町ヘ土産ヲ持ツテ行キ猶歸リニ借金払ヒヨ済マセテナル可ク早く歸ルカラト云ヒステテ二三歩我家ヲ出ルト又モ大雨ガ沛然トシテ降ツテ来タガ神奈川駅ニツク頃ニハ少シ小ヤミニナツタ。元町停留所デ電車カラ下リテ見ルト拭フタ様ニ空ガ晴レテ富士ノ高嶺ガ一際高ク紺碧ノ空ニ秀デイタ。学校ヘ行ツテ見ルト殆ど全職員ガ揃テキタ。

教室へ生徒ヲ入レテ第二学期ノ覚悟ト云フ題デ訓話ヲシテ九時半頃ニ生徒ヲ歸シタ。ソレカラ各職員ハ唱歌室ニ集マツテ菓子ヲ食ヒ茶ヲ飲ミナガラ雑談会ヲ始メ夏季休暇中ノ土産話ニフケリ午前十一時頃解散シタ。居残ツテ雑談シテ居ルモノモアツタガ、自分ハ早く退校シテ富士屋文具店へ立ちヨリ夏休ミ以前ノ借金ヲ支払ヒマセウト云ツタトコロガ主人ガマダ計算ガ出来テ居マセンカラ明日ニシテ下サイト云ハレルノデスグソコラ出テ齋藤理髮店ニ立チ寄ツテ土産物ヲ差上ゲタ。ソシテ髭を■タツテ貰ウト思フタガ先客ガアツタノデ一休ミシテト思ツテ隣室ノ茶ノ間ニ上ツタ（コノ室ハ電車線路ニ添フテイル室デ六畳敷）十二時前ノ事故料理店ヘ料理ヲ注文サシタ。全家ノ細君ハ三歳位ノ子供ヲ負ヒ襷ガケデ台所デ釜ヲ洗ヒツツ先生御久シ振リデス一杯メシ上ツテハ如何デ御座イマス。・・・今日ハコレカラ元町ヤ山下町ノ方ヘ支払ヒヤ土産配リニ行カナケレバナラス歸ツタラ女房ガ御馳走ヲシテ待ツテ居ルト云ツタカラ酔ハラツテ歸ツタラ叱カラレルカラナ。・・・アラ先生御出ダテカラサウ惚ケチャ肩ガ張ツテ困リマス。等ト冗談云ツテ居ル内ニ甘サウナ料理ガ運バレタ、今日ハベラボーニ暑イ日デスナー。・・・先生脱イデシマイナサイ・・・サウダ脱ガウト上服ヲ脱ギ眼鏡ヲハヅシテ一口茶ヲ飲モウトシタ。（コノ上服ノポケツトニハ金参百五拾六円余リ入ツテ居ル墓口ガアツタノデアル）

スルト遠雷ノヤウナ響キガシタト思ウト間ナシニ烈シク上下震動ガ起ツタ。柵ノモノガカラくト落ち電灯ガパチンくト天井ニブチ当ツテ居タ。細君ハ子供ヲ負タ俣裏口カラ先生大地震デスト云ツテ飛出シタ。ヨシト立チ上ツテ鴨居ト柱ヲ手デ支ヘテ居タガ中々振

動ガ止マナイ。膳ハ引クリ返ル柵ハ落ちル壁土ハ雨ノヤウニ降りダシタ目ヲ開ケテ居ラレナイ、シカシコノ手ヲ放セバ二階ガ落ちカカツテ煎餅ニナルノダト云フ様ナ氣ガシテ益々手ヲハナス氣ニハナレナカツタガ、又コレヲ放スト同時ニ飛出セバヨカラウト思フテ思ヒ切ツテ裏口見ガケテ飛ビ出シタ。其ト同時間髪ヲ入レズ家ハ西北ニ向ツテ倒壊シタ。（自分ノ飛ビ出シタノト反對ノ方向ダ）

自分ハコロくトコロンダガ起キ上ツテヒョロくシナガラ電車道ノ中央ニ避難シタ。土地ハ猶グラく振動シテイル。電柱ガ倒レル、電線ガ切レテ海蛸ノ脚ノ様ニナツテヂヤンく鳴ル付近ノ家ハ大部分鉢合セテヤツテ潰レテシマツタ。壁土ガ蒙タト立チ昇ツテ太陽ハ赤銅色ニ変シタ暮ノ様ナ暗サニナツタ、地面ガボンくト音ヲ立テテ電光狀ニ裂ケル。山手ノ一角ニ建ツテイタ桜山ホテルガ凄イ音ヲタテテ山麓ヘ真逆様ニ落ち込シタ赤褐色ノ砂塵ガ高く上ツタ。スルト間モナク筆ノ穂先キノヤウナ長イ火焰ガ二三度立チ昇ツタト思フト黒烟ガ物凄ク立ツタ。近所隣ノ破レタ家カラ多クノ男女ガ悲鳴ヲアゲテ飛ビ出シテ来タ。殊ニ氣ノ毒ニアツタノハ近所ノ湯屋デアル。ソコニ這入ツテイタ男モ女モ皆頭部手足ニ傷ヲ受ケ裸体ノ俣這出テ来ル生死ノ境ニ立テバ恥モ外聞モナクナルモノト見ヘル。カクスル中ニ幾十人トナク此所彼所ヨリ電車道ニ避難シテ来タノデアルガ一人トシテ負傷シテイナイ者ハナイト云ツテヨイ位デ水道ガ破裂シタ上ニ砂塵ヲ浴シテドロコンコニナリ其上ニ血ガ流レテキルノダカラ見ルカラニゾツトスル。

其時ニ自分ノ居ツタ理髮店ノ倒レタ中カラ助ケヲ叫ブ悲鳴ガ連続的ニ聞ヘテ来ルシ先キニ飛出シタ全屋ノ細君ガ子供ヲ負フタママ死

ニモノ狂ヒデ誰人カ此家ノ中二人ガ居リマス助ケテ下サイ、ト云ツテイルガ誰一人助ケル人モナイ。ソコデ自分ハ大声デ云ツタ諸君誰人カ私ニ助力シテ下サルマイカト云ツテ見タガ誰人モ一生懸命ノモノバカリデ行ツテケレルモノハナカツタ。仕方ナイ自分一人デモ力ノ及ブ限リヤラナクテハナラヌト思ツタカラ、今助ケテヤルカラ待ツテ居レ、ト怒鳴リツツ倒壊シテイル家根へ這上ツタ。シカシ家ノ中へ這入ラウトスルケレドモ這入ル穴ガナイ。中カラハ頻リニ助ケヲ呼ンデイル。終ニ自分ハアラン限リノ力ヲ出シテ破風ヲ引キ破ラウトシタ。平常デアツタラ中々吾々ノ力位デハ破レルモノデナイ米半俵モ荷ヒ得ナイ力デアルガ此様ナ時ニハ思ツタヨリモ力ノ出ルモノデ忽チノ中ニ破レタ。少シ力ヲ中ヲ覗イテ見ルト真暗デ誰人ガ何処ニ居ルヤラサツバリ判明シナイガ声ヲ頼リニ潰レタ床ヤ棟木ノ間ヲ潜ツテ漸ク側へ近ヅイテ見ルト一ツノ棟木デ相並ンデ手ヤ足ヲ挫カレテイルノガ三人ト单独ニ他ノ棟木ニ圧セラレテ居ルノガ一人ト無事デ間隙ニ居ツテ南無妙法蓮華經、ト連唱シテ居ルモノト五人デアツタ。猶二階ニハ数人居ルラシク、隣室（自分ガ昼食ヲセントシタ室）ニハ何ノ声モナカツタカラ多分娘ハ圧死シテ居ルノデアラウ。手早く其菅人ニ手伝ハセ三人ノ分カラ助ケルコトニシ大キナ棟木ヲ動カサウトシタガ中々動カナイ棟木ノ上ニハ更ニ屋根ガ押ヘテ居ルノデアルカラ一人ヤ二人ノ力デハ如何トモスルコトガ出来ヌ。ソレデモ放任シテ置クワケニハ行カヌ満身ノ力ヲ込メテ二人デ一生懸命ニ引ツパツタ。スルト一寸間隙ガ出来タノデ漸ク一人ヲ引キ出シ相次デ他ノ二人ヲ出シタ。残ツテイルノハ他ノ棟木ニ挟マレテ居ル一人ダケダ。

シカシ棟木ガ前者ニ比シテ頗ル大キイノデ動ケバユリコノ時屋根ノ上カラ誰人カガ八木先生火ガ近ヅキマシタ早ク、ト云フノデ、フト破風ノ処ヲ振り向ヒテ見ルト火花ガ烟ト共ニ飛ビ込ンデクル。コレハ大変ダト思ツタカラ。其男ニ向ツテ氣ノ毒デアルガコレ迄ダ君ヲ助ケ度イノハ山々ダガ如何トモスルコトガ出来ヌト涙ナガラニ云ヒ聞カセテ破風ノ所へ出ルト火ハ隣家迄迫ツテ頭髮ガザリ、ト云フ位ニナツテイタ。圧セラレテイル男ガ悲壯ナ声デ八木先生、ト云フ声ガ聞ヘタ。火ハ此時三方カラ次第、ト押シヨセテ来タ。一ツハ元街小学校へ登リ口ノ洗濯屋ノ方カラ一ツハ西ノ橋方面ソレト並ンデ全元町五丁目テンブラ屋カラ。一ツハ石川町鶴屋付近カラ。コレデハ一時モ早く逃レナケレバ大変ダト思ツテ皆ノモノト山ニ駆ケ上ラウトシタガ岩ハ崩レ木ノ根ハ抜ケ脚ハ脛迄這入ルシ加フルニ中腹アタリニ烟ガ見ヘルノデコレデハ到底登タトコロデ死ナネバナラヌ。此上ハ一縷ノ望ミハ前方ノトンネルヲ抜ケルヨリ他ハナイト考ヘタガコレモ入口ハ已ニ潰レテイル火ハ次第、ト軒カラ軒ヲ伝ハリバリ、ト音ヲ立テテ迫ツテ来ル。身体谷マツタモノダカラ皆ニ向ヒ、「ツイテコイ」ト叫ンデトンネルノ入口迄行ツテ見タラ入口ハ殆ド崩レ落チ僅二人ガ這入り得ラレルダケノ穴ガ開イテイタノデ幸ヒコノ中へ繰リ込デ進ンダ。今カラ考ヘテ見ルト冒險ナ話デアルガ其時ハ其迄ニハ思ハナカツタ平日電車デ通過スルトキ一瞬時テ通り抜ケラレルトンネルガ中々長カツタ事、ト約三丁余アルトノ事ダ度々線路ノ鉄棒ニ足ヲ引ツカケテ転ンダガ幸ニ無事デアツタ。

コノトンネルヲ抜ケルト今度ハ山手公園へ皆ノモノヲ避難サシテ

置キ自分ハ學校へ行テ見ヤウト考ヘテ校門へ這入ラウトスルト向ツテ左手ノ外人屋敷ノ前ニ西洋婦人ガ始シンド氣ガ狂ツタ様ナ風デヂダシタ踏ンデイルノデ何カ大変ナ事ガ起ツテ居ルノダラウト思ツテ走ツテ行クト。日本ノ旦那様ワタシ、コードモ、ハツ、六ツ四ツガアノイエニ、シニマス、タスケテクダサイ。ト髪振り乱シテ泣キ叫ンデイルノデ。ヨシ助ケテヤル待ツテ居レト云フト、手ヲ合セテ地面ヘ顔ヲスリツケテ拜ムダ。ヨシト引受ケタモノノ前方ノ家ヲ見ルト三分ノ一程向フノ端カラ烟ガ拳ツテイル硝子窓ヘ三人ノ子供ガ出テ泣キ叫ンデイルノガ見ヘル。飛ビツイテ板ヲ破ツテ出シテヤラウト思フタガ土台ノ石ガ離レテイルノデ飛ビツクニハ相当ノ距離ガアツテ幾度カ思ヒ直シテ飛ビカラウトシタガ到^{トウドク}駄目デアツタ仕方ナシニ引返シテクルト其外国婦人ノ主人ト思ハルル方ガ歸ツテ来テ余ト入替リニソレニ飛付カウトシタガ終ニ及バズ涙ナガラニ空シク火ヲ眺メテ忙然トシテイタ。

泣キ叫ブ子供ノ声ハ何時シカ消ヘテ今迄子供ノ居タ窓カラ火ヲ吹キ始メタ婦人ハ全ク狂氣シテ火ノ中ヘ飛ビ込ンデ死ナントシカケタカラ急ニ婦人ニ飛ビ付イテコマタヲ入レテ引キ転ガシ押ヘツケテ主人ヲ呼び共ニ引キヅルヤウニシテ学校前ノ旧教女會堂裏ノ広場ヘ避難サセタ。コノ時教會ノ宣教師ノ細君ト思ハルル五十恰好ノ西洋婦人ガ出テ来テニコク^{ニコク}笑ヒナガラ『貴嬢^{アノ嬢}クデアリマセン。妾^{ワレ}ノ旦那サンモコノ家ノ下ニ押サレテ居リマス。貴嬢ノ子供サン神様ノ御許^{ミセ}ニ招カレタノデス。美クシイ平和ナ世ヘ行カレタノデス。喜ビノ門出デアリマスと云ツタ。』其時婦人ハ静ニ座ツテ其説教ヲ聞イテ居タ。此時自分ハ非常ニ服ガ立ツタ、『コノ老婆何ヲ云ヤガルン

ダ神様モ神様ダ、可愛イイ大事ナ子供ヲ御許ヘ招クトシテモ招キヤウノアツタモノダ潰シタリ焼イタリシテ招カナイデモモツト優シク招イタリヨササウナモノダト思フト一ツ擲^ナッテヤリタカツタ、シカシ此様ナ際ニ爭論シタトテ仕方ガナイカラ狂ツテイル西洋婦人ヲ托シテ置イテ遙ニ東方ニ向ヒ、天皇皇后兩陛下、攝政宮殿下及各皇族ノ御方々ノ無事安泰ヲ祈リ奉リ、次ニ西ニ向ツテ旧藩主並ニ恩師先輩親友家族ノ無事安泰ヲ故国ノ神々ニ祈ツタ。

ソレカラ學校へ行ツテ見ルト運動場ハ避難民デーパイニナツテ居リ主席ノ矢口繁三氏ハ頭部及脚部ニ重傷ヲ負ヒ血ニ染マツテ仆レ校長ヤ職員ガ入り替リ立チ替リ右往左往シテ看護シテイル戸板ヲ持テクル崩帶ヲスル鼎ノ涌ク様ナ騒ギデアル。山下町元町方面カラ黒烟ガ渦巻キ上リ大砲小銃ノ様ナ響キガ絶ヘズ聞ヘテ来ル。マダ御真影ヲ出シテナイ。校長御真影ハト聞クトマダ火災ヲ起ス事ハアルマイト思フテ出シテナイト云フ。ソレデハ^{イカ}不可ナイ早く出シマセウト云フトサウダ出サウト云ハレタ。其時関戸訓導ハ手頃ノ棒ヲ持ち来リ窓ヨリ這入ツタソシテ奉安所ヲ破ツテ無事ニ引キ出シタノデソレヲ校長ト余デ受取ツテ風呂敷ニ包ミ使丁ニ負ハセ山手公園ヘ避難サセタ。學校へ火ガ迫ツテ来タノデ避難民ハワレ先キニト山手公園ヘ向ツタ同時ニ矢口繁三氏ニハ応急ノ手当ヲシテ戸板ニ載セ山手公園ヘ避難シタ。自分ハ外人カラミルクトサイダトヲ貰ツテ来タモノダカラ矢口氏ニ飲マセテ置キ、付近ノ先生達ニ後事ヲ托シテ置イテ校長ニ向ヒ學校ニ対スル私ノ任務ハ大体尽シタツモリデスコレカラ一時モ早ク家庭ヘ歸リタイ其ト同時ニ矢口氏ノ宅ヘ事情ヲ知ラセテ置カウト云フト。校長ガソレデハ一所ニ出ヤウト西田君ト三人デ出発ス

ルコトニシタ先ヅ行ク道ヲ考ヘナケレバナラヌ火ニ取りマカラレタ
ラ大變ダカラ。

サウ思ツテ市街ノ外ヲ迂廻シテ三人連立ツテ出発シタ。途中山内
校長ヲ見失ツテシマツタノデ西田君ト二人デ帰リカケタラ途中デ稲
木（使丁）ニ逢ツタモノダカラ連レテ三人デー生懸命ニ山ノ手ヲ通
リ抜ケテ根岸ノ山ニ出タ。横須賀ノ方面ヲ見ルト黒煙ガ天ニ冲シ斜
ニ海ノ方ヘ吹キツケテイタ直下ニ刑務所ガ見ヘル半バ破壊サレテイ
ルガマダ焼ケテハ居ラナイ赤服ヲ着ケタ囚人ガ四十五人位宛一団ニ
並ベラレテ看守ヤ巡查ガ短銃ヤサーベルデ取り囲ミ逃ゲタラ撃ツゾ
ト構ヘテ訓示シテイル右ノ方カラ山下カラ盛ンニ猛烈ナ黒煙ガ立チ昇
ツテ来ル実ニ物凄イ光景デアツタ。此処ヲ下リテ西田君ノ宅ヘ立寄
ツタ全氏ノ宅ハ天神橋ノ側デアル家ハ傾キ御家族ハ裏庭ヘ無事避難
シテ居ツタガ夫婦ノ者ガ相擁シテ無事ヲ喜ビ合ツテイル様ヲ見テ涙
ガ出タ。程遠カラヌ矢口氏ノ宅ヘハ使丁稲木ニ急報サセテ置キ自分
ハ天神橋ヲ渡ツテ日本橋ノ方面ヘ向ツタガ行手ハ皆火タ、南吉田町
方面カラ日本橋吉岡町初音町方面ヘカケテ一面火ノ海デ川向フハ物
凄イ音ヲ立テテ焼ケテイル止ムナク引カヘシテ弘明寺方面ニ向ヒ倒
壊セル家屋ヲ踏ミ越ヘ――― 蒔田ノ宮前ニ出デ野原ヲ横ギツテ横
浜商業学校ノ校庭ヘ出タ無論此学校モ倒壊シテ居タ。ソコヲ横ギラ
ウトスルト安齊君ガ出テ来テ八木君無事デ居タカ御健康ニ御避難ナ
サル様ニト道ヲ教ヘテクレタ。

破レタ校舍ノ屋根ヲ踏越ヘ山ニ上ツタナル可ク火ノナイ所火ノナ
イ所トアチラコチラ逃ゲ廻ツテ又人家ノ倒壊シテ居ルトコロヘ出タ
其家ノ下ニハ下敷ニナツテ悲鳴ヲ挙ゲテイルノガ聞ヘルガ火ノ手ガ

早イノテ大勢ノ人ガ破レ家ノ上ヲ踏テ逃ゲル婦人カ赤坊ヲ抱イテ泣
キナガラ救ヲ求メテ居ルケレドモ誰一人救ヒニ行クモノハイナイ。

可愛想デアリ氣ノ毒デタマラナイガ自分自身ノ身体ヘモ已ニ火ガ迫
ツテ居ルノダカラ何トモ仕方ガナカツタノデアル漸ク久保山停留所
ヘ出タ此処カラ扇田停留所マデ電車道ヲ通ツテ行カウトシタガ藤棚
停留所ノ先キガ已ニ猛火ニ包マレテイルノデ藤棚停留所迄引返シテ
左折シ程ケ谷駅ノ方ニ向ツタ右手ニ見ヘル人家工場等盛ニ火ヲ発シ
テイル山ヘくト接近シツツ程ケ谷ニ着キ東海道筋ヲ東シテ東輕井
沢ニ出タ沿道ノ家屋皆倒レ道ヲ塞イデイタ。先ヅ山内校長ノ宅ヲ訪
フタ皆御無事但シ家ハ半壊デアル校長ノ無事ヲ伝ヘ避難ノ際ノ注意
ナドシテ置キ弟久吉ノ宅ヲ訪フタ。家ハ破損シテイルガ大ナル被害
ハナイラシイ。梅代（久吉妻）ニ聞イテ見ルト久吉ハマダ帰ラナイ
皆ガ心配シテ居ル先キ程お母様ガ来ラレテ云ハレルニハ兄サン（余
ヲ指ス）ノ御宅ハ倒レテ居ルガ家族ハ皆無事微傷モ受ケテ居ナイ裏
ノ花畑ヘ避難シテ居ルトノ事デシタ私モ到底アノ家ヘハ這入レズア
ノ様ニ石油タンクガ（ココヨリ三丁東ニタンクアリ）破烈シテ火ガ
盛ニ天ヲコガシテ居ル様ナ有様ダカラ避難ノ準備ヲシテ居ルノデ綾
子ヲコノ草原ニ置イテ居ルノデス。早ク御歸リニナツテ安心サセテ
オ上ゲナサイ。

シメタト思フト同時ニ身体ガグツシヤリシタガマダく安心ハ出
来ヌト思ツテ急イデココヲ出発シタ。帰途河合清氏、能島氏、田代
氏等表ヨリ安否ヲ聞キツツ実科女学校ト高嶋山ノ間ヲ通過シテ帰宅
シタ正ニ六時過ぎデアツタ。家族ノモノハ皆余ノ歸リノ遅キヲ氣遣
ヒ子供等ハ「オトウサマガ歸ラナイ、―――」ト泣キ叫ブ妻ハ老

母ニ子供ヲ托シ置キ余ノ婦リヲ待ツテイタガ余リ遅キ為メ心ナ
ラス高島山ニ登ツテ遙ニ焼ケツ、アル全市ノ惨状ヲ眺メ狂氣ノ様ニ
ナツテ山カラ降りテ来タ所デアツタノデ皆ガ手ヲ取り合ツテ無事デ
アツタ事ヲ喜ビ合ツタ。其喜ブ声ガ高マレバ高マル程近所隣リデハ
「隣リノ旦那サンハ婦ラレタノニ宅ノハマダ婦ラナイワアー」
ト老人ヤラ女ヤラガ泣ケ声ガ烈シクナツテ来ル可愛想デナラナカツタ。

自分ノ宅ノ震災當時ノ模様ヲ聞クト老母ト初代ガ代ル、震ヘッ
ツ左ノ様ニ語ツタ。其朝余ノ親友渡部芳一君方ヘ初代ガ松山ノ土産
ヲ持ツテ行キ雑談ヲシテ十一時過ギニ帰宅シタ子供等モ皆学校カラ
帰ヘツテ居ツタモノダカラ裏庭ニ面シテイル台所デ昼飯ヲ食ベカケ
タトコロガ清美ガ副食物ガ氣ニ入ラナイコノ味噌ハ堅イ石ガ混ジッ
トルトダダヲコネテイタ他ノ子供ヤ老人ヤ初代ハ一口御飯ヲ食ベル
ト遠雷ノ様ナ地響キト共ニガタ／＼ト強震ガ襲ツテ来タスワ地
震ト云フ間ナク仏壇ガ飛ブ箆笥ガ倒レル電球ガパチン／＼ト天井
ニブツカルヤア大変ダト立チ上ルト柱ガメリ／＼ト曲ツテ来タノデ
老母ガ周章テ、柱ガ／＼ト云フタノデ急ニ裏庭ノ花畑ノ中ヘ初代ガ
清美ヲ連レテ飛ビ降り次ニ朝子ガ一人デソレニツゞキ最後ニ老人ガ
富美子ヲ抱ヘテ逃レタソシテ花畑ノ一番端ノ樫木ノ根本ニ集ツテイ
タ。其時自家ノ裏通りヲ隔テタ上ノ家ノ石垣ガ皆崩レタニ階ノ瓦ハ
大部分震ヒ落サレ壁ハ倒レ額縁ハ落チテ僅力数分間ニ近所ノ家モ大
部分倒壊シタノデアツタ。

余ガ帰宅シタ時ハ二階ダケハチイント立ツテイタガ瓦ノ大部分ハ
振り落サレテ鈴虫籠ノ様ニナツテ居リ下ハ著シク傾斜シ殆ンド出入
ノ出来ヌ位ノ危険サデ若シ室内ニ居ツタラ壁ヤ箆笥デ全部圧死シタ

デアツタト想像サレタ。隣家ノ棟近氏モ家族ヲ引連レテココヘ避難
シテ来ラレタ飯ヲ食ベタ。コノ夕飯ト云フノハ屋飯ノ残りデ泥ヤ塵
ガ一パイ混入シテ居ル其ヨリ別ケ／＼僅力一ゼン程宛食ツタノデ
アル。日ハヅツプリ暮レタ灯火ナク、水ナク、地震ハ間断ナク起ツ
テ来ル。倒底家ニ這入ルコトハ出来ヌカラ今夜ハココニ夜露ニウタ
レツツ一夜ヲ明スツモリデコノ花畑ヘ戸板ヲ運ビ来リ蒲団ヲ敷キ大
空ヲ眺メツツ寝ル事ニシタガ中々寝ムラレルモノデハナイ。午後九
時頃前ノ高嶋山ニ登ツテ見ルト山手方面カラ野毛山東神奈川ニ至ル
一帯ハ全ク火ノ海トナツテイル最モ猛烈ナ火ハライチンダサン及ビ
スタンダード石油会社カラ立チ上ル黒煙デ渦巻キ上ル煙ハ天ニ沖シ
頂上ト覚シキ所ガ時々ボツ／＼ト音ヲ立テテ強ク燃エ其下端ハ溶鉱
爐デ赤熱セラレタ銅ノヤウニドロ／＼ト河ニ流れ入り兩岸ノ家モ
船モ焼キ払ツテドン／＼流れテ行ク。コノ火ニ追ハレテ船ハ次第
第二沖遠ク逃ゲテ行ク。倉庫ノ中ノ缶詰ハ小銃彈ノヤウナ響ヲ立テ
テ破裂スル。亜鉛ノ屋根板ハ吹キ上ゲラレ火ノ粉トナツテバラ／＼
降ツテ来ル。人ノ泣キ叫ブ声ガ風ニツレテ聞ヘル。何タル悲惨ナコ
トデアラウ修羅ノ巷トカ焦熱地獄ダノ云フ位ノ形容詞デハ云ヒ表ハ
セナイ惨状デアアル。コノ山上ニハ無数ノ避難者ガ集ツテイル中ニハ
我家ノ焼ケルノ見老人ヤ子供ガ生キナガラ火葬ニサレテイルコトヲ
思ヒ浮ベテ失神セルモノ。我子ノ安否ヲ氣遣ヒ半狂乱ニナツテイル
モノ。手ヤ足ヤ顔ニ火傷ヲシタリ血ニマミレテ仆レテ居ルノ戸板
ニ乗セテ運ンデ来テ家族ヲ介抱シテイルモノ。本覺寺裏ノ墓場ヨリ
卒塔婆ヲ持ち来リ火ヲタキ茄子・瓜王・蜀黍等焼イテ飢ヲ凌グモノ
等戦場ノヤウナ騒ギデアツタ。

自分ハ此光景ヲ眺メタ時ニ全地球ガ全滅スルノダナト思ツタ。ソレト同時ニ再ビ兩陛下 摂政宮殿下、各皇族御方々ノ御無事御安泰ト先輩親友家族等ノ無事安寧ヲ心カラ神々ニ祈願シタ。約一時間ココニ居タガ山ヲ下ツタ老人や妻や子供ハ真暗ナ湿ツボイ裏庭デ震ヘナガラ待ツテイタ。幾度トナク強震ガ襲ツテ来テ倒レ残ツタ家ノ瓦ヲ落スノデヒヤ／＼サ、レル。山向フト下町ノ両方面ノ空ハ焼ケテ昼ノ様ニ明ルイライヂングサン石油倉庫ノ烟ガ山ヲ越ヘテ頭上ヲカスメテ飛ブ小銃彈ノヤウナ響キト大砲ノ様ナ音ト焼ケ落ツル音が間断ナク聞ヘル家族ハ横ニナツテハ居ルガトテモ寝ツカレヌラシイ。家族ノ者ニ心配サスノモ無益ナコトダカラ殊更ニ語ヲ強クシテ平氣ヲ装ヒ「全市ハ殆ンド焼ケテシマツタ最早ヤ焼ケルモノハナイ火ノツク心配ハナイ皆安心シテ寝ナサイオレモ疲勞シタカラコレカラ一盃傾ケテ寝ルツモリヂヤ。」妻ガ「酒ハナイジヤアリマセンカ。今夜ハオ止メナサイ。」「イヤ昨夜ノ飲ミ残リガ二階ニアルアノ異人ガ土産ニクレタ、ウイスキーガアル」「アツテモ危険デスカラ今晚ハ御止メナサイ何ヲコレダケ倒壊シタラ此上倒レル氣遣ヒハナイヨ。」「オ止メナサイヨソラ又地震デス動イテイルデハアリマセンカ」：「余震タ心配スルナト止メルノモキカズ二階ヘ這上ツテウイスキー二瓶ト梨數個、二名煮一缶トヲ携ヘテ下リツテ来タソシテ梨や二名煮ナドヲ老人や子供や妻ニ与ヘ自分ハウイスキーヲ大コップデグイ／＼飲ムダ。平生ナラ盃ニ一杯デヘト／＼ニ酔フノダガ其時ニハ少シモ酔ハナカツタ。終ニ一本飲ンデシマツタ。

子供等ハ無邪氣ナモノデ昼ノ疲勞デ早ヤ寝テシマツタラシイ。老人や自分等夫婦ハ寝ツカレナイ。カレコレスル中ニ夜ノ十時頃ト思

ハレルガ一大爆音ト共ニ前ノ高島山ヨリ十数丈モ高ク火焰ガ立昇ツタ。バリ／＼／＼ト云フ音が烈シクナツタ。ハツト思ツテ初代ニ向ヒオイ大變タゾ高嶋山ヘ火ガツイタゾコレデハ此アタリハ一タマリモナイ此蒲田ダケヲ持ツテアノ野原ヘ避難セウサア子供ヲ起セ、近所隣デモ皆周章テテ持チ出シタ荷物ヲ負フテ広野原ヘ出タソウシテ一夜ヲココニ明ス可ク又板ヲ敷イテ草叢ノ中ヘ横ニナツタ近所隣リノ人モ皆ココノ場所ヘ陣ドツタ。夜露ハシト／＼ト置イテイル遙力東方低ク下弦ノ月ガ物凄ク懸ツテ烟ノ間カラ星ノ光ガキラ／＼ト見ヘル。無心ノ蟋蟀ガ枕モトデ頻リニ鳴ク。此時ニ思ヒ出シタ且ツテ清水喜重様（現參謀本部付陸軍大佐）ガ日露ノ役ノ際南山ノ麓ニ陣シテ居ラレタ時ノ景浦直孝先生ノ許ヘヨコサレタ御手紙ニ「湿メ／＼シタ草原ニ野営シ枕許ニ董ヤタンポコノ花ガ咲イテ居テ日本内地ト同ジ様ナ氣ガスル」ト云フ様ナ意味ノ書イテアツタノヲ思ヒ出シ全ク戦争ノ際ノ野営ト云フノハコンナ物ダラウト思ツタ遙ニ東京方面ヲ見渡スト各所ニ大火災ヲ起シテイルラシイ。カカル不安ノ中ニ何時シカ東ガホノボト白ンデ来タ。（初震カラ二日ノ朝ノ六時迄ニ二大地震ガ 式百七十五回アツタ）

三、九月二日

大空ハ黄灰色ニ霞ンデ頭上ヲ絶ヘズライジンクサン石油タンクノ煙ガ渦巻イテ飛ブ、太陽ハ銅色ヲ帯ビテ煙ノ中ヲ縫フテイル。何トナク災禍ノ前兆ヲ示スモノノ如クデ一層不安ヲ増サシメタ。火災ハマダ全市ヲ包ンデ居ル。コノ日午後吾々ガ陣取ツテイル草原ヘ巡查ガ駆ツテ来テ皆サン一寸御注意ヲ申マス。今夜此方面ヘ不逞鮮人ガ

三百名襲来スルコトニナツテ居ルサウデアアル又根岸刑務所ノ囚人一千余名ヲ開傲シタコレ等ガ社会主義者ト結托シテ放火強奪強姦并水ニ投毒等ヲスル。昨夜ハ本牧方面ヲ襲撃シタ。右ノ様ナ始末デアリマスカラ今夜ハナル可ク皆様ガバラ／＼ニナラヌ様ニ一所ニ集ツテ居テ下サイ。サウシテ万一怪シイ者ガ来タラ一同デ喚声ヲ挙ゲテ下サイ。猶十六歳以上六十歳以下ノ男子ハ武裝シテ警戒ヲシテ下サイ。コレヲ聞イタ婦女子ハ皆震ヘ上ツテ、各自重キ家具ヤ貴重品ヲ負フテ狼狽シ始メタ。子供等ハ恐レテ泣キ出ス目モ当テラレヌ有様デアツタ。自分ハ家族ニ向ヒ決シテ心配スルニハ及バン若シ不逞ノ鮮人攻メ来ルコトガアツテモ此処ニハ数十人ノ青年ガ居ルシ此下ニハ又何十人ト居ルノダカラ片ツ端カラ切り仆スカラ心配スルナ。

死セバ諸共此様ナ際ニ周章スルト却ツテ命ヲトス静ニシテ居ナサイト云ツテイルト午後四時過ギ向フノ山上デ喚声ガ起ツタ一同ガ振り向ヒテ見ルト白服ヲ着タ者ガ幾十人カ抜刀シテ沢山ナ人ヲ追カケテイル其ヲ見タ者ハ異口同音ニ不逞鮮人襲来タ白服ノハ日本ノ青年団ダト騒グ。人々戦々恐々急ニ避難場所ヲ変ヘルモノ重キ荷物ヲ草叢ヘカクスモノモアル。疲労ト不安ノ中ニ其日ハ暮レカカツタ。各町ノ青年団衛生組合ノ人々ガ腕ニ赤布ヲ巻キ向フ鉢巻腰ニ伝家ノ宝刀ヲ佩ビ或ハ竹鎗ビストル獵銃其他鉄ノ棒ナド持ツテ避難地ノ草原ヘ集合シタ。恐ロシイ夜ノ戸張りハ全ク閉サレタ。余爐ハ空ヲ赤ク染メテイル海上遥ニ低ク下弦ノ月ガ懸ツテイル。夜ノ十時過頃カラ各方面デ銃声ト喚声ガ聞ヘ始メタ提灯ノ火ガ幾ツトナク野原ヲ飛ンデイル。折々武裝シタ青年ノ伝令ガ駈ツテ来テ「御注意ヲ願ヒマス只今怪シイモノガ数十名此方面ヘ這入ツタ形迹ガアリマス等ト入

替リ立チ替リ報告シテ来ル。此夜鮮人十七八名反町遊都ノ裏デ慘殺サレタ。カカル不安ノ中ニ妻子ハマンジリトモセズ夜ヲ明シタ。(二日朝六時ヨリ翌三日午前六時迄大小地震ガ参百参拾四回アツタ)

四、雲上ノ御消息

一日ノ朝宮中ヘ御出マシ！摂政宮殿下ハ大震ガ起ルトスグ吹上御苑ニ御避難遊バサレ其夜無事ニ赤坂離宮ヘ御還幸遊バサレマシタガ殿下ニハ日光田母沢御用邸ニ御幸啓中ノ 兩陛下ノ御身辺ヲ御氣遣ヒ遊バサレ、皆特ニ栃木県知事ヲ御召ニナリ玄米食ニテ御陪食仰付ノ上御模様ヲ詳細ニ御下問遊バサレタ。吾々国民ノ最モ痛恨ニ堪ヘマセンノハ此震火ガ十幾万ノ生靈ヲ奪ヒタルヲ以テ足レリトセズ、金枝玉葉ノ尊キ御三方ガ此ノ災ニ神去リ給ハレタ事デアリマス。即チ鎌倉御用邸ニ御滞留中ノ山階宮妃佐紀子女王殿下、小田原御用邸ニ在ラセラレマシタ閑院宮寛子女王殿下及ビ鶴沼ノ御別邸デ避難遊バサレタ東久邇宮師正殿下ノ三殿下トデ、真ニ恐懼ノ極ミデアリマス。華頂宮博忠王殿下ハ丁度田浦横須賀間進行中ノ汽車ニ御乗り遊バサレテ居ラレタノデアアルガトシネガ崩壊シテ列車ガ埋メラレタニモカカハラズ危ク難ヲ免カレラレタ事ハセメテモノ喜ビデアリマス。

五、三日

鮮人來襲ノ報一層喧シク放火強奪強姦、并水ニ投毒、鮮人ト格闘セルコト等ノ報頻リニ伝ヘラレタ此日海軍陸戦隊ガ五十鈴、春日等ニテ到着シ探照灯ノ光ガ暗胆タル空ヲ照シタ避難地ノ混雜ハ昨日ニ同ジク。重傷者ノ死亡、妊婦ノ出産等。目モアテラレヌミジメサデ

アツタ。余震ハ午前六時ヨリ翌四日午前六時迄二百五十三回ニ及ンダ。

六、四日及五日

四日戒厳令ガ布告サレ奥原将校ノ率ユル三個聯隊及ビ群馬県ヨリ警官二百名方来浜シタ。遁ゲ残ツタ人々ハ焼垂鉛板ヤ本片、竹竿等ニテ仮小屋ヲ造ルニ忙シイ。市内數ヶ所ノ貯炭所（二カ月余燃ヘタ）ヤ石油倉庫（十三日間燃レタ）ナドノ火災ヲ除ク外余尽モホボ消ヘ全市ハ滿目荒涼ノ焦土トナツテ市ノ中央ノ野毛山伊勢山御所山ナドノ台地南丘ナル山中村町ノ高地ハ全ク剥キ出サレテ全ク六十余年昔ノ裸ニ歸ツテシマツタ。自分ハ此朝始メテ家族ヲ引連レ潰レタ我家ノ裏庭ヘ引上ゲ物乾竿ト襖デ仮小屋ヲ建テタ。

サウシテ午前十一時頭カラ元町ヘ状況ヲ見ニ行クコトニシタ。神奈川駅前ヘ出テ見ルト焼ケ潰レタ煉瓦ヤ電線デ道ヲ塞イデ余尽ハ猶所々ニ燃ヘテイル手近ノライジングサントスタンダード石油会社トノタンクカラハ今猶物凄キ黒烟ガ天ニ冲シテ立チ上ツテイル余尽ノ熱氣ト吹キ捲クル黄砂ノ煙ヲ冒シツツ血ニ塗レタ体軀ヲ荷車ニ積ミ遠隔ノ地ヘ連行クモノ疲レハテタル身ガ泥足ヲ引摺リツツ郡部ナドヲ目差シテ覺東ナゲニ辿リ行クモノ老人ヤ子供ヲ脊負フテヒヨロ／＼ヨロメキナガラ雑踏ノ中ヲ分ケ行クモノ尋ネ人ト記セル札ヲ荷ツテ家族ヲ尋ネ歩クモノ食料ノ欠乏ト疲勞ノ為メ焼石ノ上ニ根氣モ尽キハテ妻子相擁シテ昏々ト眠レルナド到ルトコロニ散見セラル。月見橋ノトコロ迄来テ見ルト橋ハ陥落シテ僅ニ一人宛位力通行ガ出来ナイ。流れ込ンダコールドターガ海水ニ混ジテ異臭ヲ放ツ横浜駅前ヘ出ルト道ノ兩側ニ印緋天ヲ着タ朝鮮人ガ慘殺サレテイタ。石ト竹

鎗ト焼残ツタ鉄片デ殺シタモノラシイ。ココヲ出テ人馬絡繹タル桜木町駅ニ向ツタ。掃除部山頭ノ桜樹ハ焼ケ払ハレテ井伊大老ノ銅像ガ方向変換ヲヤツテ建ツテ居ル。横浜市役所ハ瓦斯橋ノ側ノ海外渡航講習所ノ焼残りヘ移転シテ自働車ヤ馬力ガ群集シテ雑踏ヲ極メテ居ル此所ヲ過ギテ桜木町駅前ニ行クト焼死シタ大キナ男ガ両手兩足ヲ上ゲテ転ンデイタ赤裸デ黄色ニ焼ケテテ所々ニ紫色ノ斑点ガアリ舌ヲ出シテ苦悶シタ状ガ伺ハレル。

大江橋カラ下ヲ見ルト何百トモ數ヘキレヌ男女ノ死体ガ引潮ニ連レテボカ／＼浮キツ沈ミツシテイタ夫レカラ正金銀行ヘ出テ見ルトコノ建物ノ柵ノ内ニ幾百カノ死体ガ重リ合ツテ焼ケ死ンデイルシ入口ノ段ニハ又幾十人トナク男女ノ死体ガ累々ト折重ナツテ虚空ヲ握ツテ悶死シテイル中ニハ一家族ト覺シキ一団モアレバ子供ヲ抱ヘテ居ルノモアル何レモ裸体デアル。コレハ着テ居タ被服ガ皆焼ケタモノデ頭髮ナドモ大部分ハ焼ケ落チテ坊主ニナツテイタ。コノ建物ノ中ニハマダ夥シイ死人ガ居ルノダトノ事デアツタスク隣リノ川崎銀行ノ横町及ビ表ニモ沢山ナ死体ガ転ンデイタ。今日ハ焼ケツクヤウナ暑イ日ダ付近一帶一滴ノ水モナク勿論文通機關モナイノデ皆非常ニ苦シンデイタココヲ出テ一直線ニ公園ヘ行ツタ周囲ノ樹木ハ大部分焼ケテ此処彼処ニ惨死者ガ仆レテイル一日ノ日水道ガ破裂シタ為園内ハ泥海ニナツテイルソノ中ニ死体ガドロコンニナツテ仆レテ居ル其上ヘ焼垂鉛板ガ被セテアル。

親ヲ尋ネ子ヲ呼ブ幾多ノ焼ケ残サレタ罹災民ガ若シヤ吾ガ夫ニ非ザルカ若シヤ吾子ニ非ズヤト一々ソノ垂鉛板ヲマクツテ見テ過ギ行ク破レタ着物ヲ着タ婦人ガ泥マビレニナツテ四ツ五ツノ子供ノ手ヲ

引イテ一々尋ネ廻ツテイタ。自分ハ別ニ尋ネル者ハナイノデアアルガ
其等ノ人ト一所ニ亜鉛板ヲマクツテ見タラ三十前後ノ婦人ガ目カラ
上焼ケタダレ手ヤ胸ニ黒味ヲ帯ビタ血ガツイテイルノガ三四歳位ノ
子供ヲ抱ヘテ横ニナツテイタ。死ンデイルノダラウト思ツテイルト
キュー／＼ト引ク呼吸ガ聞ヘルノデコレバ未ダ生キテ居ルノデア
ルコトガ判ツタ赤坊モ折々手ヲ運カシテイタ可救護部ノ手モ
マダトドカナイノカ早ヤ大震後四日モ経過シテイルノ二大正ノ聖代
ニ斯カルコトガアリ得ベキ事デナイノデアアルガ混雜ノ際ニハ止ムヲ
得ナイノデアアラウ水ナト飲マセテ遣ラウト水筒ノ蓋ニ注イデ口モト
ヘ持テイタガ声モ出ナイ飲ミモ得シナイタダ昏々ト眠ルバカリ子供
モ其通リダ三晝夜モコノ焼野原デ親族縁者ノ看護モ受ケズ夜露ニ漂
サレ炎熱ニ照サレテハ如何ニ健康ナモノデモ衰弱シテシマウ其ニ重
傷頻死ノ者デアアル故ニ生アルモノモ終ニ命ヲ棄テネバナラヌノデア
ル此様ナ人ハ幾人トナリ転ツテイタ。

尋ネ人ト記シタ札ヲ荷ツタ男ヤ女ガ焼野原ヲ泣キナガラ通ル。公
園ヲ出テ一直線ニ電車通りヲ元町ニ向ツタ西ノ橋ハ焼ケ落チテ通行
ガ出来ヌ故其ニ並ンデイル半壊半焼ノ電車橋ヲ這フヤウニシテ渡ル
此橋ノ下ニ一体ハ死者デ埋ツテイルコイルターノ勾ヒト惨死者ノ腐敗
シタ臭氣ガ鼻ヲツク。対岸ノ山下石炭貯蔵所ハ盛ニ燃ヘテイタ。自
分ノ遭難シタ付近ヘ行ツテ見ルト此所ニモ彼所ニモ二人三人多キハ
一家全滅シテイル家モ少ナクナイ生キ残ツタ家人ガ掘ツテイルサウ
シテ堀リ当テハ嘆イテイル此有様ヲ見タモノハ又新タナ涙ヲ禁ズ
ルコトガ出来ヌ。トンネルヲ通り抜ケテ学校ヘ行ツテ見ルト全ク一
物モナク焼ケテシマツテ運動場ニ避難民ノ一群ガ焼ケタ亜鉛板ヤ木

片デ乞食小屋ニモ劣ル唄ヒヲ作り僅ニ雨露ヲ防キ建札シテ何某避難
飯寓ト記セル現代時メキシ人ノ姓名モ散見セラレテ漫口ニ有為転変
ノ世ノ頼ミガタキヲ痛切ニ感ゼズニハ居ラレナカツタ。

此所カラ全市ヲ見下スト全ク山川草木荒廢タル焦土デタダ沖ニ浮
ンデイル軍艦ヤ商船ガ堂々トシテ居ルバカリデアアル。山手公園ヘ行
ツテ見ルト此所ニモ彼所ニモ焼ケテ亜鉛板デ屋根ヲフキ焼ケタ釜デ支
那米ヤ玄米ヲ煮テ着ノミ着ノ俣ノ人々ガ混雜シテイタ午後四時迄コ
コヲ出テ再ビモト来タ道ヲ引カヘシタ方飯小屋ニ歸ツタ。サウシテ
配給サレタ七八年前ノ石ノヤウナ支那米ノ飯ヲ家族一同デ食ベテ皆
ノ者ヲ寝サセ置キ自分ハ一刀ヲ腰ニシテ夜警ニ出テ終夜警戒ニツト
メタ（二日ノ夜カラ二十二日迄毎夜々警ヲシタ）

此日午前零時港内ニ居タロンドン丸ハ罹災民八百弐拾四名ヲ乗セ
テ大阪ニ向ヒ未明ニハ救助船山城丸ガ入港シタ（四日午前六時ヨ
リ五日午前六時迄ニ余震ハ壹百七拾四回ヲ算シタ）五日ノ夜ハ明ケ
タ今日モ非常ナ暑イ日ダ荒涼タル焦土カラ折々風ニツレテ異臭ガ襲ツ
テ来ル。食料ハ次第／＼ニ欠乏シテ来タ親友ヲ頼ツテ五合三合ト集
メテ来タ米モ残り少ナクナツタ。家内中ノ金ヲ集メテ売ツテ居サウ
ナトコロヘ買ヒニ出カケタガ何処ノ商店モ云ヒ合シタヤウニ品切、
売切ノ紙片ヲ貼ツテイル始ト一日東奔西走シタガ終ニ買求ムルコト
ガ出来ズ空シク歸ツタ。老婆ハ又心配シテ弟ノ宅ヘ行キ僅ニ二升程
ノ玄米ヲ貰ツテ歸ツテ居タ。カ、ル有様故曆日モ忘レ昨日ヲ顧ミル
余裕モナク明日ヲ慮ルノ氣力モ失セテタダ一刻一刻ノ衝動ニ由ツテ
或ハ右ニ或ハ左ニ「生キテ居サヘスレバ」ト云フダケノ單純ナ未開
人的觀念ニ支配サレタダ糧食ノ絶ヘヌ様ニトノミ祈ルノデアツタ。

此日各町青年団ハ千若町ノ倉庫カラ米ノ分配ヲ受ケ之ヲ搬出シテ区内ニ配給スルニ忙ハシク馬ヤ車ナド国道や県道ニハ絡繹トシテ続イタ。軍隊ハ市ノ要所ノ配置サレ、警官、青年団員等ハ徹宵警戒ニ力メタ。

七、救恤ノ至情

畏多ケレドモ大震災突発ト共ニ摂政宮殿下ニハ 聖上陛下ノ大御心ニモトツカセ給ヒ御内帑金壹千万円ヲ罹災民ニ賜リ、国母陛下ハ宮内省巡回救護班ヲ才遣ハシ遊バサレ又赤十字病院、青山学院、慶応大学病院、衛成病院、伝染病研究所大学病院等へ行幸親シク罹災民ヲ御慰問遊バサレ猶横浜地方迄モ被害ノ状況ヲ御視察ニナツタ。摂政宮殿下モ東京横浜ノ被害状況ヲ御覧ニナリ深く大御心ヲ悩マサレマシタ事ハ畏多イコトデアリマス。政府当局モ大御心ヲ体シテ秩序ノ恢復ト救護ノ徹底ニ力ヲ尽サレタ為災害地域ノ人心モ次第ニ安定ニ向ヒマシタ。又一方警官軍隊ノ活動自警団ノ働ナド真ニ目覚シイモノガアリマシタ暗夜徹宵警戒ノ歩哨加橋作業線路工事バラツタノ建築等献身のナ工兵隊ノ奮闘ナド感謝ノ言葉ガアリマセン此大震災ノ報ガ全国ニ伝ハルト吾同胞ノ驚愕ハ忽チ熾烈ナ同情トナツテ震災後第三日目位カラ各地ヨリ救護班ガ相次イデ入ンデ来テ日用必需品ノ供給傷病者ノ治療看護ヨリ避難帰国者ニ対スル案内郵便物ノ代書伝送マデ懇切ニ世話ヲシタ。

殊ニ目立ツタノハ第三日目ノ伊豆ヲ筆頭ニ兵庫大阪愛知岐阜福島岩手高知福井広島沖繩富山山形北海道等ト十日前後ニハ殆ド全国ノ主ナル各府県ガ到着シテ各自郷土出身者救済ニ又一方同胞ノ救済ニ

力ヲ尽シタ又一方着ノミ着ノ俣ニテ住ミナレタ横浜ヲ後ニ避難スル者ニハ各重ナル駅々ニテ衣類ヤ手拭ヤ茶牛乳コーヒ、パン又子持チニハ襦袢^{おむつ}等与ヘ何クレトナク勞ツテ呉レタ。国外ニテハ支那政府、上海外人団、関東州香港、米國、ハワイ日本人団濠州政府ヲ始メトシ其他ノ各國モ盛シニ救済準備ヲ調ヘ日ニ二横濱及東京ヲ目差シテ集リ来リ窮地ニ陥ツテイタ吾々ヲ慰問シテクレタノデアツタ。コノ状況ヲ耳ニスル市民ハ其至情ニ励マサレ疲勞ト困憊トノ間ニモ力ヲ得テ腕ヲサスツテ起タズニハ居ラレナイと思ツタ。

八、在浜愛媛県人ノ窮状

前述ノ如ク大震災ト共ニ各府県ノ大部分ハ同胞愛ト共ニ一方ニ同郷出身者ノ救済ニ心ヲクダキ其活動振リハ実ニ目ザマシイモノガアツタ然ルニ吾愛媛県ハ同胞愛ノ一点張りデアル為メニ一般ノ救済ノミニ尽シ全ク同県出身者ノ上ニ及バナカツタ。否同胞愛的救済方法モ至ツテ拙劣デ関西ノ優秀ナ数県ト聯合シテソノ優秀府県ニ一任シテイタ傾キガアツタ為愛媛県ノ活動振リハ認めラレナイ否存在サヘ罹災民ノ大部分ハ知ラナイ。青年団モ来ネバ在郷軍人団モ何モ来ヤシナイタゞ県庁ノ一属官ガ来タ位ノモノダカカル有様デアルカラ愛媛出身ノ者ノ窮乏ハ其極ニ達シタノデアル。県庁ノ御役人ガ後デ色々弁解ヲシテイタガ在浜ノ愛媛県人ハ十月二日迄ハ全ク愛媛県トシテ何等ノ救助モ受ケナカツタ事。他府県ノ如ク青年団在郷軍人団等云フ団隊ヲ送ツテ全県出身者ノ為メニ尽サナカツタ事ハ事実デアル他府県ノ徹底シタヤリ方ニハ在浜県人一同全クセン望ニ堪ヘナカツタ其ト同時ニ郷土民ノ不誠意ヲ怨マズニハ居ラレナカツタ。

後デ調ベテ見ルト我郷土民ハ決シテソノヤウナ無同情者ノ揃ヒデハナク愛媛県知事宮崎通之助氏（静岡出身）ノ不誠意ガ禍ラシタモデ我県民ハ非常ナ誠意ト同情ガアツタノデ救済慰問ノ金品ト云ヒ青年団在郷軍人団ノ意気込ミト云ヒ決シテ他府県ニ劣ラナカツタ否他府県以上デ有ツタソレヲ抑制シテ在浜ノ県人ニ怨嗟ノ声ヲ発セシメ同郷人ヲ恨マセタモノハ実ニ知事ノ暗愚ノ然ラシメタコトガ知レタ。

九、久松伯爵家及ビ先輩知己訪問

九月十九日今日ハヨホドヨク晴レテイル妻ハ未明ヨリ起キテ水汲ニ出カケ老人ハ竈ノ下ヘ新聞紙ヲ詰メ古下駄ヤ木ノ片ヲ押シ込ンデ火ヲ起シテイル子供等ハ連日ノ疲労デ無邪氣ニ寝テイルガ薄団ヤ蚊帳ハ夜露デベト／＼デアル午前七時朝飯ヲスマセ東京ノ久松家及ビ知人親友ノ安否ヲ尋ネル可ク杖ノ先ヘ藤製ノ手携籠ヲ突差シコレヲ肩ニカケテ横浜駅ニ向ツタ神奈川駅ノ前ヲ通ツテ高嶋駅ノ前迄来ルト一番列車ガ人ヲ山盛りニ積ンデ東京ニ向ツテ発車シテイタ。亀裂ノヒドイ治道ニハマダ避難民ヤ重キ荷物ヲ運ブ人馬ガ一パイ引キリナシニ通ツテイル。横浜駅前ヘ来タ。プラットホームヘ這入ルノニ柵モ何モナクタダ針金ガ一二本引ツパツアルダケデアル。幾百トモ数ヘキレヌ男ヤ女ガ押スナ突クナノ混雑デアル子供ガ泣キ出ス爭論ガ始マルトテモ乗車ハ六ヶ敷イト思フタ。

ヤガテ程ヶ谷方面カラ無蓋及有蓋ノ貨車ヲ沢山連結シタ汽車ガ来タブラ下ツテイル人汽灌車ノ外ヤ石炭ノ上マデ桃ヲ積ンダ様ニナツテイル。其中ニ多少降りル人モアツタノデ人ニ押サレナガラ乗り込ンタガ下デ見テイタヨリモ更ニ悲惨デアツタ泣キ叫ブ乳息子ヲ背負

ヒ汗ダク／＼ニナツテイル婦人ヤ頻死ノ病人ヤ長時間ブラ下ツテイタ為手ガ真赤ニナツテ今ニモ千切レルト泣イテイル人ヤ手足面部等スキマナク繃帯ヲシテイル人等野戦病院ノ如クデアル。汗ト血膿ノ臭氣ガ鼻ヲ突ク。汽車ハ一日ニ拾回程アルトノ事ナレドモ何レモ満員デ一分モ身動キガ出来ヌ右向ヒタラ右向ヒタ俟左リ向ヒタラ左向ヒタ俟併モ平時ナレバ品川迄僅ニ二十四五分間デ行ケルノデアルガ最徐行デアル為メ一時間以上モカ、ル中ノ方ニ乗ツテイル人ハ暑イノト人ノ氣息テ窒息シサウデアル全ク當時汽車ニ乗ルニハ命ガケデアツタ。

品川駅デ下車シタ流石横浜トハ違ツテ駅前ニ売店ガ沢山出来テイルココテ合ノ子弁当ヲ食ツテ服ヲコシラヘ市電ニ乗ツテ増上寺前デ下リタ。門ノ入口カラズット奥迄避難民ガ思／＼ノ仮小屋ヲ建テ握リ飯ヲ食フテ居ルモノモアレバ戸板ヲ並ベ疲レハテテ親子相擁シテ寝テイルノモアル門ノ柱ヤ壁ニハ尋ネ人ヤ立退所ノ知セヤ救護所ノ広告ガ一パイ貼ツテアル。アンマリ顔ガ髭モブレデアルカラ門内ノ野天ノ髪床屋サンニ髭ヲ削ツテ貰ツタ無論椅子ナドアルワケデナク酒樽ニ腰ヲカケテザリ／＼ヤツテ貰ツタノデアルガ顔ナド洗フ水ハ無イノデアル削リ賃金拾銭也。

此所ヲ出テ芝公園ノ中ヲ通り抜ケ久松伯爵家ヘ伺候シタ。御門ニハ旧松山藩諸君ニシテ御困リノ方ハ御相談ニ応ズルト云フ広告ガ貼ツテアツタ。門内ニハ煮キ出シヲスル人握飯ヲコシラヘル人案内スル人等デ混雑シテイル。内庭ニハ旧松山藩ノ御歴々ガ両手デ握リ飯ヲツカンデ甘サウニ食ツテイルノヤ老人ガ孫ノ手ヲ引イテ来テ働リ盛リノ者ガ死ンデシマイマシテ生活シテ行ク事ガ出来マセンノデス

何デモ致シマスカラ使ツテ下サルマイカトカ郷里へ引上ゲ度イノデアリマスガ如何致シマシタヲヨロシイノデセウカトカ郷里へ行ツタトテ身寄りノ者ハナシ何トカ助ケテ戴ケマスマイカ等ト押寄せテイル中ニハ祖先幾代ノ系図等持ツテ来テ泣キツクト云フ始末デ非常ナ混雜ヲシテイタ。自分ハ御家令ノ管節様ニ御目ニカカツテ御挨拶ヲ申上ゲ閣下ヲ始メ御一統ノ御安否ヲ伺ツタ。菅様ハ平素カラ御親切ニシテ下サリ色々ト御配慮ニ預ツテイルノデ自分ヲ見ツケルトスダ八木君ヨウ来タ無事デアツタカ当家デモ皆ノ者ガ心配シテ居ツタ横浜ハ東京ヨリ強烈タト聞イテイタカラ一層心配シタ家族ハ皆無事カ家ハ如何力御困リナラ御出ナサイヨ。当久松家ハ御覽ノ通り多少ノ破損ハシタガ大体ニ於テ無事デアツタ。鶴沼ノ別庄ノ方ハ一タマリモナク全壊シテシマツタシ中折柄伯爵御夫妻御令息等御避暑中デアツタノデアルガ幸ニ御無事デアラセラレマシタ私ノ宅モ破損ハシタガ倒壊ヲマヌカレタノデ家族一同無事タツタ。マア昼飯ヲ食ベ給ヘト云ハレルノデ御家令家扶ノ方々ト罹災談ヲシツツ御馳走ニナツタ十九日目ニ始メテ正式ニ御膳ノ上デ御飯シカモ白米ノ飯ヲ戴イタノデ喜シカツタ事甘カツタ事全ク夢中デアツタガソレト同時ニ又家族ヤ親友ノ誰彼ハ食フニ食ヘズ犬小屋ノ様ナ住居ニ泣イテ居ルコトヲ思ヒ出スト自分ダケ食フ事ハ心ニスマヌ様ニ思ツタ。

伯爵閣下ヤ御令息モ余ノ無事ヲ喜デ下サツテ色々ト横浜ノ模様ヲ聞カレタカラ自分ノ体験シタ震災ノ模様ト罹災民救済ノ有様ヲ申上ゲタ。此日愛媛県カラ管理事官ガ来ラレタサウデアルガ御令息トノ話ガ永ビイタ為メニ逢フ事ガ出来ナカツタ。午後一時半頃全邸ヲ辞シテ九段ニ向ツタ。坂上カラ市内ヲ見渡ストサシモ榮華ヲ誇ツタ都

大路モ今ハ只一面ノ赤土ト化シテシマツテ焼跡ヲ堀リ返シテイル人焼垂鉛板デ掘建小屋ヲ造ツテイル人急造ノおでん屋饅頭屋そば屋、氷屋絵葉書屋等ガ縁日ノ市ノ如クデアル罹災民ガ重キ荷物ヲ背負ツテ織リ様ニ通ツテイル赤褐色ノ灰ガ風ニ吹キマクラレテ立チ上ル電車ト云フ電車ハ皆鈴ナリニナツテ通ル裸デ歩イテモ道傍デ放尿シテモ誰一人トガムルモノハナク却ツテ同情サレテイタ暑イ太陽ノ光ハ用捨ナク照リツケル井伊伯金子子爵邸ナド伺候シタガ皆焼払ハレテ居タソレカラ千駄ヶ谷ノ知人ヲ訪問シ更ニ新宿駅ニ向ツタ此付近ハ被害ノ程度比較的少ナク倒壊家屋モ稀デアツタ。駅ノ付近デ食事ヲヤツテイルト中央線デ入京シタ岐阜県青年団ガ団旗ヲ先頭ニ白地ニ赤ク染メ抜イタ襷ヲカケ二百名近クノ青年ガ当タトヤツテ来タ聞ケバ先着ノ青年団ト交代ノ為ニ二度目ノ入京ダトノ事デアル愛媛県ノ如キハ二度目ドコロカ一回ダツテヤツテ来ヤシナイ。

ココカラ汽車デ東中野ノ清水様方ヘ見舞ニ行クコトニシタガ東中野駅ヘハ汽車ガ停車シナイ為中野駅迄行キ徒歩デ東中野迄引キ返シタ。日ハ全ク暮レタ兩駅間約一里ヲトボく歩イテイルト木陰ヤ家ノ隅カラ数名ノ自警団ガ飛出シテ来テ胸先キヘ竹鎗ヤピストルヲ突ツケタ。誰人？……日本人デス。何処カラ何処ヘ行クノダ。……今朝横浜市青木町上反町四八〇ヲ出テ芝区ノ久松家ヲ訪ヒ九段ヲ経新宿駅ヨリ汽車ニテ中野ニ向ヒ東中野ノ清水喜重方ヘ引カヘシテ居ルノデス。……ヨシ通レ夜中ブラく歩イテ居テハ危険デスヨ御注意ナサイ。等ト到ル処デスイサレツツ清水喜重様ノ御当守宅ヘ着イタノガ午後七時過デアツタ。お千代サンガ出テ来ラレテ……アラ珍ラシイ大変心配致シテ居リマシタ御宅サンハ皆サン御無事デシタ

カ清水ノ宅及親族一同ハ無事デシタ。喜重様ハ御心配遊バサレテ居ラレルデセウ彼地ヘ電報ヲ打チマシタカ。先月四郎様方来ラレテ通知ヲスルト云ヒマシタ……マア危険ナ事デシタ幸ニ皆サン御變リハナクテ何ヨリデシタ私ノ宅モ一人モ怪我ガナカッタ。……コチラデハ富美子サンガ、チヨコくスルカラ多分ケガヲセラレタデアラウト皆ガ云ツテ心配シテ居リマシタノデシタガ大安心シマシタ。……一承サン重之サンガ飛上ツテ喜デクレタ……

今夜ハ到底横浜ヘハ歸ルコトハ不可能故ニ階ヘ宿泊サセテ貰ツタ。今夜モ一回強震ガアツタ。翌朝ハ五時過ギニ目ガサメタお千代サンガパンヤ菓子やお芋ヲ沢山御土産ニ下サツタ中々重イガ嬉シクテく早く歸ツテ皆ノ者ヲ喜バセテヤラウト勇ンテ電車ニ乗り込ミ横浜ヘ歸ツタ富美子ヤ清美ヤ朝子ガ嬉シガツテキヤアキヤア云ツテお行儀ニ座ツテ顔見合シテ喜デ居ル。清水ノおぢサン有難フ御座イマスト云フテ食ベルノダゾト云フト皆ノ子供ガ手ヲツイテ清水ノおぢサン有難フ御馳走ニナリマスト云ツテ食ベタ。人ニ物ヲ貰ツテコノ位嬉シカツタ事ハ今迄殆ンドナカッタ。

十、刀折レ矢尽キテ故郷ヘ

九月九日カ十日頃デアツタ同郷ノ友ガ尋ネテ来テ……八木君御互ニコレ程ノ難義ヲシタ事ハナイネ——雨ハ降ル蚊ニハ攻メラレル黴ガ生ヘル蚤ガワク本当ニ困リキツタガ君方ハ如何ダ……御覧ノ通りノ有様デ蠅ト蚊ト鶏ノ羽虫ト（鶏舎ヲ仮寓ニシタ為）筵ノ下カラ涌イテ来ル水分ト夜露トソレニ食料ノ欠乏通信不純等ノ聯合軍ニ攻メタテラレ頻死ノ状態ダ徹宵夜警覺ハ食料ノ工夫ニ奔走シテイルガ中々

一升ノ米ニモアリツケナイ通貨ヲ出シテモ売却レト云ツテ売ツテクレナイ始末ダカラ実ニ今度位困ツタ事ハナイヨ、其ニシテモ郷里ノ者ハ此実情ヲ知ラナイノデアラウカ他ノ府県ハ皆多少ナリ自分ノ県カラ救助シテ貰ツテイルニ如何シテ愛媛県ハ無常ナノデセウ其中何トカ云ツテ来ルダラウマア辛棒セウヂヤナイカ。昨日モ市内ヘ出テ見ルト高架線ノ塀カラ電信棒ヤ焼残リノ橋ノ欄干マデ他府県ハ麗々シク広告ヲ出シ各自県民ノ保護ニ青年団方来テイルヨシ名実相添ハヌニシテモコレ等ノ県ノ出身者ハドノ位心丈夫ナ事デアアラウ併シ何ト云ツテモ仕方ガナイ事ダ。今来カケニ聞ケバ此町端レニ芋ヲタダデ掘ラシテイルト云フガ君一所ニ行カナイカ。……其ハ本当ノ事カ実ハ昨日来食料ガ欠乏シカケタノデ老人ヤ子供ニ一杯デモ多ク飯ヲ食ハセタイモノダカラ家族ノモノニ向ヒテハ友人ノ宅デ馳走ニナツテ歸ツタナドト嘘ヲ云ツテイタガ実ニ服ガペコペコナンダ。

有難イヨイ事ヲ聞イタ善ハ急ゲダサア行カウト風呂敷ト金棒ヲ携ヘテ二人デ町端レヘ行ツタ。コノ芋ヲ掘ラシテクレルト云フ所ハ青木町上台町ノ町端レデ高嶋山ニ続イタ約一反歩程ノ傾斜シタ赤土ノ畑地デアル。行ツテミルト早ヤ十数人ノ土方人足風ノ垢モブレニナツタ髭ボウくタル連中ガ盛ンニ赤土ヲ掘ツテ芋ヲ拾ヒ出シテ居ルノデアツタ。フト傍ヲ見ルト其地主ラシイ農夫ガシヨウ然ト震ヒナガラ立ツテイタ。土方人足風ノ男ハ時々コノ野郎此際ダ人ノモノモ我ノモノモアルカト云フ權幕デ百姓ヲニラミツケテハ平氣ノ平左デ芋ヲ堀ル様地獄ノ餓鬼道モカクヤト思ハレタ今モ猶ソノ面憎イ髭武者ノ態度ガ目ノ前ニチラツク。

自分ハ友人ニ向ツテアレヲ見給ヘ百姓モ罹災民御互モ罹災民ダ罹

災民ガ罹災民ノ心ニモ無イモノヲ掠奪スルノハ人間トシテ出来得ナ
イ餓鬼ノモノヲ畜生ガ覗フト云フ事ヲ云フガ御互ニ渴シテモ盜川ノ
水ハ飲ムマイ歸ラウノト二人ハスゴク我家へ歸ツテ来タ。今
ニ芋ヲ持ツテ来テクレルト待ツテイタ女房ヤ子供ガ疲れハテテイル
二人ノ顔ヲ眺メテホロリトシテイタ全モ友人モ急ニ服ガ減リ氣拔ケ
ノシタヤウナ心地ガシテ飯小屋ノ中ニ横ニナツタガ又氣ヲ取直シテ
妻ニ向ヒ茶ヲ沸シテクレト頼ンダソシテ茶腹モ一時ダト元氣ヨク云
フト友人モサウダ手伝ヒマセウト云フテ古新聞ヤ垣ノ板片ヲ集メテ
火ヲツケタ。暑熱ハ燒クガ如ク汗ト油ガ汚レタ額ヤ顔ヲ伝ツテ流レ
ル。折柄隣家ノ棟近サンガ神戸カラ戴イタ豆ガアリマスカラ御子供
衆ニト云ツテ両手テニ合程ノ煮リ豆ヲ握ツテ持ツテ来テクレタ有難
ウ存ジマスト御礼ヲ云ツテ其豆ヲ更ニ沸サシタ。ソシテ家族一同ト
友人トデ数ヘルヤウニシテ食ツタ美味デアツタ事ノ友人ハ非
常ニ喜ンデ幾度トナク礼ヲ云ツタ。

其日ノ午後上反町ノ衛生組合カラ配給米ヲ渡スカラ取りニ来テ下
サイト札ヲ配ツテ来タモノダカラ大喜ビテ古手拭ヲ縫合セタ袋ヲ持
チ頬冠リヲシテ真ニ乞食ト同様ナ風ヲシテ下町へ行キ玄米四升ヲ貰
ツタノデ急イデ我家ヘ引カヘシタ家族一同子供迄方手デ米ヲ握ツテ
見テハ嬉シゲニ笑ツタコレガ命ノ親カト思フト米一粒宛ガ皆光ツテ
イルヤウニ思ツタ。

カカル苦シイ思ヒヲシツツモ折々学校ヘ出勤スルヤウニ云フテ来
ルノデ五六度モ出勤シタガ一里半モアル遠イ道シカモ日影一ツナキ
焼野原テ赤塵ノ立チ上ツテイル中ヲ行クノダカラ並大抵デハナカッ
タ。其ノミナラズ前述ノ如ク食物ノ不足水ノ欠乏加フルニ連夜徹宵

自警団トシテ警戒ニツトメルノデアルカラ身体ハ綿ノ如ク疲労シ物
云フサヘ苦シイ程ニナツタ。雨ノ夜ナドノ悲惨ハ又一層デ天井ヤ板
ノ隙間カラ用捨ナク雨ガ降り込ミ床ノ下カラ水ガ涌イテ来ル始メデ
蒲団抱ヘテ泣キ叫ブ女子供ノ声ナド物凄キ夜半ガ幾度カアツタ。

自分ノ宅デハ十五日頃カラ家族ノモノガ相次デ強度ノ胃腸病ニ冒
レ自分モ又時々下痢ヲ始メタノデコレデハ到底助カラナイト思フタ
カラ家族ノ者ニ云ヒ聞カセ一先ツ帰郷スルコトニ決シタガ東海道線
ガ中々復旧センノデ止ムナク汽船デ歸ルコトニシ空家ニナツタ東隣
ヘ家具ヲ入レサシテ貰ヒ九月廿日サシアタリ生活ニ必要ナル品ダケ
ヨリワケ人夫ヲ雇ヒ来ツテ荷造ヲシテ貰ヒ九月二十一日市役所ヘ行
キ罹災民無料乗船証ヲ貰フテ来タソシテ元町デ焼ケ出サレタ富士屋
事和田幸八氏一家族ヲソノ家ノ留守番ニ頼ンデ置き二十二日出発
スルコトニシタ。

大正十二年九月二十二日午前拾時半上海丸ハ東京芝浦沖ニ廻航シ
神戸ニ向ツテ直航スルコトニナツタノデ午前七時朝飯ヲ終リ荷車ニ
荷物拾二個ヲ積ミ込ミ子供ヤ老人ヲ一足先キニ棧橋ノ方向ニ向ハセ
自分ト弟ハ荷車ノ後ヲ押シテ棧橋ニ向ツタ。マダノ道路ハ大震災
当日ト何等ノ変リガナイ其上ニ細雨ガ降り出シタノデ歩行ノ困難ハ
云フ迄モナク乗船客ガ棧橋ノ入口ニヒシノト押シヨセテイルノデ
女ヤ子供ハトテモ乗レルモノデハアルマイト思ハレタ。故郷へ歸ル
ノダカラト子供等ハ喜ビ勇ンデイルケレド錦着テ歸ルワケデナク身
ヲ以テ逃レル云ハバ 者デアルノダカラ心細イ感ジガスル。棧橋
ノ上ニ上ツタ頃ハ雨風益々強クナリ軒下モ何モナイノデ雨ニ漏レマ
マ立ツテ船ノ出ルノヲ待ツテ居ラネバナラヌノデ子供等ハ何レモ

色ハ青ザメ唇ハ紫色ニナツテガチ／＼フルウテイタ。(昨日迄暖カ
ツタノダガ此日ハ特別ニ寒カツタ)

見送ツテ来テクレタ友人や文具屋ノ主人等ハ此雨ノ中ヲ一個宛着
船場迄運ンテクレタガ中々港務部ノ跡カラ着船場迄ハ数丁アリ加フ
ルニ大震災ノ当日九分通り破壊サレ埋没シタノテ工兵隊ガ仮ノ棧橋
ヲ急造シタノダカラ不完全ナノハ申迄モナク歩ク度ヒ毎ニグラ／＼
動クソレニ雨風ダカラ堪ヘラレナイ子供等ハ吹キ飛バサレヨツタ漸
ク着船場迄来ルト沢山ノ乗客ガ危ゲナ棧ニツカマツテヒヨロ／＼
シナガラ上ル何人ヲ見テモ憐レナ姿ノ人バカリダ自分ハ二人ノ子供
ヲ連レテサキニ乗船シ船ヨリ縄ヲ投ジテ弟ト露西亜人ニ手伝ツテ貰
ツテ荷物ヲ一個宛甲板ヘ引キ上げ始メタ。

十二個ノ荷物ノ中十個引キ上ゲルト出航ノ汽笛ガ鳴リダシタノデ
ヤア大変タ／＼ト云ヒツツ一生懸命デ漸ク引上ゲテシマツタソレ
ト同時ニ船ハ棧橋ヲ離レタホントニ危機一髪デアツタ。細雨ハ斜ニ
飛ブ友人等ハ別レヲ惜ム。赤土トナツテ所々ニ余烟ノ上ツテイル
港ヲ顧ミ吾家ヘアノアタリナリシ全ガ家ハ崩レタ断崖ノ下ナリ等指
ザシ涙ヲナガシテ住ミナレタ都ヲアトニ落チノビ行ク人ノ憐レナ会
話ハ甲板ノ此所彼所ニ交ハサレテイタ。嗚呼全ク夢ダ万感ハ交々ト
ツテ雨ニ烟ル港ハ次第ニ遠ザカツタ。午後一時過ぎ浦ニ着イタ雨ハ
次第ニ晴レタガ風ハ次第ニ強クナツテ来タ。小蒸気船ニ沢山ノ罹災
邦人及鮮人ヲアフレル程ニ乗セテ此船ニ横着ケニシタ。重イ革靴ヲ
背負ヒ危ゲナ棧ヲ伝ヒ乗込ンデ来ル男。子供ヲ背ニククリツケ泣キ
／＼船酔シテ上ツテ来ル女見ルカラニ氣ノ毒ニ又憐レデアツタ。

夕陽ハ西ニ没シタ東京灣ノ彼方秩父地方ノ山々カラ日光山ノ方マ

デ次第／＼ニ夕暗ニ包マレタ。一同ニ握リ飯ト漬物ガ配ラレタノデ
船室ハ次第／＼ニ賑カニナツタ。船ハ午後八時出帆神戸ニ向ツテ出
帆シタ。風ハ少シモ衰ヘナイ観音崎ヲ出ルトスグ相模灘ダ風ハ次第
ニ強ク浪ハ益々高イ。船ニ弱キ女房や子供ハ三等船室ノ一隅ニ寝タ
ギリデアル太平洋ノ義浪ハ用捨ナク舷ヲ打ち強風ハマストニ当ツテ
鳴ル其度毎ニ服ノ底ヘ滲ミル様ナ心地ガスル。遠州灘デ夜ガ明ケタ
島モ陸地モ何モ見ヘル大洋ノ中ニ朝日ガ麗タニサシ上ツタ山ノヤウ
ナ大浪ガドン／＼押シ寄セテクル午前十一時過船ハ紀淡海峡ニ這入
ツタ。飛魚ガ盛ンニ列ヲナシテ飛ンデイタ空ハ全ク晴レテ一天ノ雲
モ見ヘナイカクシテ船ハ午後三時過神戸港ニ入ツタ。大小ノ軍艦商
船ガ港狭シト集ツテ黒烟ガ天ニ漲リ遙ニマヤ山ヲ望ミ神戸全市ガ手
ニ取ルヨウニ見ヘタ井云ヒシレヌ嬉シサヲ感シタノト同時ニ又横
浜東京ノ事ヲ思ヒ出テ悲シカツタ。

イヨ／＼船ガ棧橋ヘ着クト神戸市大坂市京都市アタリノ青年団愛
国婦人団各種ノ宗教団等ガ待チカマヘテ居テ何クレトナク世話ヲシ
テクレタ活動写真隊ガ全出航シヨウトシテ慰問品ヲ援助団ノ手デ積
ミ込ミ煤烟ヲ天ニ漲ラセテイル雄大ナ光景ヲ背景トシテ、青年団ガ
吾々罹災民ヲ慰メ勞リ上陸サセル状況ヲ撮影シテイル。支那ノ領事
館ガ五色ノ旗ヲ飛シテ一行ヲ四列縦隊ニシテ引キ上ゲル。各種ノ団
体ガ吾々ヲテントノ中ニ招イテ牛乳コーヒヲノマセ子供等ニハ菓子
や慰問品ヲ給与スルヤラ乗替ヘスル罹災民ニハ夫々乗船場迄案内シ
テクル等誠ニ手厚キ同情振リニ思ハズ嬉シ涙ヲ禁ズル事ガ出来ナカ
ツタ。

船ノ出ル迄四時間モアルカラ少シ町ヲ散歩シヨウヂヤナイカト子

供ヲ連レ辻便所ノ傍ノ石ニ腰ヲヲロシ夜泣うどんニ杯宛食フタ子供等ガ美味サウニ食フタ事妻ノ顔ニタ日ガ斜ニ当ツテ衰ヘタ頼ノアタリノ骨ガ急ニ飛出テイルノガ如何ニモ憐レデアツタ。ソレカラ子持乞食ノヤウナ風ヲシテ電車通りヲブラ／＼歩イタ家々力井然ト並ンデイルノヤ電車ヤ汽車ノ光ツテイルノガ不思議ナ様ニ思ハレテナラナカツタ。ソレカラ電報デ明日午後三時着ク旨景浦様ヘ打ツテ置イテ乗船所ヘ歸リ午後八時半出帆ノ高浜丸ニ乗込ンダ狭イ／＼高サ三尺程ノ棚ノ上ヘ這入ンダ座ツテ見ルト天井ト頭ガスレ／＼ダ其上風ハ少シモ這入ラナイ四畳半ニ三畳位ノ室デスグ下ニハ菰包ミノ荷物ガ一パイ積込ンデアルソレニ二十人程モ押込ンデアルノダカラ身動モ出来ヌ苦シイ室ダ船ハヤガテ八時三十分抜錨シタ波静カニ空ハヨク晴レテイタ高松ヲ經テ多度津ヘ着ク頃ニ夜ハホノボノ明ケタ。

船内ヘ正宗饅頭瓦煎餅等売リニ来タガ乗客ハ主ニ罹災民デアル為カ買ウモノガ少ナカツタ。甲板ヘ上ツテ見ルト海ハ小波ヲ立テテ心地ヨイ風ガ吹イテイタ同乗シテイタ罹災民ハコノ平和ナ光景ニ蘇返ツタヤウニ嬉シサウナ面持ちデ金比羅神社ノ方向ニ合掌シテ祈念シテイタ。約三十分間停船シテ再ビ出帆シタ今治ヲ經テ午後二時過燧火洋ニ入ツタ船ノ進ムニツレテ故郷ノ山々ガ目ノ前ニ展開シテ来ル子供等ガ嬉々ト叫ンデ身支度ヲ始メタ程ナク伊与ノ小富士ヤ四十島ガ見ヘダシタ家族ノモノハ上甲板ニ上ツタ船ハ右手ノ棧橋ヘ着イタ景浦様御一家ヤ越智ノ方々ガ出迎ヘテクレタソシテ午後四時過ノ汽車デ松山ニ向ヒ無事故国ニ歸ルコトガ出来タ。

〔大正十二年九月一日 関東大震災日記〕前編、横浜開港資料館保管、請求番号…八木洋美家文書―13〕

【史料四】大正十二年九月一日 関東大震災日記 続編

〔表紙〕

大正十二年九月一日

関東大震災日記 続編

罹災者 八木熊次郎

大正十二年 関東地方大震災日記 続編

故郷ニ避難シテ。罹災者八木熊次郎述

一、九月一日ヨリ全月二十四日迄ノ概略。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如大強震ニ襲ハレタ横浜市ハ倒壊ト共ニ大火災ヲ起シ、火柱ハ天ニ冲シ、爆音ハ地ニ轟キ鉄板ハ空ニ舞ヒ全市忽チ阿鼻叫喚ノ巷ト化シ、六十年來ノ市民ノ奮闘努力ガ一朝ニシテ灰塵トナリ大横浜ノ雄姿ハ全ク葬リ去ラレタ。サウシテ幾万ノ痛マシイ生靈ハ永久ニ失ハレタノデアツタ。生キ残ツタモノモ多クハ血ニ塗ルル負傷者、茫然自失セル男女、親ヲ尋ネ子ヲ呼ブ避難者ノ群、食ヲ求メテ右往左往ニ迷ヒ歩ク色青キ空腹者ノミデ其痛マシサ筆紙ニ尽スコトハ到底出来ヌ。コレヲ帝都ニ比スルニ其慘ハ兄弟ナシト雖モ東京市ハ猶四分弱ノ焼失セザル家屋ヲ残セルニ我横浜市ニ於テハ殆ド九分通りヲ焼キ尽シ、残レルトコロモ殆ド室内ニ立チ入ル能ハザル程ノ惨状デアル。其故居住スル家ナキハ勿論事、昼食時ニ起リシ為メ即刻ヨリ食物ニ窮シ加フルニ暑熱甚ダシキ日ナリシ為大部分ガ上衣ヲ脱キ捨テシャツ一枚ノ者多ク、突

差ノ事トテ被服ヲ取ル間サヘ無カッタノデアル。此時ニ當ツテ同胞諸彦ノ暖カキ友情ヲ尽サレタルニ對シテ何人モ衷心ヨリ感謝シナイモノハ無カッタノデ、震災後第三日目ノ伊豆ヲ筆頭ニ兵庫大坂愛知岐阜福島岩手高知福井広島等十日前後ニハ殆ンド全国ニ亘リ救護団トシテ青年団、在郷軍人団、海員家族救護団、宗教団隊ナドノ名ノモトニ入り込ミ来リ。各自郷土民ノ保護救済ニ尽サレ救護ノ廣告ガ焼ケ残ツタ塀ト云ハズ電柱ト云ハズ競争ノ有様デアッタ。其ニハ大同小異デアアルガ左ノ如クニ記サレデアッタ

何々県人に告ぐ。

○お困りの方は来れ ○故郷へ歸りたき方は来れ、○郷土へ通信したき方は便宜計ひませう、又代筆もします、○慰問品を分配します
何々県人救護所本部何町何丁目何人方。

コレ等ノ廣告ヲ見タ其郷土出身ノ在京者ハヨシ各実相供ナハズトモ如何ニ頼モシク心強ク肩幅広ク感ジタ事デアラウ。余ガ東京市芝区柴町久松伯爵邸へ御見舞ニ行ツタノハ九月十九日デアツタガ、其日ノ夕方岐阜県ノ如キハ青年団ノ旗押シ立テ約百四五十名白襟ニ赤字ニテ岐阜県罹災民救護団ト記シ隊伍ヲ揃ヘ堂々ト中央線ニテ新宿駅ニ下車セル一隊ヲ見タ。コレハ前ニ来レル青年団ト入替リヲナスノダトノ事デアッタ。斯クシテ他府県ノ大部分ガ種々ノ名目ノモトニ入り替リ立チ替リ乗リ込ミ来レルニ吾ガ愛媛県ノ如キハ余ガ横浜ニ滞在セル九月廿二日迄ノ間ニハ横浜ノ何処ニモ何等ノ廣告モ張ツテナカッタノデアル。尤モ市役所ノ傍ニ関西各府県聯合相談所ト

云フモノガアツテ各府県ノ名ガ三寸ニ六寸位ノ紙片ニ記シ巡查一名宛配當サレテ居ルノヲ見受ケタ。其中ニ愛媛県ト云フノガ有ツタガ其ハ名バカリデ殆ド二十一、二日頃迄ココヲ通ル度ビ毎ニ立寄ツテ聞イテ見タガ空席デアツタ事ハ事実デ、恐ラク県人が幾人カ此所ヘ尋ネテ来幾人カ失望シテ歸ツタ事デアラウ。

東京ニ於テハ已ニ二十七、八日頃？久松伯爵家ニ於テ已ニ旧松山藩諸君ニ告グ御困リノ方ハ相談ニ応ズル旨ノ廣告ガ新聞ニ見ヘ伯爵閣下ヲ始メ御令息御家令ノ方々ガ在京県人ノ幹事ト共ニ極力救済ニ尽サレテ居ラレタ。コレハ伯爵家ガ旧藩諸君ニ對スル厚キ御同情御愛護ノ思召ニ出デタモノデ愛媛県人ノ中旧松山藩ニ屬シテ居ラレタ方々ハ其御手厚キ情ニ感泣シタノデアッタ。シカシコレハ愛媛県全般ノ方ヲ救済スル意味デハナイ。横浜ノ地ハ東京ノ南方八里ノ地ニアツテ平素ナレバ兎ニ角斯カル場合ニ東京迄救済ヲ受ケニ行クハ容易ノ事デナク早朝ヨリ発車ヲ待チ、名状ス可カラザル混雑ト苦痛ヲ忍ビ無蓋ノ列車ニ乗り込ミ（汽車ハ平日ノ三分一位ノ速力）午後二至ラザレバ達スルコトヲ得ズ歸途ハ夜ニ入ルニ非ザレバ帰浜シガタク加フルニ夜中ハ自警団ノ為メニ各所ニテ竹鎗ヲ突キツケラレ或ハ歩哨ノ兵士ニ誰何サレルノデ殆ド命ガケノ思ヒヲセネバナラヌノデ救護ヲ受クルドコロノ騒ギデハ無カッタ事ハ其後新聞紙上ニ表ハレタ恐ロシキ事実デモ想像ガツクデアラウ。其デモ止ムヲ得ナカッタナラバ決行スルツモリデアッタ。

久松伯爵家ガ愛媛県ノ救護本部トナツタノハ管理事官ガ始メテ九月十五六日頃ニ東京へ着サレ十九日頃ニ久松家ノ御家令ノ方々ヤ在京愛媛県人会ノ幹事ノ方々ニ迫ラレ渋々決定シ九月二十日頃ニ始メ

テ広告サレタモノデアルガ横浜ハ九月二十二日迄否十月二日迄ニハ何等ノ広告モ見ヘズ宣伝モナカツタノデアル在浜ノ我愛媛県人ハ住ム二家ナク着ルニ衣ナク食フニ食ナク夜露ニ打タレ雨ニタタカレ其上ニ九月二日ニハ非常徴発令ガ布告サレ〇〇団三百名襲来、根岸刑務所一千全名開放、放火強奪強姦井水二投毒ナドノ報警官ノ口ヨリ宣伝サレ青年団ノ男子ハ自警団ト称シテ伝家ノ宝刀ヲ腰ニ或ハ竹鎗ヲ携ヘテ所定ノ場所ニ集合ヲ命ゼラレ終夜警戒ニ務メザル可カラズ身体綿ノ如ク疲労シ湯ニモ入ラズ食物モロクナ物ヲ食セズ身ノ衰ヘ家族ノ病魔ニ侵サルモノ日二日多クナツテ来タ自分モ二十日目ニ強度ノ胃腸病ヲ起シ家族ノ中ニモ長男ト次女ハ同ジク雨漏ル飯小屋ノ中ニ臥セネバナラヌ身トナツタ手当スルコトモ此場合出来ズ水ハナシ食物ハナシ其苦シカツタ事ハ殆下言語ニ尽スコトガ出来ナカツタ斯カル場合ニ郷土ヨリ一片ノ同情アル言葉モ受ケズ何等救護ノ道モ開ケ居ラザリトセバ誰人デモ同郷人ノ不誠意不人情ヲ思フハ無理ノナイ事ト思フ。殊ニ余ガ隣家ハ兵庫県出身ノ海員デアツタガ慰問袋衣類缶詰等ノ食料品ヲ貰ヒ来リ僅力宛余等ノ子息ニ裾分ケヲシテクレルノテ子供等ハ隣ノオイサン方ハイイネー等ト云ヒ合ツテイルノヲ見ルト羨シクテタマラズ我愛媛県人モ不人情者ノ集リデハナイ吃度其中ニハ慰問品ガ来ルゾ其時ニハ近所ノ人ニモ分配シテヤロト二十二日迄待ツタガ其甲斐ハナカツタ。

同郷人相逢フ時ハ互ニ相擁シテ其不誠意ヲカコチ泣クモノスラ出来タ故郷ノ人ハ吾々ヲ見殺シニスルノデアラウカト思ハシメルノモ無理ノナイ事デ金銭ヲ持ツテ物品ヲ買フ事ガ出来ズ銀行預金ヲ有スル者モ殆下引出ス事ノ出来ヌ始末デアツタノデアル。余ガ九月

二十二日横浜港ヲ出帆スル迄ニ我政府ヨリ救助米トシテ配給セラレタルモノハ七人ノ家族ヲ有スルニモカカハラズ僅ニ壹斗壹升デ内訳スルト七升ハ八九年以前ノ支那米(幾度煮ルモ合着スルコトノナキモノ)デ四升ハ玄米デアツタノダ。コレヲ家族ノ数ト日数ニテ割レバ一日一人ノ食料平均七勺強ニ当ルノデアルコレデ二十二日迄露命ヲツナギ得タ事ハ自分ナガラ不思議ナ位デアル出帆ノ朝見送りニ来テクレタ誰彼ガ八木君故郷ヘ帰ツタラ此有様ヲ伝ヘテ下サイ金モ何モイラナイ急イデ食フモノヲト云ツタノガ誠ニ氣ノ毒ニモ又憐レニ思ハレタ。

九月二十二日午前十時半上海丸ハ東京芝浦沖ニ廻航シ神戸ニ向ツテ直行スルコトニナツタ此日午前七時頃ヨリ雨降り出テ風強ク波高ク太平洋ノ荒浪ヲ乗切ツテ進ム時々大浪ガ用捨ナク上甲板ヲ襲イ或ハ舷ヲ撃ツテ服ノ底マデ強ク響ク船酔ヒスル家内ヤ子供ノ身ノ上ヲ幾度トナク氣遣ツタガ幸ニ無事ナルコトヲ得テ翌二十三日午後三時過神戸ニ入港シタ。ココデハ神戸大阪京都等ヨリ出張シテイル宗教団や青年団、在郷軍人団支那領事ナドガ吾々罹災民ヲテント内ニ迎ヘ慰問状慰問品等ヲ給与シ荷物ヲ運ビクレ、二十三日間モ入浴シナカツタ余ガ子息三人ノ鼻ヲ拭キ湯手拭ニテ顔ヲキレイニ洗ヒ髪ヲ櫛ニテトキツケ帶結ビ直シ下駄ハカセ、キヤラメル、ピース等与ヘテクレタ震災後二十三日目ニ始メテ心カラ子供等ノ喜ビ叫ブ声ヲ聞イタ余ト妻トハ堪ラナクナツテ其厚情ニ対シテ涙ノ出ルノヲ禁ズル事ガ出来ヌ位嬉シカツタ。

此処ヨリ愛媛県ヘ至ルニハ船ニ乗替ヘネバナラヌノデ午後八時半出帆ノ高浜丸ヲ待ツ間ニヤツレハテタル妻子ノ手ヲ携ヘテ夜泣うど

ん二杯宛便所ノ傍ノ石ニ腰カケテ食シタ清美ヤ朝子ヤ富美子ガ美味サウニ食フタ事 衰ヘタ顔ニタ日ヲ斜ニ受ケテイル其時ノ光景ガマダ目ノ前ニ見ヘル。ソレカラ郷里ヘ明日午後二時着スル旨打電シテ置キ其夜予定通り八時半ニ乗込ンデ高浜ニ向ツタ船内ニハ九州方面ヘ帰ル罹災民及ビ愛媛県ヘ帰ル罹災民ト其他ノ船客トデ狭イ三等室ノ棚ノ上(高サ三尺位胴ヲ曲ゲネバ座スルコトガ出来ヌ室)ニすし詰デ身動キモ出来ヌ窮屈サデアツタ。

多度津ヘ着ク頃夜ハ全ク明ケハナレタ船ニ物売りニ来ル者アレド買フ金ヲ持タヌ罹災民ガ淋シゲナ目デ朝景色ノ平和サヲ称ヘテイルノモ憐レデアツタ斯クシテ船ハ午後二時過グル頃高浜ノ瀬戸ニ這入ツタナツカシキ我郷土ダ四十島ガ見ヘル伊予ノ小富士ガ見ヘル高浜ノ栈橋ニホラ沢山出迎ヘニ来テクレテイルゾ朝子ヨ清美ヨ富美子ヨ甲板ニ上ツテ御覧御国ヘ着イタノダヨ子供等飛上ツテ喜ブ斯克テ午後二時四十分海ノ方ヨリ向ツテ右手ノ栈橋ヘ着イタ。景浦家御一族、越智家ノ御家族親友等栈橋ニ余等ヲ迎ヘクレ余等ノ無事ナリシテ見テ喜バレヤツレハテタル有様ヲ見テ涙ヲ流サレタ九州方面ヘ帰ル罹災民ハコノ有様ヲ甲板上ヨリ眺メココニテモ歓待救護ヲ受ケ得ラルルモノト思フテイルニ誰一人トシテ同情アル言葉モカケテヤラナイモノダカラ一人去リ二人去リ船底ヘ這入ツタ。

同時ニ上陸シタ誰彼ハ云ツタアレ等ノ罹災民ニ何トカシテ上ゲレバヨイノニ何故此様ナ無同情ナノデアラウト皆憤慨シテ居ツタ。此所カラ六七丁アル高浜駅ノ斜向ヘニ関東地方罹災民救護事務所ト立看板ガ掲ゲラレ其側ニテープルニ二三脚並ベ県庁ノ御役人ト思ハレル様ナ方ガ烟草^{タバコ}燻ラセ茶飲ミナドシテ雑談シテ居ラレタノダ。此所

ガ県ノ救護所ダナーツ話ヲシテ置カネバナラント思フテ這入り。私共ハ横浜デ大震災ニ逢ヒマシテ只今避難帰省スルトコロデアリマス皆々様色々御同情御配慮ニ預リマシテ有難フ存ジマス。

御疲労デシトロ何処ヘ帰ラレルノデス。

松山市北夷子町デ御座イマス。

其デハコレヘ落着カレル所ヲ御書キ下サイ。

承知致シマシタト松山市北夷子町七二景浦直孝方ト書キ六人ノ各ヲ並ベテ書イテ置イタ。其ダケノ事デ誠ニ有難イ行届イタ救護所デ昔ノ関所ノヤウナモノダト思ツタ。其カラ汽車ニ乗ラウトスルト駅員ガ乗車ヲ拒ンデノセナイ「○君方ハ高浜迄ノキツプタ乗ルコトハ出来マセン」：「△無賃デ罹災民ハ乗車シ得ラレト聞キマシタガ無賃デハナイノデスカ」。○「勿論無賃タガ罹災民デアルト云フ証明書ヲ出サナケレバイカン」：「△其ハ神戸デ船ニ乗ル時ニ船ノ方ガ取上ゲテシマイマシタノデス。ソシテ船ノ切符ト引替ニナツタノデ証明書ガナイノデアリマス」。：○「無ケレバ駄目デス」：△「ソナナ杓子定規ナ事ヲ云ハナイデ乗セテクレ給ヘ罹災民タルコトハ風格ヲ見テモ判明スルデセウ。」ソレデモ中々応シテクレナイモノダカラ職員証ヤ教員ノ証明書ヲ見セテ横浜在住ノ事ヲ明カニシタガ猶応ジナイ。○僕ハ御社ノ社長井上要サンモ存ジテ居ル君ニ責任ハ負ハサナイカラ頼ム罹災民ノ事デ多少ノ金ハ持合セテ居ルガ困ツテ居ルノダカラト云ツテ居ル所ヘ高浜丸ノ事務長ト巡査サンガ来テ証明シテ上ゲルカラオ乗りナサイト世話シテ下サツタノデ二列車待ツテ漸ク汽車ニ乗り込ミ午後五時頃松山駅ニ着イタ。

見ナリガ悪いノカ車夫モ車ヲススメナイ景浦様ヤ越智様ノ方々ガ

世話シテ下サツテ漸ク荷ヲ運ビ両家へ分レ自分ダケハ景浦様方へ引上ゲタ御祝ヒタノト云ツテ酒ヲススメラレ品々ノ御馳走ヲ載イテ居ルト沢山ノ人ガ入り替リ立チ替リ訪問シテ呉レテ無事ニ帰ツタ事ヲ喜ンデクレタ。松山人ハヤハリ親切ヂヤ此様ニ親切ナ人ノ集リデアルニ何故今日マデ救護部ガウマク行カナイノデアラウカト思フタカラ皆サンニコンナニ親切ニシテ貰ヒナガラコンナ事申上ゲルノハ申上ゲ難イガ愛媛県ハマダ何モ救護ノ実ガ拳ツテ居リマセント横浜ノ罹災民救護ノ状況ト県人ノ状況並ニ高浜ノ歎待振りヲ話スト。皆ノモノガ意外ナ事ヂヤ決シテ松山ノ人ヤ愛媛ノ人ハ無同情ナノヂヤナイ。オ隣リノ香川県ナドハ七万円ノ割当デ救護費ヲ出スヤウニナツテ居タノニ多スギルト蹴飛シタニ拘ハラズ我愛媛県ハ十万円ノ割当ヲ心ヨク受ケ已ニ現金ダケデモ十万ドコロカ五十万円ヲ突破セントシテ居ル其他米ヤ被服日用品ナド積ンデ山ノ如ク軍艦デ三隻モ送ツタノニマダニ到着センノカナ二十三日モ経過シトルノニソソナ難義ヲヲシタノカヤチツトモ知ランモンヂヤケレ。ヒドイ事ヂヤナー景浦様ヤ親類ノ人ヤオ友達ナンカガ大愛心配シテアナタハ人ニ負ケン氣ノ方ヂヤケレ無理ナコトヲシテ吃度ヤラレトルノニ違ヒナイト云ツテ先日モコチヲノ先生ヤ奥様ガオ神主サンニ拝ンテモロタリ屯ト者ニ見テ貰フタラ砂ノ中カラ手ヲ出シトルト云フオ告ゲデナ皆ガ失望シテ花ヤ線香ヲ立テテ拝ンデ居タノジャ。マアヨカツタ生キテ帰テオ呉レタノガ嬉シイ私ハ生キテ居ラレルト聞イテ嬉シウテノ涙ガ出タゾナモシ市長様ヤ知事様ニオ願シテ県ノ方々ガ難義ヲシテ居ルコトヲ云フテ早く何トカシテ上ゲテ下サイヨ後世ニナルゾナモシ。皆同ジ意味ノ事ヲ誰ニ逢ツテモ云ツテ喜ビ且ツ同情シ

テクレタ。

翌日ニハ松山市長岩崎一高殿ノ代理ノ方ガ御見舞ニ来テ下サツタリ余ガ祖先ノ生地デアル温泉群小野村ノ村長並ニ校長村民ノ代表者等ガ見舞ニ来テクレ同窓ノ友ハ軀ケツケテ無事ヲ喜デクレルト云フ風デ矢張り松山人ハ松山人ダ愛媛県人ハ愛媛県人ダ他郷人ニ比シテ同情ノ念ハ決シテ劣ツテイナイドコカ遙ニ強烈ダト思ツタ余ヨリ先キニ横浜ヨリ帰ツタ同窓ノ石田薫氏ハ永井安三郎氏ト共ニ罹災地ヘ送ル可キ書物ヤ文房具等ヲ工夫シテ居ラレタガコレモ寄贈山ノ如クデアツタ。

二、愛媛県知事宮崎通之助閣下トノ交渉。

九月二十八日朝、松山市長岩崎一高殿ニ面会シテ我愛媛県民ノ罹災地ニ於ケル実情ヲ述べ救護手段ヲ同胞愛ノ一点張りハ不可ナリ。速ニ何トカシテヤツテ下サル様ニト歎願シタトコロガ賢明果斷ノ岩崎市長殿ハヨリ云ツテ来テクレタ。昨日井上吉利史ノ令弟ガ横浜カラ帰ツテ来テノ話モアツタガ多忙デ終ニ具体的ノ話ヲ聞カナンダカヨイ事ヲ聞キマシタ早速知事ニ逢ツテ話ヲシテクレンカ僕ガ紹介スルカラヨロシユウ御座イマス御話申上ゲマセウ。市長殿ハ直ニ筆ヲ取ツテ左ノ如ク記シタ名刺ヲ余ニ渡サレテ直ニ知事ニ在否ヲ電話デ問合せテイタ。「親友ハ木熊次郎君ヲ紹介シ候氏ハ横浜ニ於テ今回ノ震災ニ遭ヒ帰松セラレ全地ノ現状並ニ本県民救護ノ事ニ関シ意見ヲ有スルモノニツキ何卒御引見ノ上御聞取り置キ下サレ度イ」「以下ノ記事ハ松山ノ三新聞記者余ノ背後ニアリテ聞キトレル実記デアル」其日午前十時県庁ヘ行キ知事ニ市長ノ紹介状ヲ差出シ面会ヲ求メ

タ折柄県会議員ノ当選者数名挨拶ニ来ラレ居リシ為約二十分間応接室ニテ待チ程ナク議員ガ歸ラレタカラ案内セラレテ知事官房ニ這入ツタソシテ名刺ヲ差シ出シテ丁寧ニ挨拶ヲシタ其時知事ハ安樂椅子様ノモノニ腰ヲカケテ居ラレタガ身ヲ起サウトモセズ傲然タル態度デ何処ノ何故ナルゾト云ツタヤウナ風デ示シ名刺ヲ一蔑シテフント云ツタ。其時余ハ直感的ニ愛媛県始マツテ以来ノボロ知事ダナ御役人根性ノ拔ケヌ閣下ダナト思ツタ。

「以下◎印ハ余ノ話△印ハ知事」

◎私ハ本市出身ノ者デ約十年横浜ニ移住シテ居リマシタ今般大震災ニ遭ツテ本月二十二日迄居リマシタガ家ハ倒壊シ食料ニハ窮シ雨ハ漏リ鳥小屋ニ寝起ヲナス為メ家族ノ大部分ハ病氣ヲ致シマスシ私ハ二日ノ夜カラ夜警ニ出テ殆ド不眠不休デ居リマシタ為メ終ニ強度ノ胃腸病ニカカリマシタノデ止ムナク帰松致シマシタ。就キマシテハ本県ノ救済状況ヲ申上ゲタイト存ジマシテ参上仕リマシタ。「其時又鼻ノ先キデフント云ハレタ。御苦勞デシタ御疲勞デセウト挨拶アツテ然ル可キダト思ツタ又コレハ誠意ノナイ方ダト見タ」大震災後四日頃マデハ全ク通信文通ガ途絶シテイタ為メ地方ノ状況ヲ知ル事が出来ズ、我国全体否世界ガ滅亡シタノデハアルマイカト思ハレマシタ。食料ハ一日以来殆ドナク近所隣リノ方ガ互ニ一握リ位ツツノ米ヲ分ケ合ツテ食フ有様。夜ハ鮮人団及暴徒ガ襲撃スルト云ヒ鮮人ガ井水ニ投毒スル等ト警官ノ報告ニ一同震ヘ上リ、子供ヤ家内ノモノハ暗キ野營ノ中デ休眠モセズ食フニ食ナク寝ルニ食ナク衣服モナクテ困窮極度ニ達シマシタ。此時何ヲ一番頼リニ致スカト申セバ自分ノ郷土ノ人デアリマス。他府県人ハ気心ガワカラズ迂闊ニ乗ツタ

ラ大變ナ事ニナリマス事実ハ沢山アルノデアリマス。其隣デアリマシタ旧藩主並ニ各府県ノ大部分ガ救護所ヲ設ケ、御相談ニ応ジマス通信シタイ方ハ又食料住宅ニ御困リノ方ハ故郷ヘ歸リタイ方ハ来ルト云フ宣伝ビラガ各方面ニ貼ラレタ時ニ若シ我県ハ無イカシラント在浜ノ県人ハ幾度見タカモ知レマセンガ、二十二日迄ハアリマセンデシタ。九月十九日ニ私が旧松山藩主久松伯爵家ヘ伺候シテ閣下ヲ始メ御令息御一同様方ノ安否ヲ管節様ヲ通ジテ御伺申上ゲルト。サア御上リ無事デ居ツタ力心配シテ居ツタト丁重ナル御同情ノ御挨拶猶御困リナラ御出ナサイヨトノ御言葉ニ嬉シ涙ガコボレマシタ。ソシテ十二時少シ過ギデアリマシタノデ管節ガ氣ヲキカセテ、サア御飯ヲアガリト云ハレタノデ罹災後十九日目ニ始メテ正式ニ御膳デ飯ヲ食ベサセテ貰ヒマシタ。其時二思ヒマシタ家族ノモノヤ親友ノ誰彼ハ一握ノ飯スラ食ヘヌト泣イテイルニ自分ガ才膳デ飯ヲ食フ等ハ罰ガアタルト思ヒマシタ。其時マデ同邸ノ御門ニハ旧松山藩諸君ニ告グト云フ広告デアリマシタ。愛媛県ト云フ各ハ記載サレテハ居マセンデシタカラ県ノ救護所ト云フモノハ無カツタノデアラウト思ヒマス。旧藩主ガ如何ニ金満家デアラセラレテモ同ジク罹災セラシタノデアリ昨年来ノ御物入り上ニ此有様デハタマツタモノデナク又県内他藩トノ関係モアツテ愛媛県民全部ヲ救済スル事ノ出来得ナイノハ当然ノ事デアリマシテ速ニ県トシテ何トカシテモライタイモノト思ヒマス。甚タ礼ヲ失スル言カハ存ジマセンガ私ノ感ジタ俣ノ率直ニ申上ゲルトサウ思ツタノデアリマス。其翌日ニ帰浜シタラ東京ノ日々新聞力ニ愛媛県ノ救護所ガ久松家ノ救護所ト合同シタヤウナ記事ガアリマシタ。一体東京ノ震災ハ横浜ノヨリモ寧ロ輕ク急ヲ要

スルノハ横浜デアルニモカカハラズ継子扱ヒニサレテ居リマシテ
二十二日私ガ横浜ヲ出発スル迄愛媛県トシテノ救護所ハ設ケラレテ
居リマセンノデ近所隣リノモノガ出身ノ郷土ヨリ慰問袋ヲ戴イテ来
テ嬉シガツテイルノヲ指ヲクハヘテ見テ居ル事ノ苦シカツタ事肩身
ノ狭カツタ事…

△一寸待チ給ヘ愛媛県カラハ赤十字社支部ノ救護班ガ何百名カ行ツ
タソレヲ三ツニ分ケ一ハ横浜ニ他ノ二組ハ東京ヘ行ツテイルノダソ
レヲ君ハ知ルマイガ其ヲ知ラナイテソナ事云ツタトテ駄目ダ。(其
言ノ野卑ナルコト閣下ノ言トハ思ヘナンダ)

◎何ノ救護班デス病人ノ救護モ尤モ必要デスガ私ノ云フノハ元氣ナ
モノ飢餓ニ迫ツテイルモノヲ救護シテヤツテ下サルマイカト申スノ
デアリマスガ。其救護班ト云フノハ何日頃何処ニ居ツタノデアリマ
スカ。アノ広い横浜ヤ東京ヘ百ヤ二百ノ救護人ガ来タカラト云フテ
モ横浜ハ松山市ノ人口ノ約十倍東京市ハ更ニ其ノ十幾倍以上ノ面積
ト人口ヲ有シテ居ル大都会デアリマス到底ワカルモノヂヤナイ尤モ
新聞カ何カデ広告デモアツタノナラ兎ニ角デアリマスケレドモ…

其モ県人救護チャナイ同胞救助デアツタノデセウ

△ソレガ何ガ不服ナンダト云フ態度デ真赤ニナツテ小生ガ攻撃ニデ
モ来タノデアルカノヤウニ息巻イテ何カ云ヒカカツタ。

◎私ハ攻撃ニ来タノデハアリマセン、県民ノ苦シミヲ見ルニ見カネ
テ且ツハ又同情ニ厚イ我愛媛県民ガアレ程ノ救護品ヲ出シテ居ルノ
ニ其同情ガ京浜間ノ我県民ニ届カヌメ事情ヲ知ラヌ罹災地ノ我県
民ガ郷土民ヲ誤解シテ怨嗟ノ声ヲ放チ郷土民ヲ怨ムコト日ニ甚ダ
シク今ヤ頂上ニ達シテ居ルノデ心配ノアマリ御願ヒニ上ツタノデ攻

撃ニ来タノデハアリマセン。実例ニ就テ申上ゲマスト松山出身ノ或
方ガ数日前ニ私ノ仮小屋ヘ後鉢巻デ腰ニ一ノ刀ヲブチ込ミ日ニ焼ケタ
顔ニ髪ボウ／＼ト生ヤシ一見別人ノ様ナ風デドツカト腰ヲオロシ、
八木君他郷ノ救護状態ヲ見タデセウ我愛媛県ハ何故同情ガナイノデ
セウ三百里ヲ隔テタ異郷ノ空デ家ハ焼カレ家族ハ死シ身ニハ数傷ヲ
負ヒ夜ハ終夜国家ノ為メニ又残レル家族ノ為メニ夜警ヲナシ昼ハ又
食料ヲ求ムレドモ一日アルイテ一升ノ米ニモアリツケスト泣イタ
或者ハ八木君見レバ君モ氣ノ毒ナ生活ヂヤ然シ御互ニコレデハ生キ
テ行ケナイ君ハ郷里ニ家アレド僕ハ親族ト云フテモ遠縁デアル如
何シタラヨイダラウ御互ニ困ルガネ其ハサウト此向フニ芋畑ガアル
皆ガ貰ヒニ行ツテイルガ君一所ニ行カンカ沢山人ガ行ツテイルヨ。

……………ソレハ本当ノコトカ僕ハ昨日来朝飯ヲ一度食ツタギリデ
アル実ハ家族ノモノニ少シデモ多ク食ハセテヤリタイト思ツテ友人
ノ所デ食フテ帰ツタト家族ニ嘘ヲ云フテイタガ腹^マガペコペコ
ダ有難イ行カウト共ニ青木町ノ町端レヘ行ツタ。見ルト土方人足風
ノ男ガ焼跡カラ拾ツテ来タ鉄棒デ芋ヲ掘ツテイタ。其傍ニ百姓ラシ
イ男ガ悄然トシテ立ツテイタ。ソシテオ取リナサイト悲シサウナ声
デ云ツテイルノガ目ニツイタ。ハハアコレハ掘ツテ居ル男ノ凄イ目
付キト権幕ニ恐レテ止ムヲ得ズオ取リナサイヨヤツテ居ルノダナト
氣ガツイタノデ、友人ニ向イテ憐レナ事デス。百姓其自身モ罹災者
デナイカ。自身モ困ツテイルダロウ。百姓ガ本意デオ取リナサイト
云ツテイルノデナイ事ハ君ニモ判明スルデセウ。餓鬼ノ物ヲ畜生ガ
覗ウト云フ事ヲ云フガ、此事ダ。止メヨウ僕ハ食ハズト死ンデモ他
人ノ本意デナイモノヲ窃ンデ一日タリトモ生キ永ヘタクハナイト云

フト、友人モ尤ダト云ツテ引キ返シタコトモアリマシタ。斯カル状態デアリマスカラ何ト力配給ノ道ガツケバ一日モ早ク県人救助ヲ御願ヒ致シマスト歎願シタ。

△知事閣下曰ク止ムナクバ取ツテ食フタラヨイデヤナイカ。(驚イテ開イタ口ガ閉ガラナカツタ知事ニシテ此言アリトハ)

◎「声ヲ励マシ立チ上ツテ」閣下トハ根性ガ違ヒマス。我愛媛県人ニハ人ノモノヲ窃ンデ食ツテ一時半時モ生キテ居ルコトヲ欲スルモノハ一人モナイ。若シカリニアリトセバ、閣下ガ赴任後製造セラレタモノデセウ。吾国ノ武士道ヲ根底カラ破壊シ生命財産ヲ保証シテイル憲法ヲ蹂躪スル様ナ道徳上恕ス可カラザル罪惡ヲ私ハ死ストモ県人ニサセタクハアリマセン。

△知事ハ更ニ話頭ヲ一転シ県人救済ノ為メニハ管理事官ガ十四日ニ東京へ着イテイル君ハ其ヲ知ラナイノデアラウ(事実ハ管理事官ハ県人救済ノ目的デ来タノデハナク一般罹災民救護ノ為物資ヲ輸送スル為メニ来タノデアッタノダ)

◎存ジテ居リマス。私ガ久松伯爵家へ参リマシタノハ九月十九日ノ十一時過ギデアリマシタガ、御家令ノ話ニヨリマスと全邸へ朝カラ見ヘテ居ラレタトノ事デアリマスカラ、横浜ノ事情ヲ御話申タイト思ツテ居ル中ニ伯爵ノ御家令ト私ハ話ヲ致シテ居リマシタリ昼食ヲ御馳走ニナツタリ致シテ居リマシタ為終ニ理事官ガ全邸ヲ去ラレタノニ氣ガツカズ、終ニ御目ニカカル事ガ出来ナカツタノデアリマスガ、来テ居ラレル事ダキハソナ事デ知ツテ居リマシタ。翌々二十一日雨ヲ冒シテ横浜ノ税関へ所用ガアツテ行ク途中愛媛県トシルセル自働車ノアルノヲ見ツケマシタ。其自動車ノ中ニハ県庁ノ御役人ラシ

イ人(アトデ聞ケバ管理事官殿デアツタ)一人乗込ミ余燼ノ中カラ死屍ヲ運ビ出スモノ氣自(息)奄々色青ザメ傷病者ヲ介抱スル者家人ヲ尋ネ歩クモノ等右往左往シテイル中ヲ疾走シテイルノヲ見マシタ。

一体横浜ニ於テハ愛媛県トシテハ何等ノ救済ノ実モ広告モ二十日過ギルモセズシテ平氣ナモノダ憤慨ニ堪ヘヌト思ツテ税関迄追駈ケタノデアツタガ已ニ奥深く這入ラレタノデ空シク引カヘシマシタ。

ソナナ事デ理事官ノ来ラレタ事ヲ知リマシタノデアリマス。罹災民ノ目カラ見ルト邪間ニ来タヤウナ心地ガシマス。コンナ際知事閣下ガ才出ニナラウガ、理事官ガ才出ニナラウガ、一人ヤ二人デ何ノ役ニモタツモノデヤナイト思ヒマス。殊ニ理事官殿ハ愛媛県ヨリ一般罹災民ヲ(同胞愛的)救護スル物品ヲ輸送セラルル任務ノ部長トシテ来ラレタノデ、配給スル部長ハヨコシテナカツタ様ニ記憶シテイマス。

△君ハ自動車ニ乗ル事ガ惡イト云フノカ、如何ナル用向キガアツテ乗ツテ居ッタノカ知ツテヨルカ。

◎不^マ條理ナイ質問ハ御免ヲ蒙リマス。ソナナ用向ワカツテイル様ナラ追駈ケハシマセン。又自動車ニ乗ルノハ惡イト云フノデハナイ。私ダツテ急ナ用事ガアレバ乗リマス。月ニ少ナリトモ五度ヤ六度ハ乗ツテイマス。私ガ申スノハ罹災民ガ重キ荷物ヲ運ビ雨ニ濡レ泥ニマミレテ右往左往シテイル中ヲ何等ノ救済ノ実モ拵ゲ得ナイデ乗り廻ハツテヨクモ平氣デ居ラレルモノダナト常識的ニ私ハ考ヘタノデアリマス。丁度九月十二日ノ正午過ギ四谷見附ヲ五一〇〇ノ素晴シイ自動車ガ着ノミ着ノ俣泥ンコニナツテイル避難民ヲ満載シテ疾駆シテ居タ五一〇〇ハ正シク紀州ノ殿様徳川頼倫侯自家用ノモノデア

ルト知ラレタ昔デ云ヘバ御三家ノ御家柄今日デモ位置ノ高イ方ダ他府県デハコンナ心掛ケノ方モアル位デアリマス。

「答弁ガシドロモドロニナツテ敷カラ棒ニ」

△君ハ横浜港ト云フモノヲ知ランノダナ：

◎失礼ナガラ閣下ヨリハヨク知ツテ居ル様ニ思ヒマス。閣下ハヨク知ツテ居ラレルノデセウネ。

△オレニ詰問スルノカ。

◎詰問モ何時致シマシタ。私ハ十年余リモ横浜ニ居住シ最近迄居リマシタ。横浜ノ港務部ノ主任ノ松本堅作氏ハ愛媛県ノ出身、日本郵船会社ノ支店長河合定久氏ハ松山市出身者デ親シイ間柄デ、港ノ事情ハ大体通ジテ居ルヤウニ自分ハ考ヘテ居ル。殊ニ最近横浜市ノ俯瞰図及ビ海図ヲ描キ輸送ノ有様ヤ船舶ノ位置迄調査シマシタノデアリマス。其ヨリモヨク知ツテ居ラレルラシイ御話故教ヘテ戴キタイノデス。

△君ハ横浜ニ着イテ居ル荷物ガ何時頃陸上ゲガ出来ルト思フカ。

◎平時ト異ツテ居マスカラ確答ハ出来マセン。蓋シ破レテモ潰レテモ三津ヤ高浜ヨリハ劣ラヌツモリデ居リマス。閣下ハ何時頃荷物が陸揚げ出来ルト思召サレル。

△マア数ヶ月向フダネー。

◎折角デスガ数ヶ月後デハ梨ヤ林檎ヤパンノ類ハ腐ツテシマイマスヨ。イクラ罹災民デモ腐ツタモノハ食ヘマセンカラ、一時モ早く陸揚げラシテヤリタイモノデアリマス。他府県デハソレ／＼貰ツテ居ル者モアリマスヨ。

△吾県モ已ニ二部分ハ荷上ゲシテ千葉県民ニ与ヘ感謝状ガ毎日ノヤ

ウニ来テイル。我県ノヤリ方ハ他県ノ模範デアル。県カラ県ヘ直接戴イタノハ愛媛県ガ嚆矢デアルトノ礼状ガアツタト得意ニナツテ述べラレ、猶愛媛県人ニモ行キ届イテイル向モアル筈ダ。貰ハナイノハ君ダケデハナイノヂヤナイカ。

◎私ハ貰ツタモノヲ貰ハンヂヤノ云フ様ナ男カ、男デ無イカ御考ヘニナツタラ判明スルデセウ。松山市長殿ガ親友トシテ紹介ニナツタ人間ガ貴殿ノ考ヘラルヤウナ男デアツタストルト、市長殿ノ紹介状ヲ閣下ハ信用ナサツテイナイ事ニナリマス。市長殿ノ親友ニハユスリニ来ルヤウナ男ガアル事ニナリマス。考ヘテ御覧ナサイ、参百里モ隔テタ関東ノ地カラワザ／＼吾郷土ヘ帰ツテ来テ、其故郷ノ市長殿ヲ偽リ、知事閣下ヲ偽リ、半銭一厘ノ金デモ貰ヒニ来ルヤウナ男デハ御座ラヌ。松山市デモ八木熊次郎ト云ヘバ相当ニ知ラレテ居リマス。京浜間デモ多少信用サレトルツモリデス。恐ナガラ閣下ハ愛媛県ノ知事閣下デアラセラレマシテ、千葉県ノ知事サンデモ、東京府ノ閣下デモナイ筈ト思ヒマス。仮ニ隣家ノ子息ト自分ノ宅ノ子供トガ同時ニ震災デモツテ棟木デ押サレテイタ場合ニ何人デモ先ヅ我子ヲ救ヒ、人ノ子ヲ後ニスルノガ人情デアリ、道徳上カラ云ツテモ決シテ不都合ハナイモノト思ヒマス。私共ハ閣下ヲ親ノヤウニ思ヘバコソ斯ク御願ヒ申スノデアリマス。他所ノ子供ヨリ先ヅ我子ヲ救フテ貰ヒタイノデアリマス。

△前二述べタ通り管理事官ヲヤツテ県人救護モサシテアルシ、三隻ノ軍艦デ送ツタノジャ。ソシテ二十頃カラ宣伝ビラヲ貼ツタリ新聞ニ広告シタリシテイルノダ。

◎尤モソレハ承知シテ居リマスガ、横浜ハマダ九月二十二日マデ（後

デ調ベテ見ルト十月二日迄)何ノ事モアリマセンデシタ。

△君ノ話ハ横浜ノ事カ(コノ一言デ知事ガ如何ニ不誠意デアルカガワカル。仮ニ東京市ニ九月一日カラ救護部ガ置イテアツタトシテモ、米一升握リ飯一ツヲ一日費シテ此疲勞シキツテイル身デ東京迄貫ヒニ行ケルモノデハナイ。其困難ナ事情ハ前記ノ通りデアル。其ニ東京ニ県民救護ノ広告ノ貼ラレタノハ九月二十日以後ノ事デアツタノデアル)僕ノ方ハ各方面ノ人ヲ使用シテ出来ルダケノ事ヲヤツタノダ。
◎一寸伺ヒマスガ、荷物ヲ陸揚ゲノ出来ヌト云フノハ、青年団ガ行カナイノト、輸送部長ヲ送ツテ配給部長ガ行ツテ居ナイノデ荷揚ゲノ手伝ヲスルモノガ無イカラデハアリマセンカ。

△コチラデモ其ヲ考ヘタノデ、本県カラモ青年団ヲ出サス筈ニナツテ居ツタノデアツタガ、出発ノ前晚ニナツテ内務省ヨリ手配リガ出来タカラ上京控ヘロト云フ意味ノ電報ガ来タノダソレデ差止メタノダ。

◎其ノ電報デハ手配リガ出来タト云フテイルガ、實際ハ手配リガ出来タト云フノハ嘘デ、上京ヲ差止メタ理由ノツケヤウガナカツタカラデハナイノデセウカ。青年団ガ邪魔ニナル意味デハナイノデセウ。事實ハ彼ノ水平社ガ水平運動ヲスル為メニ本部カラ全国ノ水平社支部ヘ暗号ノ電報デ宮城ヲ護宮^{マミヤ}スルト称シテ水平運動ヲヤルヤウニナツテイタ事ヲ戒嚴司令部ガ探知シ此際ソナ運動ヲヤラレテハ大変タ、其ニハ上京者ノ身許ヲ調ベテデナクテハ上京ササヌト云フ事ニナリ、青年団ニ混ジテ上京シテハ面倒ダト云フトコロカラ青年団ノ上京ヲ差止メタノデセウ。

△左様其通りナノダ。

◎其ナラ他ニ方法ガアリハシマセンカ、サウ杓子定木ニ此際ヤツテハト思ヒマス。閣下ノ御手加減デ如何様ニモナリハセンカト考ヘマス。又何月何日以後何月何日迄出発ヲ差止ムト云フ事ガ明記シテナイ以上ハ猶更決行ガ出来得ラレルモノト思フ。

△ソレハナラヌ。

◎サウスルト他府県ハ青年団ヲ送り得ラレテ吾県ガ其權利ヲ得ル事が出来ナイト云フ程ノ理由ハ奈辺ニアルノデセウ。

△其ハ差止メノ電報ノ来ナイ内ニ出発サシタカラダ。

◎否、サウデハアリマセン。今日デモ盛ンニ入り替リ立チ替リ入京シテ居リマス。九月十九日久松家ヲ去ツテ中野ヘ向フ途中、新宿駅デ岐阜県ノ青年団ガ隊伍整々ト約百四十名白地ニ赤ク染メ抜イタ岐阜県青年救護団員トシテ乗込ンデ居リマシタ。殊ニコレ等ノ青年団ハ前ニ来ツタ団員ト交代スル為メノモノダト云フニ至ツテハ、他県ノヤリ方ハ模範トスルニ足ルモノデアルト信ジマス。青年団デイケナケレバ宗教団、宗教団デイケナケレバ在郷軍人団ト云フ風ニ各自ハ何トデモナリマス。今カラデモ派遣シテ下サツテ塗炭ノ苦シミヲシテイル県人ヲ救ツテヤツテ下サルワケニハ行キマスマイカ。

◎僕ハベストヲ尽シタツモリダ。此上ハ仕方ガナイ。

△ベストヲ尽シタト云ハレルノナラマダ申上ゲル事ガアリマス。私ガ罹災地カラ帰途神戸港ヘ着イタトキノ京都府、大阪府、神戸市等ノ青年団、宗教団、婦人会其他各種ノ他府県団体ガ二十幾日毛陽ニモ浴シナイ汚レタ私ノ子供、飢ヘタル乞食ノ如キ子供三人ノ頭ヲ暖キ湯ニテ拭キ、髪トキツケ帶結ビ直シ、下駄ハカセ色々ノ慰問品ヲ与ヘ、荷ヲ運ビクレルナド懇切ヲ極メタ歓待振リニ私ハ涙ガ出マシ

タ。其二引カヘ高浜港ヘ二十四日着イタ時ニ誰一人トシテ慰安シテクレルモノモナク、誠ニ不愉快デシタ。ココヨリ上陸スル者ノ大部分ハ愛媛県人デアアルガ此処ヲ通過スルモノハ九州地方ノモノデアアル。其日モ九州方面ノ罹災民ハ空服^{マモ}ニテ上甲板ニ立チ並ビ神戸ノ如キ欲待ヲ受ケ得ラルルモノト思ツテ約一時間、停船セル間サマヨイ歩イテイルニ、一言ノ慰安ノ言葉モカケズ、一品ノ慰問品モ与ヘズ、コレデハ我愛媛県人ハ無情冷淡ナモノノ集リダト思フタデアラウト上陸シタ誰彼ハ皆云ツテイマシタ。私ノ如キモ高浜港デハ何等ノ慰安モ受ケナカツタ。県ノ御役人達ハ着船地カラ六七丁モ隔テイル他ノ棧橋ノ側ノ宿屋ノ庭ニ椅子ヲ並ベ烟草クユラセテ居ルノミデ、出テモ来ズ、汽車ニ乗ラウトスレハ拒絶サレル有様デアツタノデス。コレデハ同胞愛モ県人愛モベストヲ尽シテ居ラレルトハ云ヒ得ラレマイト私ハ思ヒマス。

△ソナナ筈ハナイ。

◎事実デアリマス。高浜港ノ状況ハ私ノ電報ニヨツテ迎ヘ二来テクレタ十幾名ノ親族知己ハ皆知ツテ居リマス。同日上陸シタモノノ姓名ハ県ノ御役人ノトコロヘ連署シテ出テ居リマスカラ聞イテ御覽ニナレバ判明シマス。

「此様な愛媛県始マツテ以来ノ間拔ケ知事ヲ相手ニシタトテ駄目ダト思ツタカラ」

◎私ノ言頗ル過激ニ亘リマシタカハ存ジマセンガ、ソレハ罹災後神経方興奮シテ居ルノト、一ハ県民ノ多数ガ他郷ノ者ニ比シテ一層苦境ニアルノヲ見テ、知事閣下ニ実情ヲ訴フルハ帰国スル者ノ責任ト存ジマシテ申上ゲマシタ次第デ、要ハ一時モ早ク県民救済ノ実ノ挙

ガルコトヲ熱望スル次第デアリマス。サヨナラ。
正二時計ハ午後一時半デアツタ。

景浦直孝先生方ヘ帰り昼食ヲスマセ雑談ヲシテイルト午後四時頃ニナツテ松山市長岩崎一高殿ノ代理トシテ市吏員ガ来ラレタ。其話ニヨルト。大変ニ貴殿^{アナタ}(小生ヲ指ス)ハ憤慨シテ帰ラレタ様子、知事ヨリ電話ガカカツタノデ大略ハ聞キマシタガ、明朝市長殿方面会シタイト云ハレルノデスガ、御都合ハ如何デ御座イマセウ。

○ヨロシウ御座イマス。参上致シマセウ：
今度ノ知事ハ愛媛県始マツテ以来ノ間拔チャナ。

□官領式^{マモ}ノ上ニ腕ガナイト云フ定評デサイ。本年ノ春モ自分ノ子供ヲ中学ヘ入学サス為メニ二カ所デ試験ヲ受ケサス考ヘデ、松山中学ノ入学試験期日ヲ早メタトカ、延期サセタトカデ問題ヲ引起シ随分叩カレ、最近ハ商業会議所ノ問題デ味噌ヲツケ、今又県人保護ノ事デ手ヲカツテイル。此ノ通り少シ低級デス。

等ト三十分程話ヲシテ歸ツタ。

翌九月廿九日午前九時、岩崎市長ヲ松山市役所ニ訪フタ。市長殿ハ已ニ出勤セラレテ居ツタ。市長室ヘ案内セラレテ行クト、野本半三郎氏、倉根助役等県民救助ノ件ヲ話シテ居ラレタリシテ、野本氏ハ久松家ノ營節様ヨリ愛媛県民救助ノ急ナル旨詳細ニ記サレタル書簡ヲ示シテ居ラレタ。

挨拶ガスムト。

市長殿ニ向ヒ昨日ハ失礼ヲ致シマシタ、色々と県民救済ノ事ニ就テ御配慮ニ預リマシテ有難フ存ジマス。実ハ昨日御詔介^{マモ}状ヲ戴キマスト直ニ知事閣下ニ御目ニカカリマシタガ、市長殿ノ御詔介^{マモ}状ハ何

等ノ權威ノナニモナイモノデシタ。何ダカ私ガユスリニデモ来タカ
何ゾノヤウニ始メカラ喧嘩腰デ詰問的態度横平ナル紋切の質問、丁
度警官ガ尋問スル様ナヤリ方デアリマシタ。加之二時間以上二亘ッ
テイルニ茶ノ一杯モ出サズ、烟草ノ火一ツ出サズ、罹災民タル私、
貴殿ノ御詔^{マツ}介アル私ヲ取扱ツタト云フ事ハ私ヲ逆待シタバカリデナ
ク、貴殿ヲ馬鹿ニシキツテイルモノデス。不都合ナ閣下ダ。今日以
後私ハ閣下トハ呼ビタクナイ。

□イヤ其ハ甚ダ御氣毒ナコトヲシマシタ。一体知事ハ歳ハ若イシ、
議論好キデアル。其二君ハ癩癪持チノ上ニ罹災者デ神経ガ興奮シテ
居ラレタモノダカラヨケイニ強クナツタノダ。ドンナ事知事ガ申し
マシタカ。

○前記ノ通りヲ繰返シタ。

□不都合ナ事ヲ云ヒマシタネ。昨夜知事カラ電話ガアツタガ、電話
デハ要領ヲ得ナカツタガ、スツカリ判明シタ。ヨロシイ私ニモ考ヘ
ガアル。八木君三日ニ市会ガアルノダガ、来テ震災談ヲ市會議員及
ビ小学校長達ニ聞カシテヤツテクレンカナ。

○ヨロシウ御座イマス。

ソレカラ市長ハ皆ノモノヲ引連レテ車ヲ飛バシテ県庁ヘ行カレタ。

其日午後四時過市ノ吏員ノ方ガ市長代理トシテ拙宅ヘ来ラレ、

□市長サンモ罹災民救助ノ事ニ就テ非常ニ心配シテ居ラレマシタガ、
御陰^{ミナ}デ知事トノ交渉モウマクツイテ、其結果今日ノ急場ヲ救フ為メ
ニ金参千円乃至四千円ヲ横浜在住ノ愛媛県人ニ金五千円ヲ東京市在
住ノ愛媛県人ヘ送ル事ニシマシタ。就テハ横浜ノ分ハ何処ヘ送ツタ
ヲヨロシイデセウカ。一寸書キツケテ下サルマイカ。猶横浜ノ宛名

ノトコロヘ事情ヲ記イテ通信シテ置イテ下サイマセンカ。

◎ヨロシウ御座イマスト引受ケ、宛名ヲ横浜市青木町東輕井沢
一九四九山内鶴吉ト記シテ与ヘタ。

□有難フ存ジマス御手数数ヲカケマシタ、市長殿カラ重々御ヨロシク。
サヨナラ。

コレテ知事トノ交渉ガ一段落ヲ告ゲタ。

翌朝愛媛新報ヲ見ルト本県出身ノ罹災民ニシテ愛媛県ノ救護所ヲ
知ラヌモノガアルガ、東京ハ久松伯爵家デ横浜ハ青木町東輕井沢
一九四九山内鶴吉方ダト云フ記事ガ出テイタ。驚キ入ツタ事ダ。昨
夜市長殿ノ御世話デ横浜ニ救護所ヲ設ケルコトニシタモノヲ、ソレ
モマダ先方ノ山内氏モ承諾シテ居ルワケデモナイモノガ如何ニ耳ノ
サドイ男デモ恐ラク知レルモノデヤナイ。ソレヲ「マダ県人ニシテ
知ラヌモノガアル」ト云フニ至ツテハ罹災民ヲ愚スルニモ程ノアツ
タモノダ。大方邪推カハ知ランガ県庁アタリノ御役人ノ忠義振リダ
ラウ。

コレヨリ前私ガ述べタ県人救護ノ不備ナ点ハ東京ノ方デハ本県出
身ノ代議士高山氏。横浜市ノ分ハ小生。東京横浜ヲ視察シタ実見談
ハ市會議員田中七三郎氏ニヨツテ新聞紙上ニ発表サレタソレガ、知
事ト面談シタ日ト前後シテ紙上ニ表ハレタ。見ルト折合セタ程意見
ガ一致シテイタ。

十月七日ニ至ツテ海南新聞ヲ見ルト県ノ社会主事談トシテ青年団
ヲ出シテ居ルノハ罹災地ノ近県ダケデ香川県ヤ山口県ヘ向合セタラ
青年団ハ出シテイナイト電報デ知ラセテ来タト知事ニ阿付スルヤウ
ナ記事ガ出テイタ。

笑止千万ナ話タ。内務省カラ青年団ノ出発ヲ差止メトルトコロヘ。オ前ノ県カラ青年団ヲ出シテ居ルカト云ツテ問合セタラ、出シテ居ラナイト云フノガ当リ前ダ。オ前サン泥棒ヲシタカト聞イテ、ハイ致シマシタト返答スル阿房ガ恐ラクアルモノデハナイ。コノ位ノ道理ヲ社会主事ハ知ツテル筈ダガ、乞度コレハ社会主事ノ談トハシテアルガ、アノ人ハソシナ事云フ男ヂヤナイト思ツタ。又青年団ハ出シマセンガ、宗教団ヲ出シマシタトカ在郷軍人団ヲ出シマシタト云フヤウナ返事ヲヨコス県ハ恐ラクナイダラウ。

其日午後田中七三郎氏ニ逢ツテ御互ニアノ新聞ノ記事ヲ見ルト嘘デモ云ツタ様ニ聞ヘテイカン、社会主事ニ逢ツテ話シテ見ヤウヂヤナイカ、不都合ナ話ダト云フノデ午後一時迄中矢社会主事ヲ訪問シタソシテ右ノ事情ヲ話スト。ヤーアレハ僕ノ談トハシテアルガ新聞記者ガ僕ノ机ノ上ニ置イテアル電報ヲ見デヨイ加減ノ事ヲ書イタノダ、殊ニ田中君ナリ君ハヨク知ツテ居ル間柄ヂヤナイカ。君ヤ田中君ノ言ガ間違ツテイルヤウナ意味ニハナツテイナイト思フガ、皆新聞社ノ細工デ僕ハ君ヲ攻撃スルヤウナ事ヲ云ツタ覚ヘハナイノダカラ悪い意味ニ取ラナイヤウニシテクレ給ヘ。

◎シカシアノ記事ヲ見ルト私ナリ田中君ナリ高山代議士ガ云ツタ事ノ中ニ嘘言ガアルヤウニ聞ヘテイカンカラ取消サシテ下サイ。

□明日新聞記者ニ話シテ取消サシマセウ。
愛媛ノ人ハ一隊コンナ小刀細工のナ事ヲヨクヤツテイカン。

馬鹿デモ阿房デモ知事ダノ内務部長ダノ云ヘバ、御無理御尤ト聞イテ共鳴セネバ飯ヲ食フ事ガ出来ヌノハ官吏ノ苦シイトコロナンダ。

御役人等ニハ死ンデモナルモノヂヤナイ。

余ハ罹災民デハアルガ芸術家ノ一員ダ。何者ノ束縛モ受ケナイ。全ク天高くシテ鳥ノ飛ブニマカセ海潤フシテ魚ノ跳ヲ防ゲヌ。自由ハ余等ノ頭上デアルコレヲ思フト、此天職ノ有難味ヲシミジミ感ゼズニハ居ラレナイ。

三、再ビ横浜ヘ単独ニテ。

十月一日迄景浦直孝様ノ御宅デ世話ニナツテイタガ如何シテモ子供ヲ小学校ヘ通ハサナクテハナラズ、妻ヤ老人ヲ当分置イテヨカナクテナラヌ関係上、柳井町ノ大正座ノ跡ニ二階ヲ借り受ケ、家族ヲココニ落ツケ子供ハ松山市立第三尋常小学校ヘ入学サセタ。親友ヤ先輩ガ各所デ歓迎会ヲシテクレタリ、個人デ祝ツテクレタリ、或ハ同窓会員連中ニ招カレタリ、各所デ震災ノ実況講話ヤ図画ノ講話ヤラヤツテ一ヶ月アマリ殆ド眼ノ廻ル様ニ多忙デアツタ。カクテ十月二十日親族知己ニ送ラレナツカシキ郷土ニ老婆ヤ妻子ヲ残シテ午後二時十分高浜港ヲ発シテ尾之道ニ向ツタ。御手洗島付近カラ雨降り出デ日暮レ何トナク心細ク淋シカツタ。午後八時尾之道着九時過ノ汽車ニ乗り翌二十一日午前十一時過名古屋駅着、一応下車シ荷物ヲ積みカヘ一時三十二分ノ参等特別急行ニ乗ラザレバ、江尻ヨリ横浜迄ノ連絡船ニ乗り遅ルル憂ガアルノデ、ソレ迄駅ニテ待チ江尻ニ向ヒ、午後四時四十五分二着イタ。其カラ清水港ヘ急行シ横浜迄ノ連絡船ニ乗ツタ日ハ暮レタ。富士ノ高嶺ガ夕霧ノ中ニ霞ムンデ見ヘル。月ガ出タ港内ハ昼ノヤウニ明ルイ。渡シ船ハ満員ダ。引キ船シテ本船ニ向ツタ岸ヲ船ガ離レル。

月ハ弥々澄ム波ハ至ツテ静波止場ニ吾子、清美、朝子、富美子位

ノ子ガ立ツテ居ツテ渡舟ニ乗ツテ居ル其母ラシイ女ニ、オカアチャン早く歸ツテネー。アイヨマツテイラツシヤイ。等ト呼ヒ交シテイルノガ何ダカ吾身ガ呼バレル様ナ心地ガシテ憐レニ淋シカツタ。汽船ハ慶福丸三七〇〇噸デ午後八時出帆シタ。湯ヲツカヒ弁当ナド求メテ午後十時頃床ニ就イタ。

目ガサメテ見ルト房州鋸山ノ上ニ朝日ガ麗ラカニ差出テ居タ。汽船ハダンく進ンデ横須賀沖ノ海上砲台ノ破壊シテイル側ヲ通り横浜ニ這入ツタ。正二十月二十二日午前八時デアツタ。朝子、清美、富美子等ガ前月ノ今日此港ヲ出タ時ハ暴風雨デ雨ニ洒サレ浮キ沈ミスル仮橋ノ上ニ泣キ叫ビシ事等思ヒ出デ感慨無量デアツタ。港ノ入口カラ人力車ヲ雇ヒ桜木駅ニ向ツタ。沿道見渡ス限リ一ヶ月前トアマリ相違ハナイ。何等復興ノ実ガ挙テイナカツタ。桜木駅前カラ市内電車ニ乗ツタガ車台ガ少ナイ為メカ来ル電車モ乗ル電車モ満員デアツタガ、難義シテ乗ツタ。青木町上反町ノ自宅ヘ歸ツテ見ルト留守番ヲ頼ンデ置イタ和田氏ガ更ニ知合ノ夫婦者ニ留守ヲ頼ンデ置イテ下サツタノデ、其方ガ家取カタツケテ余ノ歸リヲ待ツテイテケレタ。自分ノ住ンデイタ隣家ハ跡カタモナク取除ケラレ前ノ倒レカカツタ小屋ガ二三軒ト桐ノ木ガ淋シク立ツテイルバカリダ。共同水道ノ水ガ昨夜カラ出ダシタトテ付近ノ者ガ喜ビ合ツテイタ。取残サレタ堀ヤ庭木・水道ノアトヲ見ルニツケ、又子供ノ玩具ヤ障子ノ落書ヤ妻ガツツマヤカニ縫フタ足袋底ヤ右下駄等ヲ見テ何トモ云ヘヌ淋シサ心細サヲ感ジタ。午後山内氏宅及久吉方ヲ訪ヒ、午後六時過歸ツテ七時四十分疲労シタ体ヲ床ノ中ヘ入レタ。

四、横浜ハ中々復興シサウニモナイ。

大正十二年十月廿二日再ビ自分独リ横浜ヘ引カヘシタモノノ丸キリ復興モナニモシテイナイ。マダ其俣ノ所ガ多ク山下町等ハ死人ガ毎日煉瓦ノ下カラ何人モ出テ居ル位ダカラタマラナイ。十五日頃カラ動キ出シタト云フ電車モ所謂バラツク電車デ、雨ガ降ツタラ天井ガナイ電車ダカラ中止ダ。水道モマダ出ナイ所ガ多イ。学校ハテントト野天教授デ、コレモ雨ガ降ツタリ風ガ吹クト出来ナイ。其二家ガナクナツタ広野原ダカラ寒イノ寒クナイノテ教師モ子供モ泣キノ涙デアツテイル。震災當時ノ不摂生ヤ疲労デ病人ガ沢山出来ルシ、死亡者ガ続出スルシ其上本震力余震力知ラナイガ殆ト毎日ノヤウニ強弱震ガ襲ツテ来ル。人口ハ次第ニ減ジテ四十七万モアツタモノガ僅二十五万人ホドデ、其他ハ土方人足ガ地方カラ單獨デ入り込ンデイルノダトノ事デアルガ、何シロ不安デタマラナイ。ソレニ妻子ガ郷里ニ残シテアルノデ一層心細クテタマラナンダ。

時恰モ郷里デ二女ノ富美子ガ二階カラ落チテ頭部ヲ打ツタトカ云フ知ラセガアツタノデ、冬休迄待チキレズ十二月十六日早朝三等急行ニ乗ツテ翌十七日正午松山市ヘ着イタ。仮宅ヘ行ツテ見ルト富美子ハ丈夫ニナツテ顔ノ膨レモ大分ヨクナツテイタ。サウシテ今日転宅シタト云フ。新築ノ立派ナ家ニ家族一同ガ喜デ迎ヘテケレタ(柳井町一六八)。景浦様ヤ越智家ヤ田村様ヤ其他ノ知人ガ前回ト全シヤウニ沢山見舞ニ来テケレタ。鯨公ノ御蔭デ約十年目ニ秋祭りモ松山デシ、新年モココデ迎ヘル事ニナツタ。復興ノ新年ダ祝へくト知名ノ方々ガ沢山来テ下サツテ、何時ニナイ賑ヤカナ榮シイ新年ヲ家族揃ツテ迎ヘタ。

五、本震？餘震？

大正十三年一月六日再び妻子ヲ郷里松山へ残シテ一人横浜へ歸ツタ。地震ハ相變ラズ殆ド毎日襲ツテクル。丁度一月十五日ノ早朝午前五時過デアツタ。自分ハマダ床ノ中ニ居タノデアツタガ、遠クカラ何カ押シ寄セテ来ルヤウナ地鳴リガシタト思フト、烈シイ振動ガ起ツタ。オヤ強イ地震ダト思フト同時ニ半分身ヲ起シタ途端、隣室ニ寢テイタ弟ヤソノ妻ノ梅代ガ綾子ヲ抱ヘテ隔テノ障子ヲ引キ開ケテ周章シク飛込シデキテ、兄サン早ク〜ト泣声デ叫ンダ。ヨシト立アガツタガ震動ガ中々ニ強ク立ツテ居ラレナイ程デアツタ。益々烈シクナツテ来ル、棚ノ物ガ落チル障子ガ曲ル柱ヤ棟木ガメリ〜鳴ル瓦ガ落チル泣キ叫ブ女ヤ子供ノ声ガ一時ニ相和シテ物凄ク聞ヘテ来ル。雨戸ヲ引アケ庭ニ下リントシタガ鴨居傾キテ開カズ、三人シテ雨戸ヲ押シ飛バシテ庭ニ転バヤウニシテ下リタ。

庭ハ一面霜柱ガ針ノヤウニ立ツテイル。寝巻姿ノ上ニ素足ダカラ寒クテタマラナイ。マダ盛ニユレテイル。家ノ内ニ這入ルコトガ出来ヌ。近所隣リノ人モ皆素足デ寝巻キノ俣沢山広場へ出テキヨロ〜シナガラヘテ居タ。幸ニ朝餉ノ仕度前デアツタ為メ火災ガ起ラナカツタノハ何ヨリノ幸デアツタガ、九月ノ残存家屋ハ大部分倒壊シタリ傾イタモノヤ死傷者モ少ナクナカツタラシイ。此朝出勤セウト思フト神奈川駅へ出テ見ルト電線ハ切レ水道ハ破裂シ人々ハ九月ノ大震當時ノヤウニ不安ナ顔ツキデ右往左往シテイタ。元町ヘ行く道々到ル所大亀裂ガ出来テイタ。大江橋ノ所へ来ルト号外ガ揭示サレテイタ。水道ノ破裂、汽車ノ転覆、トンネルノ崩壊、市及ビ郡

部ノ死傷者（今度ハ郡部ノ被害ガ甚デアツタ）震源地ハ丹沢山タトノ事デアツタ。人々戦々恟々トシテ流言飛語ガ盛ニ行ハレ此寒空ニ戸外デ火ヲ焼キ野營スルモノモ少ナクナカツタ。真ニ泣面ニ蜂トハコノコトダラウ。

『大正十二年九月一日関東大震災日記』続編、横浜開港資料館保管、請求番号…八木洋美家文書―一三―

【史料五】「郷党と県当局の無情を怨む」

横浜の本県人千余 帰省の八木画伯惨状を語る

松山市北夷子町出身にて十数年前から横浜市青木町上戸町^{ママ}に居を構へてゐた洋画家八木熊次郎氏は今回の震災の厄に遭ひ二十二日まで同地に難を避け専ら県人のために尽して居たが、食糧不足の為め日夜衰へ行く妻子を見るに忍びず、二十四日家族を纏めて一応帰松したが、二十八日本社を訪れて県人悲惨の有様を涙と共に物語った。「横浜市内に居住してゐる県人は約千名ばかりですが今や其の総ての人達は食料不足のために日々に衰へ行き一ヶ月に亘つて一回の水浴もせず汗と垢とで真黒になつたまゝ髯は延びるに任せ恰も乞食同様の悲惨な有様となつてゐる。私共七人の家族で罹災当日即ち本月一日から二十二日まで配給された米は一斗一升で而も此の中七升は七八年も以前の南京米で到底食ふに堪らないものでした。今度私が歸りまして親しく県民諸君に訴へたのは、今回の震災に関して愛媛県人がいかに被災地に悲惨な生命を繋いでゐるかである。勿論一般的には県下を挙つて非常な同情の下に義捐金品を送られた事実を歸松して初めて知りましたが、彼の地に居ては未だ本県から幾千の

義損をして呉れたかは不明でした。他の府県からは夫々青年団や県庁の人達が出張して郵便物の発送とか食糧の配給とかを行ってくれてゐる。そして各県からの慰問袋や白米を夫々の県人は豊に受けてゐるのに独り本県人ばかりは一の慰問袋一升の米も郷里からの恵みを受けないで、他国の人達が喜ぶ様を羨ましさに指を咬へて見るより外はなかった。愛媛県の人達はなぜこんなに冷酷なのであらうなぜ私共県人を救つてはくれないであらと云ふ怨嗟の声は今や県人を通じて一般に喧囂たるばかりでなく他県の人ですら愛媛県はどんなにして居るのであらうと不思議がつてゐる程です。勿論一般的罹災者の救援も必要ではあるが、此の非常の場合に於て県人は矢張り一日も一刻も早く県人の手によって救ふて頂きたい。私は此の窮状を訴へたいと今日宮崎知事を訪問して具さに窮状を訴へたのですが、知事は全然相手にしてはくれません。県としては救護班も出した、米も送った金も送ったと云はれる。然し此の荒漠たる焼け野原に僅に数十人位の看護婦隊を送った位で何になります。私共は来たことすら知りませんでした。他県で出来る事がなぜ本県で出来ないののでせう。知事には県人の悲惨な様は何んにも感じないのでせう。そして今度私共が帰りましても大阪や神戸其他船着きの所々ではそれはそれは丁寧な慰問を受けました。然るになつかしい本県へ足を入れて高浜へ着いた、どうでせう、九州方面へも帰り行く罹災民も多数居る。何れも船の甲板に上つて餓にたる腹に愛媛県の同情を待つてゐる。けれども誰が一言の慰めの言葉をかけてやったか一品の慰問の品を贈ったか、此の人達は各郷里へ帰つて愛媛県をどんなに批評するでせう、そして高浜へ上陸した私達を伊予鉄は拒んで乗せない

と云ふ。之れで罹災民に同情する、県には十分の手段を尽したと云ひ得るでせうか。私は何とも此の上言ふ言葉を持ちません」と感慨深き吐息と共に日に焦げ肉の落ちた腕を撫して熱い涙を流していた。

『海南新聞』一九三三年九月二九日

横浜開港資料館紀要
第三九号

令和六年三月三十一日発行

編集——横浜開港資料館

〒231-0021 横浜市中区日本大通3
TEL 045(201)2100

発行——公益財団法人

横浜市ふるさと歴史財団

印刷——株式会社佐藤印刷所

